
嫌われし鳥の生涯

kotorinakisekai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌われし鳥の生涯

【Nコード】

N4478V

【作者名】

kotorinakisekai

【あらすじ】

嫌われ者の鳥が一羽いた。その鳥は他の鳥達から醜悪な鳥だとして迫害を受けていた。

しかし、この鳥が嫌われる真の理由は『仲間を持たない』からだっ

た。追い詰められた鳥は、自ら死ぬ事を考え始める。鳥の生涯は、そこで終わっていたかもしれぬ。しかし、鳥はそこで死ぬことはなかった。一度死にそびれた鳥は、生涯『死』という概念に囚われるこ

とになってしまふ。

孤独や悲劇、怒りや悲しみの中で苦しみもがく赤き鳥……。
そんな鳥の長い長い生涯を、ここに綴る。

第一話『孤独』（前書き）

今後話が進むと、残酷な表現をする可能性があるのでタグを付けていますが、今回はありません。

第一話『孤独』

ある場所に、一羽の雄鳥が居た。

その鳥はどこか疲れ果てた表情をしながら、湖の水を飲んでいる。すると近くの茂みで、ガサガサと草が揺れる音が聞こえてきた。

その鳥は、天敵が来たのだろうかと、一瞬緊張してその方向を見る。その音の正体は天敵ではなく、その鳥とは別の種類の鳥達だった。しかし鳥にとって、歓迎すべき客ではないことには違いなかった。

「見ろ、あの鳥が湖で水を飲んでいるぞ。なんと気味が悪いことだろう」

「まったくだ。あの真つ赤な羽は、無差別に動物を殺して付いた血の色に違いない。その証拠に、ここまで血の臭いが漂ってくる」

「その上、無駄に体が大きいから恐ろしい！ 翼を広げればまるで鷲の様に巨大で、鋭い嘴と、鋭い爪つばをギラつかせながら飛ぶ姿は、まるで悪魔の使いのようではないか」

「こそこそと……しかしはつきりとした口調で、鳥達はその鳥のことを罵倒する。鳥達の表情から、心の底から嫌悪しているというよりは、その鳥をイジメて楽しんでいる雰囲気を感じられた。」

罵倒された鳥は、特に何も言い返すこともせず、その場から飛び立った。

その鳥は、決して不気味ではない。むしろ、全身の赤色の羽は、太陽の光を反射して鮮やかに輝いている。四本の独特の形をした尾羽は、風にたなびいて美しいし、頭から生えた長い冠羽も、鳥が羽ばたきたびに揺れて目を引く。

翼を広げれば、全長は一メートルほどになる。見る者によっては、言葉を失うほど美しくその姿は映るだろう。

そのような称賛されるべき姿を持っておりながら、他の鳥達から

の罵声と嫌がらせに対して、その鳥は疲れ果てていた。

鳥の体は大きく、嘴や爪も、強力な武器となるだろう。一羽一羽では、この鳥にかなうものはそうは居ないはずだ。本来ならば、他の鳥達はその姿に恐れおののき、平伏することはあっても、迫害するはずなどない。

ではなぜこの鳥は、このような扱いを受けているのだろうか？
それはその鳥は仲間がいないからだ。

鳥が物心のついた時、身体大きさに不釣り合いな小さな巣の中に居た。

親鳥の顔は覚えていない。ただせつせと餌を運んでくるだけの、簡素な愛情しか受けられなかった。少なくとも、自分とはまったく違う姿をしていたような気がする。身体大きさが全く違っただし、羽の色ももつと地味だったと思う。

ある日、自分で餌を取るために巣から飛び立ち、獲物を一匹捕まえて意気揚々と巣に帰ったら、親鳥の姿はすでになかった。親鳥とはそれっきりだ。

鳥は感謝すべきなのだろうか？ 生きていくだけの力がつくまで育ててもらえたことに……。

鳥は恨むべきなのだろうか？ いっそ殺してもらえなかったことに……。

鳥が巣立つてから最初にしたことは、仲間探した。親鳥とすら、薄い関係しか持たなかったその鳥は、愛に飢えていた。自分と同じ仲間を求めて、あたりを飛び回った。

しかし見つからない。何処を探しても、自分と瓜二つの鳥はおるか、赤い翼を持った鳥や、自分と同じくらい大きな鳥を探すのにすら苦労した。

一部分が似たような鳥を見つけても、『お前とは違うッ！ お前とは一緒にするなッ！』と仲間外れにされ、軽蔑のまなざしを向け

られた。

結局、鳥の仲間は見つからなかった。鳥が罵倒されるのは、不気味だからとか、恐ろしいからとかではない。ただ、仲間を持たないから嫌われるのだ。

仲間さえいれば、他の鳥の罵倒に黙ってはいない。いくらでも言い返すし、必要があれば報復もする。しかし、仲間を持たない今の鳥がそれをしたところで、数の力によって、無様に傷つくだけだ。だから、鳥は必死に耐えている。

一年ほどそうして耐えて過ごした。しかし、鳥は決意した。もう一度仲間を探そうと。

今まで鳥は、自分の生まれ故郷の近くばかりを探していた。それは当然だろう。自分が生まれたのはこの場所なのだから、この近くに仲間が居ると考えるのが自然だ。だが、このあたりに仲間はいなかった。なら、仲間達は大きく移動するのかもしれない。

鳥の住んでいる地は、半径三百kmほどの巨大な円島だ。東西南北それぞれに人間の王国が一つずつある。この四国をくまなく探せば、仲間が見つかるかもしれない。

鳥が今居るのは、北の国だ。東、南、西と探していけば、きっと見つかる。

「大丈夫さ。もし仲間が見つからなかったとしても、私を受け入れてくれる土地はきっとある。私が今まで不幸だったのは、ひとえにこの土地が陰湿な場所だっただけなのだ。他の国に行けば、きっとそんなことはあるまい」

鳥は自分にそう言い聞かせて、他の国に向かって旅立った。

しかし、結局扱いは変わらなかった。

鳥が飛ぶ姿はひどく目立ち、鋭い嘴や爪は、凶悪な刃物を連想させた。見たこともない様な深い赤色の羽根は、やはり見る者に恐怖を駆り立てた。

「子供を隠せ！ 悪魔が子供を狩りに来たッ！」

「追い返せ！ 追い返せ！」

「なんと醜悪な鳥だろう。見た瞬間に目を背けたくなる姿というのは、なかなかない」

結局今までと同じ……いや、今まで以上の迫害を受けることとなつてしまった。

たどり着くだけでも苦勞しなければならぬ様な秘境にも行つてみた。こんな厳しい場所に住む鳥はそんなに居ない。だから当然住む鳥は個体数が少ない。故に、孤独という点では嫌われた鳥と同じはずだ。しかし……。

「なんだお前は、恥も知らずに訪ねてきて、一緒に暮らしたいだど？ ここはお前のような、汚れた存在が居ていい場所ではない！ 早々に立ち去れッ！」

誰も住んでいないような場所に居るということは、排他的な意識が強くなる。特別な場所に住んでいる自分達を特別視し、余所者は誰であろうと拒絶するのだ。

鳥は四国すべてを回り終わった。しかし、やっぱり自分の仲間達は一羽も見つけることは出来なかった。

完全に打ちのめされ、生きる希望を失いかけた鳥は、天空に向かって叫んだ。

「ああ、神よ！ この世に私より孤独な者はいませんッ！ どんな生き物であっても、必ず仲間が居ます！ ただ一匹で生きていける生物ですら、世界のどこかには必ず同じ仲間が居るのです！ ですが、私はどうですか？ この島をくまなく探しましたが、私の仲間はおるか、私を受け入れてくれる地すら見つかりませんでしたッ！ 私はこれからどうすればいいのでしょうか！？」

それは孤独な鳥の嘆き。自分ばかりが苦しんでいる不正に対する神への不満。

その時鳥は、神の声が聞こえた気がした。

『ならば死ね』

実に明快な回答だった。声は続ける。

『生きることがただただ苦痛で、お前が今後何も得られることが無いというなら、それはもはや生きているとは言えない。心臓が動くたび、息をするたびに生きる時間が増え、それは拷問となってお前を襲う。逃れたいと思うなら今すぐ死ね。それでお前の苦痛は終わる』

鳥は視線を空から地面に落した。

乾ききった地面が見える。真つすぐ落ちれば間違いなく死ねるだろう。

「……………」

鳥は羽ばたくのをやめた。当然鳥の体は降下する。まっすぐと……徐々に加速しながら……。

「……………ひッ！」

鳥は落ちる途中で羽ばたいた。加速する体、迫る地面、その恐怖に耐えきれず、鳥は羽ばたいてゆっくりと地面に降り立った。

「臆病者めッ！」

鳥の口から、自然とその叫びが漏れた。

「私は臆病者だ！ 死ぬのが怖い！ 死後の世界が怖いわけではない。死が怖いのだ！ どのような方法であつたとしても、私はそれを恐れて尻込みをするだろう！ それ以外に救われる方法が無いと知りながら、それを拒絶する。いくら差別され、穢され、名誉を失つても、浅ましくただただ生きることには執着する！ 死が恐ろしいばかりに！ なんと憐れなのだ……なんと、なんと醜いのだッ！」

鳥は蹲つて泣く。周りをはばかりに、大声をあげながら泣く。幸い、その泣き声を聞く者は誰もいなかった。

しばらく泣いた後、潮の匂いと、ひんやりとした風が鳥を撫でた。鳥が顔をあげると、そこには大海が広がっていた。

第一話『孤独』（後書き）

ファンタジーのつもりで書いていきます。

更新は週に一回程度の頻度にするつもりです。

暗い話になると思いますが、これからよろしくお願いします。

第二話『海上』

鳥は海が良く見渡せる岬に来ていた。あたりには海鳥達すらおらず、静かだ。

鳥はしばらく、潮の香りの混ざった風を浴びながら、ただ黙って水平線の向こうを見つめていた。岬から見渡す限りは、海の向こうにはなにも無く、無限の青い水の地面が続いているように感じられた。

鳥は翼を広げ、一度全身に潮風を浴びてから、海に向かって叫んだ。

「海よ！ 私はこれからあなたの上を飛びます！ 海上の空を駆け、何処までも飛んで行き、大陸を目指すのです！」

海はその叫び声を、波の音で掻き消す。

「笑いますか？ 私のことを？ そうですね、あなたはきっと笑うと思います。たかだか数百キロ程度の島の中ですら、休み休みでなければ飛ぶことができない私です。何百、何千、あるいは何万km離れているか分からない大陸を目指して飛ぶのです。きっと私は力尽き、海の中に落ちてしまおうでしょう！」

鳥は恐らく渡り鳥ではない。島の中ですら、一息で飛びきることができないのだから、渡り鳥であるはずが無い。

しかしだからこそ、島の中で仲間を見つけれなかったということとは、世界にただ一羽の存在であるということを証明している。

「私はあなたの中に落ちてしまおう。ですがこれは自殺ではありません！ 私はあなたの中に向かって飛ぶのではなく、大陸に向かって飛ぶのですから、これはけっして自殺ではないのですッ！

私は……殺されるのです。大いなる存在であるあなたにッ！」

海はただそこにあるだけで鳥を殺す。絶望の淵にある鳥を……。私の絶望を終わらせるには、もはや『死』以外にはないでしょう

！ ならば、あなたが与えてください。誰よりも大きなその懐で、私のことを包み込んでください！ 私のその命のともしびと共にッ！

鳥は最後まで言い切り、大きくはためいて飛び立った。

* * *

鳥が岬から飛び立ってから、四時間ほどが経とうとしていた。飛行距離はせいぜい、一五〇km飛んだかどうかだろう。

鳥は海上二〇〇mという、低い場所を飛んでいた。普通鳥が海を渡る場合、山を越えるくらい高く飛ぶ。それをしないということは、最初から海を渡ることをあきらめているのだ。

「……………」

鳥はさらに低く飛び、海から十数mの高さまで降下する。海の中に飛び込むつもりはない。自ら飛び込まなくとも、やがて力尽きて嫌でも落ちる。今だけは、美しい海を間近で見たいと考えたのだ。

「……………」

飛び込む気などないというのに、自分が海の中に墜落する姿が容易に想像できて、鳥の体は震えた。海に引き寄せられているような錯覚にも襲われる。

さらに海を見つめていると、海の中に影が見え始めた。鳥が呆然としていると、その影はどんどんと数が増えて行き、人間の手のような形に見えてきた。その手の影は、海の中で手招きをして、鳥のことを呼ぶ。早く飛び込めと、早く死ねと呼んでいる。

強い恐怖心に襲われながらも、鳥はその影を見ることをやめられない。やがてその影が、海の中から鳥に向かって手を伸ばし……………。

「うわぁああぁぁー！」

鳥は叫び、首を大きく振って幻影を掻き消し、数百メートルの高さまで一気に上昇する。

「怖い怖い怖い！ 私は死ぬのが怖い！」

鳥は「怖い、怖い」と言いながら涙を流す。涙を流しながら、己の不幸を呪った。

なぜ自分はこんなに苦しまなければならぬのだ？ 自分はただ仲間が居ないだけの普通の鳥だというのに！ それを他の鳥達はどうして受け入れてくれない？ 受け入れてくれないまでも、どうしてそっとしておいてくれないのだ？ なぜ……自分はこんなところを飛んでいるのだ……？

鳥はフツと空を見上げる。自分は今日死ぬというのに、空はどんなよりと曇り、落ち込んだ気分が、さらに沈み込んでしまった気がする。今日くらいは雲ひとつない、青々とした空を見せて欲しかったのに……。

いや、これでいいのだ。これから自殺するというのに、空が晴れ渡って、晴れ晴れとした気持ちを駆り立てられるようではまるで皮肉ではないか。どんよりとした空の方がこの場合はむしろふさわしい。

ああ、それより雨が降りだしたらどうしよう？ 雷が鳴り始め、嵐になったらいったいどうしたら？ そうしたら自分は誰に殺されるのかはつきりしない。自分を殺した相手くらいは覚えておきたいというのに……。

(……変わらないか。誰に殺されようと、それは私より立派な存在には違いないのだから……)

鳥は心の中でそう呟き、儂げに笑って目を閉じた。

「死にたく……ないな……」

すると、空から温かな光が自分を刺したような気がした。雲に切れ間でもできたのだろうか顔あげると、鳥はその光景に啞然とした。

「怖い怖いと呟きながら、海の上を飛ぶのは一体誰ですか？」

鳥が見た光景は、強い光をまとった人間の女性が、ゆっくりと雲

の間から下りてくる姿だった。

「お前ですか？ 悲痛な声が空の上まで聞こえてきましたよ？」

「あ、あなたは誰です？」

「私ですか？ 私はこの世界を創った者の一人です」

世界を創った。ならばそれは神だ。そのいで立ちからも、他の生き物とは違う次元の存在であることが感じられた。この世界を創った……創世の女神。

「お前はそんなに怯えながら飛んで、一体どこへ行こうというのです？」

「た、大陸です。私の住んでいた島には、私の住む場所が見つかりませんでしたから……」

「大陸へ……？」

女神は鳥を見つめて、少し考えてから口を開いた。

「それはやめておいた方が良いでしょう？ お前の体はそんな長距離を飛ぶことができるようには見えませんし、こんな低いところを飛んでいたら絶対にたどり着けません」

女神に大陸までたどり着けないだろうことを予言された……。ならば間違いないとどり着けなことなどできまい。途中で力尽きて落ちるのだろう。鳥は薄く笑った。

「それでいいのです。分かっていますから……」

「お前……自殺するつもりですか？」

「自殺ではありません。……私は殺されるのです、海によって殺されるのです。私は大陸に向かって飛んでいるのですから、海に落ちて死ねば、それは海によって殺されたことになるでしょう？」

不思議と穏やかな気持ちだった。最後に女神と出会うことによつて、心の整理が付いたのかもしれない。しかし、女神は厳しい表情をしながら鳥を見た。

「いいえ、お前のそれは自殺です」

鳥はハツとして女神を見返す。

「お前は、大陸にはたどり着けないことを知った上で飛び立ったのです。途中で力尽き、海に落ちて死ぬことを理解していたなら、お前は自殺するために飛びたったのと同じです。勝手に海を殺害者に仕立てることはおやめなさい」

鳥は俯いた。確かに女神の言うとおりだ。これは自殺以外の何物でもないだろう。だが……。

「私は……私には自殺する勇気などありません！ 尻込みしてしまふのです！ 死が恐ろしくて耐えられない……それだけの勇気があれば、とつくに海の中に飛び込んでいるはずですよ！」

「勇気という言葉を使うのはおやめなさい」

女神はびしゃりと言った。

「勇気とは尊いもの……。善の行為を行う時、その障害に立ち向かう思いのことを言います。対して自殺は暗い行為。どうしようも無く行き詰まり、生きる希望を失った者がする最終手段です。己の信条や思想から、何かを訴えるために死ぬ者もいるでしょうが、死はそれだけで暗いものなのです」

今から死のうとしていいる鳥にとって、その言葉はつらいものだった。女神と顔を合わせないようにすつと俯く。

女神はそんな鳥に構わず続けた。

「お前は『殺される』と言いました。確かにお前は殺されるでしょう。お前自身によって」

「それは、どういふことですか……？」

「『自殺』は、自分を殺すと書きます。『自死』……自ら死ぬとは書きません。だからあなたは確かに殺されます。しかしお前を殺すのは海ではなく、お前自身。故に、お前がしようとしていることは、間違いなく自殺なのです」

女神にはつきりと言い切られ、鳥は沈黙する。

「私は自殺が間違っているとも、自殺が悪だとも言いません。しかし、『勇気』という言葉を使い、自殺を美化するのはおやめなさい。」

どれほどの思いによって自殺を決意したとしても、自殺は所詮自殺です。非常に暗く、悲しい最終手段。それに対して『勇氣』という言葉を使うのは間違いです」

黙って聞いていた鳥が、その女神の言葉に語気を荒げて叫んだ。

それは反論と呼ぶにはあまりに感情的で、悲痛な悲鳴のようにも聞こえた。

「だったらなんだというのですか？ 神は私の問いかけに対し、『死ぬ』と答えました！ 苦しみしか残っていないのならば、むしろ死んでしまえと言ったのです！」

鳥は聞いた。天空に向かって、『どうすればよいのか？』と叫んだ時、『死ぬ』と答える神の声を……。

「神はお前の問いかけに答えてはいません。もし、そのような声が聞こえたとしたなら、お前自身が答えたのです。世界には絶望しか残っていない。生きることは拷問に過ぎない。ならば、死んで解放されてしまえ。お前の心の中がそういう思いで満ちていたから、神の代わりにお前の心の声が聞こえたのです」

「だが、他にどうしようもないッ！」

鳥は女神相手に構わず叫んだ。

「私は孤独なんだッ！ 世界にただの一羽も仲間が居ない。つつましく暮らそうと思っても迫害される。ただ生きることすら私にとつては苦痛になるんだッ！ だったら、死んでも楽になりたいと思うのは当然じゃないかッ！」

女神は表情を変えずに、静かに鳥に問いかけた。

「では……お前が静かに暮らし、迫害を受けることのない土地があったとしたなら、お前は生きようと思いませんか？」

「当たり前だッ！」

女神は鳥の目を見据え、その言葉が嘘ではないことを理解する。

「ならば生きなさい」

その瞬間、大きな雷が近くの雲から発生し、轟音を立てて海に落ちた。

強烈な閃光と轟音で、鳥は一瞬視力を失う。気がつくと、女神は居なくなっていた。

「……幻？ はは、絶望の極限状態にあるのだ、幻覚くらい見てもおかしくはないか……。ん？ あれは……」

そう遠くない所に、海にポツンと浮かぶ孤島が見えた。

第三話『遭遇』

鳥は発見した島の周りをゆっくりと旋回していた。あまりに都合よく現れたこの島を訝しんでいるからだ。

幻覚から覚めると同時に島を見つけるなど、偶然にしても気持ちが悪くないか。

(幻覚……あれは幻覚だったのだろうか?)

幻覚にしてははつきりしていた。現れた女神からは、他の生き物からは感じられない神々しさが、確かにあった。

とりあえず鳥は、この島に降り立ってみることにした。これ以上飛び続ける体力はない。この島を無視して飛び続ければ、必ず海に落ちることになるだろう。

地面にぶつかって死ぬのを恐れた鳥が、死ぬのが分かっているこの島を無視できるはずが無い。死ぬ恐怖に襲われても逃げるできないよう、退路を断つために海に飛び立ったが、こうして足場が見つかったのは決心も鈍る。

それに……。

『では……お前が静かに暮らし、迫害を受けることのない土地があったとしたなら、お前は生きようと思えますか?』

『当り前だッ!』

女神は鳥の目を見据え、その言葉が嘘ではないことを理解する。

『ならば生きなさい』

あの幻の中の女神の言葉……。あれが嘘でないのならば、この島は鳥が幸せに暮らすことのできる土地だということ……。

幻とはいえ女神の言葉なのだ。縁起が良い島には違いない。

「絶望の淵にある者ほど、なかなか死ぬことはできないらしい」

鳥は一言呟き、島にめがけて降りて行った。

* * *

鳥は島に降り立った後、恐る恐る島の中を探索し始めた。しばらく調べていると、あることに気が付いた。

他の鳥が一羽も居ないのである。

耳を澄ましてみても、聞こえてくるのは虫や小動物の鳴き声ばかり、この鳥のことをあれだけ口汚く罵倒した他の鳥達の声は全く聞こえない。

あまりにも異常な現象。鳥は虫や他の動物達と違い、翼をもつ。他の動物達よりも、自由に陸地の移動ができるはずなのである。それなのに、今この場所に自分以外の鳥は居ないらしい。首を傾げながら、鳥はさらに島の中を調べ続けた。

すると、軽く見まわしただけでも、十分すぎるほどの食糧が見つかった。木や花に実った果実、食べ慣れた虫や小動物達、島の中心から湧き出る汚れのない真水。これだけあれば、鳥が暮らしていくのには苦労しない。

しかも、島には鳥の外敵となりそうな動物達は見つからなかった。居るのは、木の実や虫を主食にしている小さな動物達ばかり。無防備に眠っていても、殺されることはまずない。

「はは……あはははははッ！」

あらかた島の中を見て回った後、鳥は歓喜した。

「私はついに理想の地を手に入れた！女神様、私はあなたに感謝します！海上で見たあなたの姿は、幻などではなかったのですね？あなたは孤独な私を救うためにこの島を用意してくれました！

この島でなら、私は幸せに暮らせるでしょう！これから毎日あなたのために祈ります。島の中央にそびえるあの崖に祠（ほ）を作り……」

その時鳥は、近くの茂みが揺れる音を聞いた。

その茂みを見ると、一部分だけが大きく揺れていた。今日は風など吹いていない、明らかに何かの動物が揺らしたのだ。

「誰かいるのか？」

鳥はその茂みに向かってそう聞いた。すると返事の代わりに、再び茂みの揺れる音と共に、翼ではためく音が聞こえた。

「羽音……？ 鳥が居るのか？」

鳥の気分は一気に下がった。自分以外には居ないと思っていたのに、やはりこの島にも鳥は居たのだ。また迫害の日々が始まる……。しかし、その羽音はこちらには向かってこず、島の内部に逃げるように消えていった。

「……逃げた？」

羽音が遠ざかったことで、暗い感情が湧きだしていた鳥の思考が冷静になった。

なぜ逃げる？ 逃げる必要などないではないか。迫害されるのはいつもこの鳥の方、他の鳥は数にものを言わせて笑っていればいい。しかし、茂みから聞こえた羽音の主はそれをしなかった。

気付くと鳥は、羽音を追いかけて飛び立っていた。羽音の主と会って何をしようと思った訳ではない。単純に気になったのだ。

羽音の主は、鳥が追いかけてきたことに気付き、一層大きく翼をはためかせて森の中を飛んだ。間違いなく鳥の羽音だ。虫はこんなに大きな音を立てて飛んだりしない。

突如始まった鬼ごっこは、数時間にも及んだ。

羽音の主は、けて島の森の中から上空へ出ようとしなかった。見つからないように、木と木の合間を縫うように飛び、鳥の追跡を撒こうとした。

鳥は鳥で、休まず飛び続けることに苦痛を感じなかった。疲労を忘れてしまうほどに、逃げる羽音の主のことが気になるのだ。

日が傾き始めた頃、逃げていた羽音の主が観念したのか、地面に降り立った音がした。

鳥は急いでその場に向かう。するとそこには、息を切らせて跪いている赤い鳥が一羽いた。

「許してください！ 許してください！ 私は何もできない、できそこないの鳥でございます！ 命ばかりはご勘弁をッ！」

跪いていた鳥が、声と体を震わせながらそう叫んだ。あつけにとられた嫌われし鳥は、何も言わず怯えた鳥を見つめた。

怯えた鳥の声を聞くと、雌めすの鳥であるようだった。風貌も小柄で飾り羽も少ない。

「わ、私は平和に暮らせればそれで良いのです！ けして迷惑をかけるようなことはいたしませんので、どうかこの島に置いてくださいッ！」

何も言わずにいると、嫌われし鳥が気分を害したと解釈したのか、雌の鳥はさらに体を震わせながら叫ぶ。この島に置いてくれということ、別の場所から来たのだろうか？

「お主はこの島に来たばかりなのか？ なぜこの島に来た？」

「は……はい。私の故郷は、海の方こうにある大陸なのですが、私はそこで虐げられていたので……」

雌の鳥のその言葉に、嫌われし鳥は一瞬胸が苦しくなった。

* * *

『どうか……どうかお許してください！ 私はまだ死にたくありません！』

巨大な大陸の海岸線。その場所で、あまりにも異様な光景が広がっていた。ありとあらゆる鳥が集まり、海岸線を埋め尽くしていたのだ。

黒や白、青や緑、米粒に色を塗り、港の模型に器用に乗せていったかのような光景。それがかすんで見えなくなるくらい遠くの海岸

線まで続いていた。

しかしこれは模型などではないし、カラフルな色のつぶつぶは、色を塗った米粒ではなく鳥達だ。

鳥、鳥、鳥……数えることすら馬鹿馬鹿しくなるくらいの鳥達が海岸線に集まり、同じ方向に向かって叫んでいた。

『飛べ！ 飛んで行ってしまえ！ お前はあまりに汚らしい姿をしている！』

『見よ、この海岸線に集まった我々のお前に対する憎悪を！ 皆お前に対する嫌悪感で団結している。なかには、お互いが天敵である者たちでさえ、お前への感情では一致している』

『今すぐに消えろ！ さもなくば、俺達がお前を引き裂いてしまおうぞ！』

鳥達は声を荒げて、口汚く呪いの言葉を吐く。たった一匹の赤い鳥に向かって……。

『お願いです！ 私は死にたくはないのです！ お邪魔はしません。姿もお見せしません。ただ、最低限の食事をし、誰の目にも触れない深い森の中で暮らします。なのでどうか命ばかりは……』

赤い鳥は港の海を飛びながら必死に叫び、なんとか陸に戻ろうとして近付く。しかし、何度近づいても、罵声と共に追い返されてしまふのだ。

『目に触れなければいいという訳ではない！ お前の体から発生する臭いですら不快感を覚えるのだ。お前はただ存在するだけで害を撒き散らす！』

赤い鳥は追い返されても必死に叫ぶ。

『臭いが気になるというのなら、一日に三度水浴びをします。羽が抜け落ちても気にしません。臭いが落ちるまで水を浴びて、それでも臭いが消えないというのなら、花の蜜を浴びてごまかします。ですから……』

『黙れッ！　そういう類たぐいの臭いではないわッ！　薄汚い体から発生する、負け犬のような臭いが耐えられないのだ。それはどれだけ洗っても、どれだけ花の蜜で誤魔化してもお前から漂い、我々を不快にする！　それを断ち切るには、お前を海の方ほうに追いやる他ないのだ！』

海岸の鳥達は、それに同調して鳴き声をあげる。その声は、赤い鳥を排除しようという攻撃的な思いも感じられた。

『そんな……』

赤い鳥は絶望的な声で鳴く。

『早く消えてしまえ！　我々は何もお前に死ねと言っているのではない。この大陸から出て行けと言っているのだ。運が良ければお前にぴったりの島が見つかるかもしれないぞ？』

この大陸から出たことのある鳥などいない。海の方ほうに島がある補償などない以上、鳥達は死ねと言っているのと同じこと……。しかし結局赤い鳥は抗うことができないまま、果てしなく広い海に向かって飛んで行くことになった。

* * *

「そうしてたどり着いたのがこの島でございます……」

自分がこの島にたどり着きたいきさつを語り終え、雌鳥はほろりと涙を零した。

「果てしなく続く海の上を、千切れるほど首を振りながら陸地を探して飛びました。そうしてようやく見つけたのがこの島でございます。やっと平和に暮らせる地が見つかったと思いましたが、貴方様を見つけて……」

雌鳥にとつて他の鳥は恐怖の象徴。何もされていなくても恐怖を駆り立てられる存在なのだ。

「朝も昼も夜も貴方様のために働きます！　けしてご迷惑をかけま

せん！　なのでどうか私もこの島に置いてください！　私は生きていのです！　どれほど絶望的な世界であっても、死後の世界に比べればきつと幸せに違いないのです！」

雌鳥は再び体を震わせる。

「私は今苦しまずにここで息をしたいと思います。これが死後の世界ならどうでしょう？　空気も無く、永遠にもがき続けなければならぬ世界かもしれません。私達は飢えますが、食べ物を探せば見つかります。これが死後の世界ならどうでしょう？　食べ物はなく、永遠に飢餓に苦しまなければならぬ世界かもしれません。私はそれを思うと、堪らなく恐ろしいのですッ！」

それは本心の様であった。雌鳥の口調は、とても嘘を言っているようなものではない。

「……似ている」

嫌われし鳥はすべての話を聞き終わった時、そんなことを呟いていた。

「あ、あの……今なんと？」

「私の境遇とよく似ているのだ。お主が今話してくれたものとな…

…」

嫌われし鳥は、自分がこの島に来るまでの話をした。すると雌鳥は、すっかり恐怖が薄れ、共感したようだった。

「では……貴方様も故郷を追われた身なのですか？」

「私の方が情けないさ。私は死ぬために海に飛び立った。しかしお主は、厳しい境遇の中でも生きたいと願っていた。お主の方が遥かに強い心を持っている」

「そ、そんなことはありません……」

雌鳥は褒められたことで照れてしまったのか、静かに俯いた。嫌われし鳥はそんな雌鳥のことをもう一度見た。

（本当に……似ている）

嫌われし鳥は心の中でそう呟いた。

境遇もそうだが、体に関しても、自分と目の前の雌鳥はよく似ている。赤い羽根をもち、自分よりは小柄だが、平均的な鳥の大きさよりは巨大だと思う。嘴や尾羽などの細部は異なるが、それは雄と雌の違いだと言ってしまえば納得できる。

もしや……この雌鳥が、自分の探していた仲間なのでは……？

「あの……もしよろしければ名前を窺っても構いませんか？」

嫌われし鳥が考え込んでいると、雌鳥がそんなことを聞いてきた。嫌われし鳥はそれに答えようと口を開いたが、あいにくと名前は出てこなかった。

「私には名前が無い。親鳥はすぐに居なくなってしまったし、他の鳥が私を呼ぶ時は、『穢らわしい鳥』と呼べばすんでいたからな」

「屈辱的な呼び方だ。まさかこの呼び名で呼んでくれとは言えない。……聞いておいてなんですが、私も名前と呼べるようなものはありません。貴方様と同じで、悲しい呼び名で呼ばれていたのです」

雌鳥の表情が少しかける。しかし、その後で明るい表情を作った。言った。

「私達で名前を考えませんか？」

「名前をか？」

「はい、これからここで暮らすのですから、一緒に行動することも多いと思います。そんな時に名前が無いのは不便だと思いますので」

「そうか……名前か……。うむむ、急に考えると言われてもな……。嫌われし鳥は首をひねって考えたが、なかなか思いつかない。

「実は、私に少し考えがあります。私の故郷の神話に、『鳳凰』という赤い聖鳥が登場します。この聖鳥は二羽の赤い鳥のつがい、『鳳』が雄。『凰』が雌でございます。この漢字を名前に使うのはどうでしょう？ その、私達の姿もよく似ていますし……」

雌鳥はそう言って、はずかしように視線をずらす。雌鳥の方も、

自分はもしかしたら仲間の鳥なのではないかと思っていたらしい。
「良い考えだな！　しかし、神話に登場する聖鳥か……。私達がそんな漢字を使つてよいのだろうか？」

「この島には文句を言う者はいません。堂々と名乗つて胸を張りましょう！」

雌鳥はそう言った。案外、したたかな性格をしているのかもしれない。

「ふーむ、そうだな……。ならば、私の国の風習も取り入れよう。私の故郷では、男が生まれると『郎』。女が生まれると『子』という漢字を使うことがある。どうだろうか？」

「素敵だと思えます！　私の国の文化だけでは申し訳ないと思つていましたので」

雌鳥は嫌われし鳥の申し出を喜んでくれた。

「では私は『鳳郎』。お主は『凰子』……か？　うーむ、私の方とはかく、お主の方は語呂が悪い気がするな……」

「では、私の方の読み方を変えましょう。凰という字は、『こう』とも読めます。私のことは『凰子』とお呼びください」

「よし決まった！　今から私は鳳郎。そしてお主は凰子だ。これからよろし……うわッ！」

名前が決まった途端、凰子は鳳郎に飛びついた。

「ああ、嬉しい。私は今日から迫害されることも無く。貴方の……鳳郎のような心強い仲間を得て暮らすことができるのですね？」

「……そうとも。私だつてお主のような……凰子のような仲間と出会ひ、幸せに暮らしたいとずっと願っていたのだ……」

自然と二羽の瞳から涙がこぼれおちた。どれほど願つただろう？　ともに悲しみや喜びを共有できる仲間と巡り合えることを……。

今この瞬間、この赤い鳥達はそれを手に入れることができたのだ。

「今日から……」

「私達は……」

「二羽ふたりで鳳凰！」

二羽の鳥の赤い羽根は、太陽の光を反射して、燃えるように美しく輝いていた。

第三話『遭遇』（後書き）

ここまでで、第一部完という感じです

大体三つ四部構成で考えています

第四話『日常』

鳳郎ほうろうと鳳子ほうこが出会ってから、二年以上の時間が過ぎた。

その間にこの二羽の赤い鳥は愛をはぐくみ、二度卵を産んだ。卵の数は二度とも四つ。そのすべての卵が無事に孵り、島に住む赤い鳥の数は全部で十羽となった。

そして今年も鳳子が三つの卵を産み、鳳郎は心から幸せを感じていた。

しかし、大きな幸せを噛みしめている中で、鳳郎は小さな不安を抱えているのだった。

* * *

「父さん。今日はこれくらいで良いんじゃないですか？」

一番目に生まれた息子鳥 名前を敬介けいすけという が、今日集めた食料を見ながら鳳郎にそう言った。

「ふーむ、そうだな。あまり採りすぎるのも良くない。母さん達も腹を空かせているだろうから、戻るとしよう」

鳳郎はそう言うと、あたりで食糧探しをしている子供達を呼ぶために、一声鳴いた。

「んー！ やつと終わりかあ。今日は暑いし、この後は水浴びに行こうかな」

傍に居た五番目に生まれた娘鳥 名前を茜あかねという が、バサバサと羽をはためかせながらそんなことを言う。すると敬介がたしなめるように茜を睨んだ。

「まったくお前は……ろくに食料を探しもしないくせに、休むことばかり考えて……」

「えー、でも敬介兄さん。せっかく集めた食料を、他の小動物に取られないように見張るのも立派な仕事です。私が働いていないよう

に言つて、偉ぶるのはずるいと思います」

「見張りは三羽もいらぬ。俺と父さんだけで十分だ」

「……それがずるいつて言つてるんだけどなあ」

茜が呟くように不満を口にすると、敬介がさらに小言を言う。茜は舌を出してそつぽを向き、果物をいくつか掴んで飛びあがった。

「あ、コラ！ まだ話は終わつていないぞ、何処へ行く!?」

「母さんに食べ物を届けに行くのです。私はその後で、自分の食べ物を探しますよ」

敬介は後を追つて叱りつけたい衝動にかられながら、この場を離れる訳にも行かず、翼をはためかせた。

「父さん！ あんなわがママが許されるのですか?」

しばしの葛藤の末、敬介は微笑ましそうに兄弟のやり取りを見ていた鳳郎に、自分の不満をぶつけることにした。

「あいつは兄弟の中でも一番甘えん坊だからな。食料を一番に持つて行つて、褒めてもらいたいのだろう」

「だからと言つて、叱りもせず……」

「皆で集めた食料は食べずに、自分で食糧を探すと言つていたのだから、それが罰だということが良いではないか」

「父さんがそのように甘やかされるから……」

「やれやれ、また言つているのですか兄さん?」

鳳郎の呼び声を聞き、食料を探していた他の二羽も帰ってきた。

六番目に生まれた息子鳥　名前を周しゅうという　が、呆れ顔で兄を見ながら地面に降り立つ。

「茜姉さんのわがママは今に始まつたことではないでしょう? そのように怒つてばかりいては、兄さんも疲れてしまつてしまうよ……」

「だからと言つて放つておくわけにもいかないだろう!　叱る者が居なくなれば、あいつはいつそダメになつてしまつぞ!」

「ふう……」

これ以上反論すれば、兄の怒りの矛先が完全に自分に向くことを

知っている周は、そこで沈黙する。

「父様、これ……」

最後に生まれた娘鳥　名前を澄乃すみのが、小さな木の実を鳳郎に差し出す。

「おお、私の好きな木の実だな。ありがとう！」

「はい……」

褒められた澄乃は、顔を伏せて照れる。鳳郎はそんな娘鳥の頭を、軽く撫でてやった。

「お前達は先に戻っていてくれ。私は祠ひらによつてから帰ることにする」

「はい、分かりました。母さんにもそう伝えておきます」

敬介がそう答え、子供達はそれぞれ自分達の分を掴んで飛んで行った。

鳳郎はそれを見送ってから、島の中央に向かって飛んで行った。

* * *

島の中央にはとても高い崖があり、そのてっぺんには、鳳郎が二年前に作った祠がある。

とは言つても、別に立派なものではない。細い木を何段にも組み上げ、太い木の枝をそこに立てただけのものだ。

しかし、それだけのものを作るのも、鳥にとつては重労働だった。それに、大切なのは見た目ではなく、どのような思いを持ってそれを組み上げたかだ。鳳郎はこの祠に祈るのを忘れた日はない。

鳳郎は祠の場所につくと、食べ物をいくつか供え、姿勢を低くして祠に礼をする。

「女神様。今日も健やかに過ごすことが出来ました。病に倒れることなく、嵐に襲われることも無く、私達は幸せに暮らすことができ

ています。これもすべて、この地を与えてくださった女神様のおかげでございます」

鳳郎は淡々と祈りの言葉を口にする。子供達の中には、そんな鳳郎の姿を奇妙な目で見て、笑う者もいる。

鳳子さえも、直接馬鹿にして笑うようなことはしないが、女神の存在は信じていないらしい。実際にその姿を見ていないのだから無理もないが……。

実際に女神の姿を見、その言葉を聞いた鳳郎だけが、女神に対して敬いの心を持っている。

「さて……」

鳳郎はいつもの祈りを終えると、大きく羽ばたいて空に舞い上がる。

中央にそびえるこの崖からは、島のどこにでもすぐに向かうことができる。向かうは愛すべき家族の待つ場所だ。

爽やかな風と暖かな日の光を浴びながら、鳳郎は優雅に飛ぶ。いくら飛ばないうちに、目的地に着くことができた。

「ああ、鳳郎。おかえりなさいませ」

ずっと巢の中で卵を温めていた鳳子が、鳳郎の姿を見つけて頭を下げる。子供達は食事をしてるところだったらしい。

「ただいま鳳子。変わったことはなかったか？」

「はい、とても穏やかに過ごさせていただきました。……すみません、私はずっと巢の中で休んでいて……」

「何を言う。お前には卵を温めるといふ大切な仕事があるではないか。むしろ、外に出してやれなくて済まなく思う」

「ふふ……大丈夫です。子供達が話相手になつてくれますので」

鳳子の横には、二番目に生まれた娘鳥 名前を菜穂なほという

がちよこんと座っていた。そして、その後ろに隠れるように、先ほど餌さがしをしていた末の娘の澄乃も座っている。

「お父様。今度生まれてくる雛達は、何羽が雌で何羽が雄でしょうか？」

菜穂が鳳郎に向かってそんなことを言ってきた。

「さて……そればかりは生まれてみないと……。お前はどちらが多い方が良いのだ？」

「もちろん雌メス鳥が多く生まれた方が嬉しいです。今の兄弟は、雄オスが五羽も居るんですよ？ しかも、茜あんな性格ですから、落ち着いた話ができません。今も虫を追いかけたり、水を勢いよく浴びたりしているでしょう」

菜穂は、後ろに隠れている妹鳥の澄乃を優しい目で見ると。

「私はこの子のような妹が欲しいと思っっているのです。次に生まれる兄弟は、絶対雌メスが多い方が良いです」

「わ、私は茜姉様も素敵だと思えます！」

澄乃は、菜穂の視線を避けながらそう言った。すると菜穂は、そんな澄乃に体を寄せる。

「まったく……お前は どうしてそんなに可愛いのですか！」

「ね、姉様……やめてください……」

澄乃は、菜穂から逃げるように飛び立っていった。

菜穂は、鳳郎と凰子に一度頭を下げ、愛しい澄乃を追いかけて空に舞い上がる。なんだかんだいって、姉妹鳥三羽は非常に仲が良い。これから三羽で集まって遊ぶのだろう。

「ふふふ……賑やかでいいことですね？」

「ああ……そうだな……」

凰子の言葉に、鳳郎は少し歯切れ悪く答える。違和感を覚えた凰子は、首を傾げて鳳郎を見た。

「何か気になることも？」

「いや……その……な」

鳳郎は考え込むように空を見上げた。何かを言おうとしているのだが、言うべきかどうか迷っている様子だった。

「……言い出しにくいことなのですか？」

凰子はあまりに鳳郎が話をしないので、心配になってきたらしい。そんな凰子の様子を見て、鳳郎はようやく話す決意を固めた。

「実は……新しい島を探そうと思うのだ……」

第五話『責任』

早朝。まだ太陽も昇らず、あたりが薄暗い中、鳳郎は島の中央にある祠ミヤに居た。

いつものように祈りの言葉を口にする訳でも、供え物を持ってきた訳でもない。ただ目を瞑り、静かに祠と向き合っていた。

「父上……」

鳳郎がしばらくそうしていると、三番目に生まれた息子鳥 名前を博ヒロという がやってきた。

鳳郎がそちらに顔を向けると、不快そうな表情をしてこちらを見ている。博は、鳳郎が祠に祈るのを良く思っていないのだ。

「やはり、ここに居ると思いました」

「予想が外れて欲しかったという風な顔をしているぞ。そんなに私がここに来るのが気に入らないか？」

「父上がこの場所に来るのを止めるのはとうの昔に諦めております……嫌悪感を抱かずにすむようになるには、まだまだかかりそうです」

博の言葉に、鳳郎は思わず苦笑する。それだけ自分の今の姿は不気味に見えるのだろう。

鳳郎は昨日の鳳子とのやり取りを思い出す……。

* * *

「新しい島を探す……？ なぜそんなことをする必要があるのでですか？」

鳳郎の『新しい島を探す』という突然の言葉に、鳳子は困惑した。「前々から思っていたことだ。このまま家族の数が増えていけば、間違いなく食料が足りなくなってしまう」

今島には十羽の鳥が居る。現時点においては、食料が足りないなどということはない。むしろかなり余裕がある方だろう。

仮に、今鳳子が温めている卵すべてが孵り、そのすべてが順調に育ったとしても、まだ食料は足りると思う。

しかしその先になると苦しくなってくる……。その前に、何か予想だにしない事件が起こり、食料が急に足りなくなるということも十分考えられる。そうなることは何としても避けたい。

「食糧問題は重要だ。食べ物が無くなった時、十羽もの子供達をどうやって育てる？ 私達には、子供を作った以上は育てる責任がある。その責任を果たすためにも、新たなえさ場と住処は見つけておいた方が良い」

「ですが……まだ余裕はあるのですから……」

「お前の気持ちも分かる。島を探すということは、海の上を飛ぶということだ。それには間違いなく危険が伴うだろう。しかし、だからこそ余裕があるうちに取り掛かりたいのだ」

現段階では余裕がある。だからこそ、危険な『新島探し』にも慎重に取り掛かれる。危険なことはせず、安全を第一に考えて行動できる。

これが追い詰められるとそうはいかない。一日も早く新島を見つけないければと焦り、結果危険なこともしなくてはならない。そうなれば犠牲が出る可能性が高くなってしまふ。

「それに、私達には女神様が付いている。きっと加護を与えてくれるに違いない」

「……………」

鳳子の表情が曇る。女神の存在を信じているのは鳳郎くらいだ。だから女神の名前を出しても、安心させるどころか不安を煽ってしまふのだ。

「鳳郎……。あなたが何を信じていても、何を抛り所にしても

私は文句を言いません。しかし、私には信じられないのです。女神などという存在が本当にいるのでしょうか？ あなた以外……あなたさえも、一度しかその姿を見ていないのですよ！？ それも夢うつつとも言える極限状態の中で一度きりです。私にはそんな不確かな存在が、加護を与えてくれるとはとても思えません！ そんな根拠のないお守りを持たせて、危険な海の上を飛ばせる訳にはいきませんッ！」

鳳子は必死に訴えかけた。やはり安心させるどころか、錯乱させてしまったようだ。

鳳郎はなだめるような口調で言った。

「そうだな。きっと女神様は私達を守っては下さらないだろう。お前の言う様に、存在自体も怪しいのは確かだ」

「だったらッ！」

「だがな、そんな不確かな存在でも、心を落ち着かせることくらいはできる。実際に守ってもらえることはないかもしれない。……だが、それでいいのだと思う。神や仏というのは、信仰することにより心の不安を和らげ、安心することができる。もし祈るだけで加護が与えられるなら、それに頼って墮落してしまうかもしれない。だから、心が安らかになるくらいが健全で良いんだよ」

鳳郎は女神の存在を信じてはいる。だが、その女神が実質的に何かをしてくれることをあまり期待していない。

女神は静かに見守ってくれている……。見えない所で……実感のない所で助けてくれている。そう信じて心を落ち着かせることこそが女神の役割。だから、女神が存在しているか存在していないかは大した問題ではないのだ。

そんな鳳郎が今でも祠に出向いて祈るのは、加護を与えて欲しいというより、感謝の念を伝えたいという気持ちが大い。女神に出会ったあの日に、自分が幸せを手に入れられたことは間違いないのだから。その後、加護が与えられていなかったとしても祈りをやめ

る理由はない。

「無理はしない。実は半年前から体力を付けているのだ。ちょっと海の上を飛んでみるだけさ……」

「……本当ですね？ 危ないことはありませんね？」

鳳郎になだめられ、凰子はやっと納得する。鳳郎の言う食糧問題が重要なのは凰子も分かってはいる。近い将来、食料が不足することが分かっているなら、親の責任として子供達のために多少の危険を冒さなければならぬ。

「ねえ、パパ、ママ……」

話がまとまると同時に、後ろから声をかけられた。

声をかけてきたのは、七番目に生まれた息子鳥 名前を智一ともかずという だった。その表情を見ると、今の会話はすべて聞かれていたらしい。

「パパお出かけしちゃうの？」

「そうだよ、このままでは島が狭くて住めなくなってしまっからね。ご飯も足りなくなってしまうかもしれない。そうなるのは嫌だろう？ そうならないためにパパはお出かけするんだ」

「でも、危ないんでしょ？」

智一は、心配そうな表情をして父親を見つめる。

鳳郎と凰子は、危険だから決して島から離れてはならないと教えられている。海の天気は変わりやすい。海で飛んでいる時に突風にあおられて、海に落ちてしまったら命を落とすことになる。

そのことを強く言いつけられているから、その海に向かって父親が出かけることを心配しているのだ。

「大丈夫だよ。パパは海の上を飛んだことがある。そんなに遠くまで飛ぶことはないし、絶対に帰ってくるから」

「……………」

鳳郎は必死に慰めるが、息子の不安そうな表情は和らぐことが無

い。

「新しい島を探すんだよね？ でも、そんなことをしなくたって、パパとママが住んでた場所に行けばいいんじゃないの？」

智一の指摘に、鳳郎と凰子が息を飲む。

「パパは言つてたよね？ パパの住んでいた所はとても綺麗な所で、自然がたくさんあつて空気も澄んでる。食べ物だつてここよりたくさんあつて、食べ物に不自由したことはないって言つてたよ。ママも行つてたよ。ママの住んだところは、パパの住んでいた場所より遙かに広い場所だつたつて。何処までも何処までも陸地が続いて、まだ見たことが無い場所の方がずっと多いんだつて」

鳳郎と凰子はどう答えたものか少し悩む。子供たちの素朴な疑問の一つが、父や母が住んでいた場所はどんな風で、そこでどんな暮らしをしていたかだ。

しかし、鳳郎も凰子も自分達が住んでいた場所がどんな風だったかについては語つても、そこでどのような暮らしをしていたかについては話そうとしなかった。

それも当然だろう。毎日毎日生きるのに必死。仲間を持たず、他の鳥達からは迫害されてきたのだ。鳳郎は逃げるように、凰子は追いつられるようにしてこの島にやってきた。

そのことを知れば子供達は間違いなく傷つく。自分達は嫌われた生き物だということを知れば、誰だつてショックを受けるのは当たり前だ。

だから鳳郎と凰子は、『ここでの暮らしが楽しすぎて、昔のことは忘れてしまった』と答えてお茶を濁している。知りたがりの子供達が、それで納得する訳もないが……。

「……そうだね。確かにパパとママの故郷に行くのも一つの選択肢だ。でも、パパとママの故郷は危険なことも多いんだよ。だから、

お前達が大きくなるまでは、安全な場所で育ててあげたいんだ。そのためパパは出かけなくちゃいけない。分かってくれるね？」

「……………」
苦しい言い訳だ。しかし、鳳郎の諭すような口調にしぶしぶ納得したのか、智一はそれ以上何も言わずに、どこかへ飛んで行ってしまった。

「……………ごめんな」

飛んで行く我が子を見ながら、鳳郎は小さくつぶやく。

自分達の故郷に行く。それも確かに選択肢の一つだ。どうしようもなくなれば、その選択を取らざるを得ないだろう。

そもそも、鳳郎や凰子が差別されていたのは、仲間を持たなかったからだ。今は十羽の仲間が居る。体も大きい、か弱い存在だという訳ではない。だから、今家族全員で故郷に帰れば、前のような扱いは受けないかもしれない。

それに、他の仲間を探したいという気持ちも再び生まれた。こうして鳳郎と凰子の間に子供が生まれたということは、二羽は同じ種類だったということ。世界のどこかには仲間がたくさんいるのかもしれない。何かの間違いで、鳳郎と凰子にはぐれてしまった可能性が高い。

仲間の群れを探すことができれば、子供達も立派に独り立ちして相手を見つけ、愛をはぐくみ、子孫を残すことができるようになる。

しかし、まだ早い気がする。好き嫌い感情というのは根強いものがある。今故郷に帰れば、言われぬ迫害をもう一度受けることになるだろう。もう少し家族を……………仲間を増やしてからにしたい。これだけ臆病にならざるを得ないトラウマが、鳳郎と凰子にはあるのだ。

「鳳郎……………きつと帰ってきてくれますね？」

「ああ、必ず帰ってくるよ」

凰子は最後にそう尋ね、必ず帰ってくることを約束した鳳郎に、

それ以上何も言わなかった。

* * *

「父上？」

「ん？ ああ、すまない。考え事をしていた」

博の声で、鳳郎はやっと回想から帰ってきた。

まだ日も昇っていないくらい早い時間なのだ。わざわざ起こしてまで、鳳子に旅立ちの言葉をかけることもあるまい。

鳳郎は出かける前に、もう一度祠に顔を向ける。

「女神様、私はこれから新しい住処を探すために旅立ちます。さして長い時間ではないでしょう。ですが、海の上を飛ぶのは常に危険が伴います。もし熱心な信者である私を思ってくださいるのなら、無事に飛びきる加護をお与えください……」

「……………」

鳳郎がすべてを言い終わるまで、博は顔を背けて聞いていた。やはり来なかった方が良かったかもしれないと後悔しているのだろうか？

「お前の嫌いな時間が終わったぞ。すまないな、せつかく見送りに来てくれたというのに……」

「私が好きでしていることですので、気にすることはありません」
危険な所に旅立つと知っていて、黙って送り出すことはできない。自分は同行できずとも、せめてしっかりと見送りたいのだ。

「後のことは頼んだぞ。そう長くは留守にしないと思うが、何かあったら兄弟で力を合わせて母さんを守ってくれ」

「任せてください」

「心配すんなって、親父！」

明るい声と同時に、兄妹の中で四番目に生まれた息子鳥 名前
を文哉ふみやという がやってきた。

「生まれたばかりの目の開いてない赤ん坊じゃあるまいし、一日親父が居ないくらいで問題が起こったりしないって！ それでも何かあった時は、俺達一年組がなんとかするからさ！」

一年組とは、一年目に生まれた子供達のことを言う。成長の早い鳥達にとつて、一年の差は大きい。有事の際には一年組と鳳郎が解決することになっている。

「……お前の言葉はいつも軽い。そんな調子外れの言葉では、父上を心配させてしまうじゃないか」

「へえーへえー、兄貴の言葉はいつもいつも重たくってよろしいことですね。あんまり重たくって心まで沈んでしまいそうですよ」

この文哉は楽天家だ。何でも気楽に考え、重たい空気を和ませしてくれる。二女の茜とよく気があう。

「フフ……。それでは後を頼んだぞ、行ってくる」

「行ってらっしゃいませ」

「行ってら〜」

文哉が博に小突かれるのを見ながら、鳳郎は海に向かって飛び立っていった。

* * *

鳳郎が飛び立ってから数時間が過ぎた。太陽は完全に登り、広く海上を照らしている。

鳳郎が死ぬために飛び立ったあの日とは違い、空はどこまでも晴れ渡り、雲ひとつない心地よい空だった。これなら嵐にあうことはまずあるまい。海の天気は変わりやすいため、そう楽観視もできないが……。

「……………」

鳳郎はかなり高めに飛ぶ。そしてゆっくりと首を振りながら、何か変わった者が無いかを探す。

しかしこれまでの間、島はどころか、小さな岩や木の板すら見つけることは出来なかった。360度見渡しても、何処までも水平線が続いており、波は静かに揺れている。

「まあ、こんなものさ」

鳳郎は特に焦りもせず、冷静に海を見回している。

実際のところ鳳郎は、今日中に島が見つかるなど微塵も思っていない。

焦る必要が無い様に、余裕があるうちに行動を始めたのだし、今日のところは海の上を飛ぶ感覚を覚えようとしている要素が強い。今のところは、潮風に煽られても疲れることなく、心地よく飛ぶことができている。

「少し神経質になりすぎていたか？」

今のところ大きな危険はない。これなら子供達のうちの数羽を一緒に連れてきても良かったかもしれない。

子供達は長距離を飛ぶことに慣れていない。島が見つかったとしても、そこまで飛んで行くことができれば結局意味が無いのだ。ならば、長距離を飛ぶ訓練をさせる意味でも、連れてきても良かったかもしれない。

「そのあたりも含めて、家族で話し合ってみるか。あまり凰子に心配はかけたくないしな……ん？」

鳳郎が考え込んでみると、水平線の近くに何かを見つけた。ぼんやりとしてはつきりとは見えないが、それは影であるように思われた。島の影のように……。

「まさか……こんなに簡単に？」

むしが良すぎる。新しい島を探すために飛び立ったその最初の日、目的のものが見つかってしまうなど……。

「とにかく行ってみよう！」

もしかしたら、凰子の住んでいた大陸かもしれない。これほど遠くから見えるのだ、その可能性は大いにある。

鳳郎はできるだけ高く飛び上がり、その影に向かってはばたき始

めた。

しかし数時間後経っても、その影が近づくことはけしてなかった。なぜだろうと首を傾げていたが、やがてその正体に思い至った。

「……厩気楼だ」

それに気付くと一気にだれた。鳳郎は厩気楼というものを見たことが無いが、厩気楼によつては鮮明な町が見えたりもするのだという。島の影くらいなら当たり前であり得るだろう。

厩気楼だと気付くと、島の影がゆらゆらと揺れているのが分かった。それに気付かなかった自分が非常に愚かしく思えた。

「引き返すか……」

鳳郎は一言呟いて方向を変える。気力は萎えたが、鍛えたおかげで体力はまだまだ残っていた。厩気楼のせいで、自分の中の予定より遙かに長い間探索していたが、自分の限界を知ることでもできた。落ち込んでばかりいないで、前向きに考えることにしよう。

帰り道に道しるべはないが、道に迷ったりはしない。方向感覚は他の鳥にも引けを取らないくらい優れている。だからこそ、恐れることなく飛び立つことができたのだが……。

探索と同じだけの時間をかけて、自分が今来た空を戻る。すると今度は別の奇妙なものを見つけた。

「大きな雲だな」

黒々とした巨大な雲。運が悪いことに、その雲は鳳郎が今向かっている方向にある。

あれだけ巨大な雲なのだから、その下は激しい嵐になっただけもおかしくない。雷に打ち落とされてはかなわないし、あの方向にあるということは、島を直撃することも考えられる。早く帰って嵐に備えなくては……。

鳳郎は羽ばたく翼に力を込めて、帰り道を急いだ。

島が近づくにつれて、その黒い雲も近づいてくる。そして、相当な距離まで近づくと、鳳郎の中に疑問が湧いた。

「あれは……本当に雲か……？」

雲にはしておかしい。もくもくと空に向かって立ち上って行き、雷の光がまるで見えない。その黒い雲以外には雲が見当たらず、相変わらず快晴だ。雲というよりは……。

「煙……なのか？ あれは……」

煙……そう考えればそのように見える。

煙……煙……煙……。

煙の発生する条件は何だ？ もちろん火だ。何かが燃えている時に煙は発生する。それは常識。

ならば……何が燃えているのだ？ 間抜けな人間の船が、料理をしている途中で火事になってしまったとでも言うのか？ それならば傑作だ。近くまで飛んで行って笑ってやりたいくらいだ。

しかしあの煙の量……人間の船が一隻燃えたくらいではあの量の煙は発生しない。

それならば……。

「まさか……まさか島が……島が燃えているとでも言うのか？」

最悪な想像が鳳郎の頭をよぎった。

そして……その想像は鳳郎のことを裏切ってはくれないのだった。

第六話『雨島』

それこそ塵気楼か何かであって欲しかった。しかし現実には、その願いを裏切つて残酷だった。

近づけば近づくほどその煙は巨大になり、ぼやけて消えてしまうどころか、ますます鮮明にその漆黒の姿を見せつけてきた。

炎はすでに何時間も前についたものらしく、すでに島中が真っ赤な炎に包まれていた。

もくもくと立ち上る煙の中で、荒々しい炎が混ざつて踊る。その炎と煙は、まるで生き物のように島中を暴れ回っていた。

「鳳子おーー！」

鳳郎は壮絶な島の状況を目の当たりにして愕然としていたが、やがて我に帰つて最も愛すべき者の名前を叫んだ。

「どこだあー！？ どこにいるーー！」

鳳郎は島の上空を旋回しながら島の姿が無いかを探す。

島はすべて炎と煙に包まれている。避難する所などどこにもない。だから愛すべき家族達は、島に居るはずが無いのだ。必ず島の中から逃れて、空に待機し、島が落ち着くのを待っているはずなのだ。

「私だ！ 鳳郎だ！ 誰でもいいから返事をしてくれえー！」

鳳郎はひたすら空に向かって叫んだ。しかし、誰からも返事が返つてこない。

空に避難したからと言って、島の近くから離れる理由はないはずだ。だって、自分達には逃げるあてが無い。

鳳郎の故郷に行ったのか？ 鳳子の故郷に行ったのか？ いや、そんなはずはない。家族の中には特別空を飛び続ける体力が低いものもいる。これから徐々に訓練を積んで行く予定だったが、そんな暇はなかった。

だから目の前の足場を見捨てて、何時間飛ぶことになるかも分か

らない親の故郷に飛んで行く判断をしたとは思えないのだ。

それならば……家族の姿が空に見当たらないのであれば、家族が居る場所は一つしかない……。

「まさか……まだ島の中に居るとでも言うのか……？」

最悪な想像が頭をよぎり、鳳郎は大慌てで島に向かって降りて行った。

いざ島に降りようとすると、島に近づくことさえなかなか困難だった。何しろ島中が燃えて、熱を放っているのだ。降りようと思っても、焼けるような風に吹かれて上陸することができない。

「こんな島の中に居るはずが……」

そうは言っても空には家族の姿はなかった。何が何でも島に上陸しなければならぬ。

鳳郎ははじめ、自分達の巣に降り立とうとしていた。しかしそれはすぐに断念した。巣はかなり島の中央に位置している。いきなりそこに降りようとしても、熱風が邪魔をして降りることができない。だから鳳郎は、島の横から上陸し、巣に向かって進もうとしていた。

それに、島の端は炎が比較的少ない。もしかしたら、そこに家族達は避難しているのかもしれない。

「おい！ 誰がいるかー！？」

島に降りたって、すぐに声をあげる。しかし返事は聞こえてこず、気がパチパチと焼ける音や、枝が焼け落ちて地面に落ちる音だけがむなしく響いた。

「クソッ！」

鳳郎は急いで飛び上がり、巣に向かってはばたき始めた。

巣に向かう途中も声を張り上げ、家族達を呼ぶ。体力を消耗して

しまつが、そんなことを気にしている暇はない。

「ん？ なんだあれは……」

木と木の間から何かが見えたような気がした。返事が返ってこないのだから、家族ではないようだが、なんだかその正体が気になった。

鳳郎は方向転換をして、その場所に向かった。

「たしかこのあたりに……。！？ こ、これは……」

そこにあつたのは焚火の後だった。故郷に暮らしていた時に何度も見たことがある。人間達が石を組み、そこに空気が良く通るように木の枝をさらに組んで火を付ける。

無論、鳳郎達は焚火などしない。炎を使うことなどないし、そもそも扱えるはずが無い。だからこの焚火の後は、ここに人間達が来たという証だった。

「クソ……人間達がやってきてここで火を焚いたのだ！ 間抜けどもめ……居眠りでもしている間に火が島に燃え移ったに違いない！ ろくに火が扱えないというなら、猿のままでもいいものを……」

島が燃えた原因を知って、鳳郎は激しく憤った。さつき島の周りを見たが、船の姿はどこにもなかった。島に火が燃え移ったのに驚き、早々に逃げ出したのだろう。

しかし人間が来るとは珍しい。二年間ここで過ごしていたが、人間が来たことなど今まで一度もなかった。まあ、今まで人間が来なかった方が逆に不自然ではあるが……。

「それにしても……」

鳳郎はたき火跡を見下ろして首をひねった。人間達はなぜ焚火をしたのだろう？ 今は焚火を起こして暖を取る必要などない季節だ。他に人間が焚火をする理由があるとすれば、川に落ちて濡れた服を乾かすためか……。

「……そんな……嘘だ……」

他の生き物を焼いて食べるためだ。

魚やキノコ……そして、鳥などを……。

「うわあああああああッ！」

鳳郎は叫び声をあげて自分の目に飛び飛んできたものに抱きついた。

それは地面に転がっていた。体中の羽をむしり取られ、首と翼を切り落とされ、その切り落とした首の部分から串が刺されて尻まで貫通していた。

「ああ……ああ！」

その無残な姿を晒している死体は、地面に投げ出されていた。体中が黄金色になるように焼かれていて、その体には明らかに少しかじった跡があった。

その死体の様子から、とりあえず焼いて食べてはみたが、口にあわなかったので地面に投げ捨てたというのが良く分かった。

その死体は明らかに鳥のものだ。そして、この島には鳥は一種類しか居ない……。

「こんなことあるはずが無い！ どうして……どうしてこんなことが……」

体の大きさから言って、その鳥は一番目に生まれた子供、敬介であることが分かった。昨日まであれほど自信に溢れて生きていたというのに、今は何も言わずただそこに転がっていた。

「まさか……まさかッ！」

鳳郎は敬介をどうにかしてやりたいという思いをなんとか抑え込み、その場を飛び立った。

敬介がこうなっているということは、他の家族達にも危険が迫ったということだ！

それから間もなく別の死体を見つけた。今度は誰の死体かすぐに判別できた。その死体は羽をむしられてもいなければ、首を落とされてもいなかったからだ。

「博！ 文哉！」

二羽の死体は、重なるようにして転がっていた。体中に弓矢が刺さっている。

「狩り……人間達は狩りをしたのか……？」

それも、食べるために狩りをしたのではない。ただ殺すために狩りをしたのだ。食べるために狩りをしたのなら、こんなに体中に矢を打ち込むはずが無いのだ。

娯楽のためだけに狩りをした。鳳郎達は、その狩りの対象に選ばれたのだ……。

「こんな……こんなことがあああああ！」

鳳郎は半狂乱になって島を飛び始めた。今まで以上に声を張り上げ、遠くからでもよく見えるように大きく動きながら飛んだ。

しかし、家族達は鳳郎の姿を見つけてはくれなかった。見つけるのはいつも鳳郎の方だ。

鳳郎は巣に向かって飛んだ。その途中に、まるでそこから先に進ませまいとして戦い、そして敗れて戦死したかのように、子供達の死体が転がっていた。

菜穂、茜、周、智一、澄乃の順番にその死体を見つけた。早く生まれ順に戦ったのだろう。死体を見つけた順番からそう考えることができた。

鳳郎はある意味運が良い。この広い島の中、子供達全員の死体を見つけることは相当難しかったはずだ。それをたった数分のうちにすべて見つけることが出来たのだから、運が良いと言って間違いないだろう。

だが、当然。数時間のうちに、自分の子供達すべてが死んでしま

つたという不幸は変わらない。

「凰子オーー！」

子供たちすべての死体を見つけ、鳳郎に残されたのは凰子だけだった。

鳳郎はようやく巢の場所まで戻ってこることができ、炎が燃え盛る中、必死に声をあげた。

「何処だー！ 何処に居るー！？」

「……ここ……です」

消え入りそうな小さな声。だが鳳郎は確かに聞いた。

「凰子！ 何処だ！ 私はここに居るぞ！」

「……ここですよ…… 鳳郎……」

今度ははっきりと聞こえた。

鳳郎は声のした方に急いで飛んで行った。すると、凰子は巢の中に座り込み、最後に会った時と同じように卵を温めていた。

「鳳郎……ああ、こうしてまた会えるなんて……」

凰子は諦めていたらしい。鳳郎の姿を認めた瞬間、その瞳から一筋の涙がこぼれおちた。

「凰子、一体何が起きたのだ！？」

「人間……人間が来たのです……」

「それは分かっている。……子供達を見たからな」

鳳郎のその言葉に、凰子は頭を下げて泣いた。

「申し訳ありません！ せつかく鳳郎から頂いた……」

「言うな！」

鳳郎は凰子の体を翼で包み込み、慰めるようにさすった。それで凰子は少し落ち着いたらしい。

「ゆっくりと落ち着いて話すのだ。人間達は何をした？」

鳳郎の諭されるような口調を聞き、凰子はつつかえながらも話し始めた。

「あなたが出かけてからすぐに、人間達の船がやってきたのです。荒々しい……見るからに乱暴そうな人間達でした」

人間達は上陸して、島を探索するようにしながら島の中央に向かって歩き始めた。

この人間達は何かを探しているようで、島を荒らしながらゆっくりと進んだ。

このままでは巢まで荒らされてしまう。そう考えた敬介は、人間達を追い返そうと提案した。

「私は反対しました。しかし、逃げだせば卵が割られてしまうと主張して、敬介は一羽飛び立って行きました」

すぐ後を博と文哉が追いかけた。もちろん敬介をつれ戻すためだ。人間達と争って鳥が勝てるはずが無い。しかし間に合わなかった。

人間達は、珍しい大きな鳥の姿を見つけると、躊躇することなく弓矢を構え、矢を放った。

敬介は体を打ち抜かれ、人間達めがけてまっすぐに落ちて行った。「そして人間達は……人間達は……」

「その先は言わなくていい。……私も見てきた」

敬介は人間達に調理され、焚火の炎で焼かれた。そして、ゴミの様に捨てられたのだ。

「私達は憤りました。目の前で家族が殺されて、屈辱的なことまでされたんですよ？ 黙っているという方が無理ではありませんか！」
気持ち分かる。鳳郎も実際その場に立ち会えば……いや、立ち会わずとも、その無残な息子の死体を見ただけで人間達に対する怒りでいっぱいだった。

「家族全員で攻撃に出ました。崖まで誘い込み、石を落として崖の下付き落とす。森の中に彷徨いこませて、底なし沼にはめ込む。これらは非常にうまく行って、人間達はかなりの被害が出ているように思えました」

実際は思えただけかもしれない。八羽程度の鳥が集まったからと

言って、たくさんの人間達に被害を与えられるとは思えない。

しかし、実際人間達に被害は出た。そして人間達は理解した。「ああ、あの鳥は意思を持って自分達を攻撃してきているんだな」と……。

そうなれば例え鳥といえども、反撃しない訳にはいかない。鳥を殺すことを決定した人間達は、迷わず島に火を付けた。

「思いもなかった反撃でした。私達は炎に全く慣れていません。あたふたとしているうちにあつという間に人間達にやられてしまったのです」

しかし、島に火を付ければ当然自分達の身も危なくなる。結局人間達は島の中央にたどり着けないまま、海に逃げ出してしまった。鳥達は自分達の巢を人間に犯されることだけは守ったのである。

「うう……」

凰子が苦しむようにその場に倒れ込んだ。

「凰子！ 無理に話させるようなことをしてすまなかった！ とりあえずここから逃げ出そう！」

しかし凰子は、鳳郎のその言葉に静かに首を振った。

「鳳郎だけで逃げてください」

「なぜだッ！？ もう生きることがあきらめてしまっくらいに絶望したのか？ むしろお前の方が生きることには前向きで、死を恐れていたはずではないか！ 共に逃げよう……私達はいくらでもやり直せるはずだろう……？」

しかし凰子は再び首を振った。

「駄目です……私は翼が折れてしまいましたから……」

鳳郎はそこで初めて、凰子の翼が折れていることに気付いた。こんな翼では当然飛べない……。

「人間達と戦っている時に折れてしまったのです。ここに帰ってくるのにもかなり体力を消耗してしまいました……。もう……無理です……」

鳳子はそう呟いて儂げに微笑んだ。すべてを悟ったように鳳郎には見えた。

「ならば……ならば私も死のう！ 何処までも離れぬ！ いつまでも離さぬ！ お前が死ぬというのなら、私もその隣で死ぬ！」

鳳子は表情を崩さなかった。鳳郎がそう言うのをなんとなく予想していたのかもしれない。

「生き物は皆、いつでも死ぬことができます。どう仕様もなく行き詰った時、生きることが苦痛でしかなかった時、そんな時生き物は、自ら死を選ぶ権利を持っているのです。……ですが、あなたのその権利を、私に奪わせてください」

「……なぜだ？ お前や子供達を失った私に、なぜ生きるというのだ？」

鳳子は悲しい表情を作って鳳郎を見る。そして、涙を零しながら訴えかけた。

「このままでは、あまりに悔しいではありませんか。……誰からも認められず、忌み嫌われ、住んでいた故郷を追い出される。そしてなんとか安息の地にたどり着き、ささやかな幸せの日々を手に入れられたかと思ったら、これ以上ないくらい悲惨な方法で奪い取られる」

鳳子は頭を鳳郎の胸にうずめた。

「このまま死んだのでは、不幸になるためだけに生まれてきたようではありませんか！ 子供達はどうして生まれてきたのです？ 私達はどうして生まれてきたのです？ 幸せに生きるためではないのですか？ 嫌われし鳥として生まれ、嫌われし鳥として死ぬ。私はそれが非常に悔しい……だからあなたに託すのです。私達だって幸せに生きる権利があるのだということ証明して欲しいのです！」

「鳳子……」

鳳郎は何も言うことができなかった。鳳子のその声には思いが込

められていた。凰子は単純に鳳郎に生きて欲しいと言っているのではない。子供達のために……自分達のために生きて欲しいと言っているのだ。

ここで鳳郎も死ねば、それで鳳郎や凰子、子供達の存在は確定してしまう。暗く、悲しいだけの存在として……。

しかし鳳郎が生きればまだ可能性はある。まだ可能性は残るのだ。

「最後に……一言だけ言わせてください」

凰子は表情を緩めて鳳郎を見た。

「あなたと出会ってからの毎日は、嘘偽りなく、楽しいものでありました」

その時強い風が吹いた。

その風は、なぜか鳳郎の体だけを攫い、一気に鳳郎の体を上空にまで押し上げた。

「凰子！ 凰子！ 私も……私もッ！」

鳳郎は必死に翼をはためかせたが風の勢いに勝つことはできず、ぐんぐん空高く押し上げられていく。同じ場所に居たはずなのに、凰子の体は少しも浮き上がらない。まるで、凰子が風を操って鳳郎のことを上空に逃がしたようであった。

「さあ、お前達……ごめんなさいね。あなた達だけは、お母さんが守るからね……？」

凰子は卵をしつかりと抱きしめ、優しい母親の声をかける。

実は凰子には罪がある。子供達は皆死んでしまった。怒りに囚われることなく、子供達の命を第一に考えていれば、きっと救うことができたはずだ。他の子供達が怒りで我を失ってしまったとしても、凰子だけはグツと自分を抑えるべきだったのだ。そして鳳郎の帰りを待ち、その胸の中で泣けばいい。しかし、凰子はそれができなかった。

母親失格。そう言われても仕方あるまい。だからこそ、この卵……

…この子供達だけは守って見せる。自分の命が尽き果てるその瞬間まで……ッ！

「鳳子オー！ あッ！」

鳳郎は上空に押し上げられていく途中で見た。鳳子と、その鳳子を守っている卵に向かって、燃え盛る大木が倒れ込んで行くのを…

…。
「うわあああああああッ！」

鳳郎のその叫び声は、島に、海に、空にこだました。

島中を焼いた炎により、強力な上昇気流が生まれ、島の上に雨雲が発生した。

やがてその雨雲は、雷鳴と共に大雨を降らせ、島を雨と嵐で包み込んだ。

そして、島中を焼き払った炎は、その雨によってようやく鎮火したのだった。

第六話『雨島』(後書き)

web拍手による、感想や誤字報告など助かっています。ありがとうございます。

第七話 『埋葬』

遅すぎた雨は、数時間にわたって島を水で包み込んだ。

島の炎は燃えうつる物が無くなり、空から降ってくる雨の力によって完全に鎮火した。

風に吹かれて漂うように空を飛んでいた鳳郎は、翼の向きを変えてゆつくりと巣があった場所に降りて行った。

先ほどは近づくことが難しくいらいたのに、邪魔な炎が無くなったことにより、あっさりと降りることができた。

巣の場所に来ると、鳳子の骨が卵を抱きしめるような形で転がっていた。母親の最後の意地とでも言うのだろうか？ その骨の形を見た時、鳳郎にはこみあげてくるものを感じた。

骨の転がっている場所を見ると、卵がほぼ完全な形で転がっていた。

あの炎の中で、あの熱の中で、鳳子は最後まで卵を守りきったのだ。

鳳郎はそつとその卵をさするように翼を伸ばす……。

ぼろぼろ……そんな音が聞こえた気がした。

卵は鳳郎が少し触れると、何本ものひびが入り、粉々に崩れ去って風に攫さらわれていってしまった。

「……ああ……うわああああああ！」

空を飛びながら声がかかるまで泣いたというのに、今再び現実を目の当たりにして、鳳郎は大声で泣いた。その泣き声を聞く者は誰も居ない。

ひとしきり泣き続けた後、鳳郎は再び気力を振り絞って飛び立つ

た。骨を集めるのである。

子供達が死んだ場所は大体分かっている。心配なのは木や灰によって、子供達の骨が隠れてしまっていること。

しかしそれは杞憂に終わった。子供達の骨は、鳳郎が探しに行くと、鳳郎が来てくれるのを待っていたのかのようにそこにあった。さすがに全身すべての骨があるという訳ではなかったが、どこかしら体の一部分の骨は全員見つけることができた。

鳳郎はそれらの骨を一本一本丁寧に集め、巣に運んで行った。そして、見つけた分の骨はすべてを巣に運びこむことができた。

巣には大きなくぼみがある。骨はそこに集めた。

鳳郎はその骨の上に、木の枝や草などを被せて骨を隠した。後は雨や風が吹けば、このくぼみに土が流れ込み、完全に骨を隠してくれる。他の動物が骨を持っていくのだけは避けたい。

骨を隠し終わると、そのすぐそばに石を積み始めた。

ある一定の高さまで来ると、少し間を置いて、隣にまた石を積み始める。

鳳郎が石を運ぶには、二本の足で掴んで運ぶしかない。島中を飛び回り、灰や燃えカスをかき分けながら石を探すのだから、当然鳳郎の体力は失われていく。

しかも、運ぶ石はどれもこれも尖っていて、鳳郎の足を傷つけた。石の塔を三つも作る頃には、鳳郎の足はボロボロになっていた。

しかし鳳郎はそれでも石を運び続けた。何かに取りつかれたように、石が血で濡れるようになっても黙々と運び続ける。

相当な時間がたったころ、石の塔は九個出来上がった。これは墓だ。

とても立派と言えるような代物ではない。それでも、鳳郎が家族のために作ってやった墓だ。こういう感情が伴う建造物は、見ても

れは 当然美しい方が良いことには違いないが 問題ではない。
思いが重要なのだ。

それを見た時、それを見たものが作った者の意思を確かに感じられたなら、それは他のどんな物にも引けを取らない。鳳郎が血を流しながら石を運び、涙をこらえて必死に積み上げたその墓が、どうして思いが込められていないなどと言えるだろうか？

これで、鳳子と子供達の埋葬は終わった。

最後の石を積み上げた瞬間、鳳郎はその場に崩れるように倒れ込んだ。そして今度は静かに泣いた。もう叫ぶ力など残っていない。

「ついに一羽きりになってしまった……」

誰に言うでもない。一言嘆くようにそう呟いた。すると、その呟きに答える者がいた。

「前と同じになっただけではありませんか」

いつだったか聞いた声。鳥は驚いてその声に向かって振り返った。「お前に直接会うのは二年ぶりですね、鳳郎。あの時にはまだ名前すら持つてなかったのを懐かしく思います」

女神の表情特徴は穏やかなものだった。周りのこれだけの惨状を目にしても、女神の感情はいささかも揺れていないようだった。

鳳郎はしばらく呆けていたが、どうやら目の前の存在は幻ではないらしいことに気付くと、黒い感情が湧きだしてきた。

「女神……お前、どの面下げて会いに来たんだア！」

鳳郎は吠えた。鳳郎がこの数時間忘れていた『怒る』という感情を、今思い出した。あれほど毎日熱心に祈っていた女神に対して、鳳郎は怒りのままに暴言を吐いた。しかし女神は、相変わらず涼しい顔をしている。

「何を怒っているのです？ 今まで悲しみに暮れていたはずではあ

りませんか」

「うるさいッ！ 女神、お前は言ったな？ 『幸せに暮らせる地があるなら生きたいか？』と、そう言ったな？ それに頷いて与えられたのがこの島だ！ ところがどうだ？ 今私はこれまでにないほどの不幸に見舞われている！ お前はこの悲劇が見たくてこの島に私を住まわせたのかッ！」

激しい鳳郎の怒りの声に対して、女神は首を振る。

「お前は勘違いをしていますね。二年前の言葉を良いように変えてしまっています。お前は『迫害にあうのは嫌だ。つつましく暮らしたい』と言ったのです。だから私は、『それが与えられる土地があるなら生きたいか？』と尋ねました。そしてお前は頷いた。その気持ちに嘘はなかったでしょう。お前はあの時それ以上を望まなかった。だから私もお前にこの島をやったのです」

鳳郎があまりに欲張るようなら、女神も助けるつもりなどなかった。鳳郎は些細な願いしか言わなかった。それは本当に追い詰められていたという証明でもある。だからこそ女神は、鳳郎にこの島を与えたのだ。

「しかしお前は凰子と出会ってしまった。『仲間』を得てしまったのです。だからお前は、最低限の生活では満足できず、幸せに暮らしたいと願ってしまった」

それにしても鳳郎の願いは変わらず小さなものだ。だから女神は、それで鳳郎を見捨てるようなことはしなかった。

「しかし私がお前に与えてやるのは、相変わらず『迫害を受けず、静かに暮らす』というものだけ。だからお前がそれ以上の幸福を得ていたのだとしたら、それはお前自身の力得手に入れなければなりません」

「迫害を受けない静かな暮らし……？ この惨状を見てどの口でそれが言えるんだッ！」

鳳郎は再び怒る。しかし女神は顔色を変えることはない。

「この島に他の鳥達がやってこなかったのはなぜです？ 大きな嵐がやってこなかったのはなぜです？ それは私がお前を守っていてやったからですよ？ 私はこの二年間、ずっとお前に加護を与えてやっていたのです」

確かにこの島に嵐がやってきたことはない。それが女神のおかげだというのなら、そうなんだろう。だから鳳郎は、女神に感謝することはあっても、不満を言うことなど間違っているのだ。

しかし、理屈が分かってはいても頭には来る。

「ならなぜ私の家族を守ってくれなかったんだ！ 今まで守ってきていたくせに……」

「お前を守るということは、必然的にお前の家族達も守らなければなりません。しかしお前は島を離れた。その間に不幸にも人間たちがやってきて、島に火を付けた。それだけのことです」

あくまで淡々と女神は告げる。悪気はないのだろうが、鳳郎にはその口調が家族のことを下に見ているような気がしてならず、さらに怒りをかき立ててしまう。

「私が離れたからと言って、それまで続けていた島の加護をなくした？ それで弱いものが食い物にされるのを、指をくわえて見ていたというのか？ そんな話があるかッ！」

「加護は続けていましたよ？ 私が加護を与えているのは島ではなくお前です。お前が居なくなれば島の加護が消えるのは当たり前でしょう？ お前の家族は一度として私に祈りをささげたことなどないではありませんか。信仰しないのを悪いとは言わない。しかし、神の愛というのは、その神を愛する者だけに与えられるものなのです。無差別に、無償の愛など与えられることはありません。ただ祈るだけの行為でも、神にとってみれば自分のために勤めていると見えて、それに見合う恵みを与える。お前の家族達は、どんなに追い詰められても私に助けを求めることはおるか、私を思い出すことすらしませんでしたよ？」

女神の存在を信じていたのは鳳郎だけだ。他の家族達は、むしろ不気味に見えてすらいいたのだから、加護が与えられるはずなどない。鳳郎はまだ不満はいくつもあつたが、反論する気力もなくなり、その場に俯いた。

そんな鳳郎に対して、女神は「それに……」と言って口を開いた。「お前だつて、自分を守ってくれとは言いましたが、家族を守ってくれとは一言も言わなかつたではありませんか」

「何を言つて……あれ？」

鳳郎は思い返した。今日この島を飛び立つときに女神に祈つた時のことを……。

あの時確かに鳳郎は祈つた。その時鳳郎は何を願つた？ その時のことを思い返してみれば、『自分が無事に飛びきる』ことしか願つていながつたのではないか？ 家族を守ってくれなど一言も言わなかつた気がする。では……。

「もしあの時に、私が『家族のことをよろしく願ひします』と願つていたら、家族のことを守ってくれたのか……？」

「過ぎ去つた時間について、仮定の話などしても、意味がありません」

誤魔化した。鳳郎は瞬時にそう悟つた。

女神は誤魔化したのだ。鳳郎のことを一瞬気遣つて、鳳郎が傷つかないように言葉を濁した。

つまり……あの時家族のことを願つていれば、女神は助けくれたはずだつたのだ……。

「ああああああッ！」

鳳郎は叫んだ。

「救えたのだ！ 守つてやれたのだ！ 私が自分のことだけでなく、家族のことも思つてやれていたなら、『家族のこともお願ひします

！』とあの時一言言えたはずなのだ！　それが言えなかった……言わなかったのだ私は！　我が身かわゆさで家族のことを忘れたッ！
クソ……クソオオオオ！」

鳳郎は大粒の涙を零しながら悔しがった。

助けてやれたのだ。それは自分ではないが、自分が願うことによつて救えたはずだったのだ。

別にその方法でなくてもいい。思えば、他にももっと自分が気を付けていれば家族を救えたはずなのだ。

何羽か一緒に連れて行っていけば、もっと早めに帰っていれば、危険に対しては逃げるようによく言い聞かせていけば……。そもそも……出かけさえしなければ……。

そう思えば思うほど、後悔の念から涙が止まらない。自分の爪によつて体を引き裂き、殺してしまいたい衝動にかられる。

しかし耐える。まだ鳳郎にはしなければならぬことが残っているのだから……。

「女神……いや、女神様。どうか私の願いを聞いてくれませんか？」
「なんででしょう？」

鳳郎の意識は別の所に向き始めていた。女神もそれを察する。

「私は力が欲しいのです」

「何を成す力ですか？」

鳳郎は顔をあげた。その表情には先ほどとは別の怒りの感情が浮かんでいる。

「復讐です。私の家族を殺した人間達に復讐する力をください」

「……………」

女神は無表情に鳳郎を見下ろしている。鳳郎はそれには構わずに続けた。

「私は憎い。私達は静かにつつましく暮らしていました。皆心が綺麗な者達で、こんな理不尽な殺され方をするいわれなど全くありませんでした。人間達は残酷な方法で私達のことを引き裂いたのです。」

私も人間達に同じことをしてやらなければ気がすまない……家族達も同じ気持ちのはずです！」

鳳郎の怒りは、ようやく向かうべき所に向かった。女神をいくらか責めてもそれは筋違いだ。

家族を殺したのは女神ではなく、人間達だ。

二年間かけて築き上げてきた幸せな生活。それを一瞬のうちに壊されてしまったのだから、怒りの感情が湧かないはずがない。

感情をあらわにして力を求める鳳郎のことを、女神はしばらく何も言わずに見つめていた。

そして女神は、少し責めるような口調で話し始めた。

「お前に力を与えることは容易です。しかし、お前の力を求める理由がいけません。もし、お前が今考えている目的のために力を求め、それを受け取ったとしたなら、お前は罰を受けなければなりません」

鳳郎は一瞬呆然としたが、すぐに気を取り戻して女神に問うた。

「理由がいけない？ 人間達は島に火を付けて私達のことを虐殺したんだぞッ！ 本来なら、あなたのような高次元の存在が裁きを加えなければならぬはずだッ！ それに対して復讐する力を求めることの何がいけないッ！？」

「人間達には罪がありません」

冷たい風が吹いた。その風は鳳郎の羽を揺らし、女神の髪を揺らした。

その風は鳳郎の体に吹き付け、体の芯まで冷やしたように感じられた。

「なに……何を言っているんだ……？」

「人間達には罪がないと言っているのです」

「え……いや、だって……」

鳳郎は周りの惨状を再び見渡す。何も無い……。何もかもが燃え尽きてしまっている。もしあるとしたら、瓦礫と人間達の罪の爪後だけだ。

「お前達の視点から見れば、人間達は悪に見えるでしょう。しかし、人間の視点から見れば、人間達には罪がないのです」

「……………」

鳳郎は反論もできず、ただただ女神を見つめる。

「人間達からしてみれば、『立ち寄った島で狩りをして、一羽の鳥を捕まえて料理をした。しかし、その鳥の肉は食べられるものではなかったので、捨ててしまった。すると、鳥達に襲われたため、身を守るために応戦。しかし、鳥達はさらに激しく襲ってきたので、人間は誰も住んでいないこの島に火を付けてさらに自分達の身を守った』だけです」

「だ……け……？」

何もかもが死んでしまったんだぞ？ 鳳郎達だけじゃない。虫や他の小動物達。植物たちだって生きていた。鳳郎達だって狩りはするが、それは食べるためであり、生きるためだ。こんな無意味な虐殺行為などしない。

そんなことを考えている鳳郎に対して、女神は淡々と告げて行く。『この行為に対して、やり過ぎだと非難する者は居るでしょうが、そのことを指して罰を与えようと言いだすものは少ないでしょう。この島を襲った人間達の国には、『動物を殺害する行為』や『自然破壊』に対して罰を与える法律がありません。それにこの島は何処の国にも属していない。発見すらされていない孤立した島。侵略行為でもないのです。つまり、人間達の中で怒りを感じる者がいない。誰も困らない。すべての人間達に対して罪がない」

何なんだ？ さっきから目の前の女神は何を言っているのだ？

「私達に……私達に対して罪がありますッ！」

「確かにあるでしょうね。ですがそうすると、世界中すべての生きとし生けるものに罪があることになり、すべての存在が地獄に落ちなければなりません。故に神の審判というのは、その生き物の立場に立って審理しなければならぬのです」

「なら私達の立場に立って私の行為を見てくださいッ！ 私は家族を殺された！ それに対して復讐することの何処に罪があるというのです！」

「自分より強い存在に家族を殺された鳥が、復讐しようなどと考えますか？ 鳥の立場から見れば、お前のするべき正当な行為は、自分に命あることを感謝し、子孫を残すために次の相手を探すことです」

神の理論とは、これほど理不尽なものなのか？

「なら……復讐することが許されるのは人間達だけということになるのですか？」

「お前の力だけで復讐するというなら、それは認められるでしょう。しかしお前は私に力を求めている。人間達に復讐することができただけの強大な力を……。制度無き復讐は秩序を乱します。人間達は秩序を乱さないよう、法律を作り、司法機関を作り、厳正な審理と適当な罰則を……」

「もういいッ！」

鳳郎は女神の言葉を遮って叫んだ。

「もういい！ もうたくさんだ！ ルールや罰など知ったことか！ とにかく私は家族の仇を取らねば気が済まない！ 力をくださいッ！」

元々女神と論争をしても何の意味も無かった。この悲しみや怒りを理解できるものが、鳳郎以外に居るものか。鳳郎には一刻も早く力を手に入れて、人間達に罰を与える義務があるのだ。

女神は鳳郎の意思が固まっていることを理解し、それ以上余計なことを言おうとはしなかった。

「では罰として、お前から『死』を奪います」

「……『死』を奪う？ どういう意味です？」

「文字どおりです。お前から『死』が無くなり。お前は死ぬことが

できなくなるのです」

不老不死になるといふことか。鳳郎はそう理解した。

「しかしそれは罰というよりも……」

「この罰の意味が分からないのですか？ 自ら死のうとしたお前が……？」

鳳郎はその言葉にハツとした。

確かに、自分以上にこの罰の重さを分かるものは居ないだろう。

二年前、どうしようもなく追い詰められた時に、鳳郎がしようとしたのが『死への逃避』だった。

今だって、これ以上ないくらいの悲しみに襲われて胸が張り裂けそうだった。本当なら、家族達の後を追って、再び自殺したいくらいなのだ。

『死』を奪われるということは、その最後の逃げ道を自ら閉ざすということだ。その重大さは、鳳郎が一番よく分かっている。

「確認します。力を求めますか？」

「……はい。『死』を奪われてでも、人間達に報復する義務があります」

女神は、鳳郎の意思を確認すると、手をかざした。

「ではお前に力を与えます。お前の家族の命を奪った炎の力……それをも、何ものをも寄せ付けず、すべてを焼き払う強力な炎……『神の炎』をお前に与えます」

第八話『沈没』

人間達の船は、あてもなく海を漂っていた。船の中央には、どくろのマークの旗が掲げられている。海賊船である。

海賊たちは、先ほど立ち寄った島の話をしていた。

「お頭かしら、今回も偽物でしたね？」

一人がゴミ同然になり果てた宝の地図をひらひらとさせながら、海賊の船長に向かって話しかける。

船長は酒を煽りながらそれに答えた。

「たく、あの情報屋が持つてくる地図はいつも外ればかりだ。今回は島があつたからまだましだが、今まではその島すらなかつたことが何度もあつたからな」

「何言つてんすか。下手に島があつたせいで、こんなくたびれちまつたんじゃないですか。これならむしろ何も無かつた方が、手間が省けて楽ですよ」

確かに。周りに集まっていた船員達がそう頷いて爆笑した。

「今回は特別重労働だつたしな。島を全部焼き払う必要なんであつたのか？」

誰かがそう言うと、船長が不機嫌そうに吐き捨てる。

「けッ！ だつたらお前ら、あの糞鳥に舐められたままでよかつたのか？ 何人が谷に落ちて死んだんだぞ？ そのまま帰つたんじゃないのか？ 海賊の名前に傷がつくぜッ！」

鳥ごときに熱くなるのも情けないけどな。無駄に疲れさせられた船員達は、心の中でそう不満を呟きながら苦笑いをする。

「珍しい鳥でしたよね。長いこと世界中を渡つてますが、あんな鳥見たことありませんでしたよ」

「ひよつとしたら、あの鳥がお宝だつたりしてな」

「だつたら焼き払って正解だ。他の誰かが手に入れて、大儲けする

のを邪魔できたんだからな」

船長はそう毒づきながら酒を飲んだ。

これは相当糞をかけられたのに怒ってるな。船員達は目を合わせながら頷き合い、しばらく愚痴を聞かなくてはならないだろうことを察してため息を吐く。

「お頭ツ！」

突然、柱の上で見張りをしていた船員が叫んだ。

「どうしたツ？ 別の海賊船でも見つけたかア？」

「いいえ、何か光るものがこっちに近づいてきています！」

「光るもの……」

船長は、見張りに言われた方向に目を向けた。すると、確かに何か小さい光るものがこちらに飛んできているのが見えた。他の船員達も、「なんだ？ なんだ？」という風に集まってくる。

「おい、あれって鳥じゃないか？」

特別目のいい船員がそう言うのと、あちこちから「確かに鳥に見える」と言おう声が上がりに始める。

「んー、さつき島で見たのと同じ鳥だな。しかも……燃えてる？」

船員が望遠鏡を持ってきて鳥を見ると、先ほど見た鳥と同じ姿が見えた。しかもその鳥は炎をまとい、まっすぐとこの船に向かって飛んできている。

「生き残りかあ？ 全部弓で射殺したと思っただがな」

「昼寝でもしてたんだろ。それで、体に火が付いて大慌て。訳も分からず飛んできたっていう訳だ」

そいつはいい。海賊たちはまた爆笑し、その鳥の方向を見つめた。しかし、なかなかその鳥は海に落ちる気配がない。火が付いているのだから、すぐに死んでしまってもおかしくないというのに。火が付いているように見えるのは錯覚か？

とうとう鳥は、目視できる所まで近づいてきた。

「ふーん、どうやら仲間達の後を追いたいと見えるな。弓矢を持ってこい！ 俺が射殺す」

海賊のうちの一人がそう言うと、仲間が弓を持って来た。弓を受け取ると、しっかりと狙って矢を放つ。それはまっすぐと鳥に向かって飛んで行った。

「……よし！ 当たったぞ！」

矢を放った海賊はそう叫んだ。

確かに矢は、鳥に命中したように見えた。

しかし鳥は海に落ちることはなく、平然と飛んでいる。

鳥は海賊たちを良く見ようとするかのように、船の周りをゆっくりと飛び始めた。

「下手糞！ 俺が手本を見せてやるぜ！」

「俺も俺も！」

他の海賊たちが次々と弓を持ってきて、鳥に向かって矢を放ち始めた。

雨のように降り注ぐ矢。その何本かは、気のせいではなく確実に鳥に命中した。

しかし、鳥は落ちる気配がまるでない。翼を大きくはためかせ、船から離れたり近づいたりを繰り返して、自分がまるで無傷であることをアピールしている。

「……おい、なんか変じゃないか？」

「矢は当たってるはずだよ……？」

海賊たちも疑問を口にし始めた。

「もしかして……幽霊か……？」

誰かがそう言った。

「まさか……」

「でもあれを見るよ！ あの鳥の周りにあるのは完全に炎だぞ？ それなのにどうしてあの鳥は焼け死なないんだよ！」

海賊たちの中に動揺が走り始めた。

「大砲だ……大砲を使って！」

「馬鹿ッ！ たかが鳥のために火薬を無駄にできるかッ！」

「でもよ！ 弓矢じゃ殺せないんだぞ！」

「……お頭。良いですか？」

船長は特に慌てることもなく、落ち着いたまま酒を飲んでいた。

船長は幽霊の類を信じてないし、そんなことで騒ぐ者も嫌いだ。しかし海賊たちの中で不安が確実に広がっている。それは少し無視できない。

「……仕方ねえな。一発だけだぞ？」

船長は渋々了承した。

船長の許可がでると、海賊たちは急いで大砲を用意して、照準を鳥に合わせる。

巨大な音と共に弾が発射され、その弾は鳥をとらえた。

大砲の弾は鳥に命中すると爆発し、鳥は黒い煙に包まれた。

「やったぜッ！ ヒュー！ ……あれ？」

煙はすぐに晴れた。そして無傷の鳥の姿が現れた。

「なんだよ……何なんだよあれは！」

「弾が外れたんじゃないのか？」

「爆発したんだぞ！ 当たってないはずがねえッ！」

今度こそ海賊たちの中に動揺が走り、船の中に混乱が広がった。

「帆をはれ！ 追い風を受けて一気に振りきるんだ！」

誰かが声をあげると、海賊たちは一斉に動き始めた。

「馬鹿野郎ども！ 俺の許可なしに動くんじゃないやねえ！」

船長が痺れを切らして怒鳴りつけた。確かに船長の許可を取らずに船を動かそうとしたのはまずかった。

「しかしお頭……あの鳥が……」

「鳥なんかにはビビってんじゃないやねえよ。鳥ならあの鳥でさんざん殺し

ただらうが」

船長は立ち上がり、剣を取りだして鳥を見上げた。もう鳥は船の真上まで来ており、海賊たちのことを見下ろしていた。

「降りて来い糞鳥！ 俺が殺してやるぜ！」

「……………」

鳥は言葉を理解したかのように降りてきた。そして船長の前に降り立ち、威嚇するように翼を広げる。

「……………でけえ」

その鳥は、鳥で見た鳥の中では一番大きかった。しかも、炎に見えた赤い帯は、錯覚などではなく本物の炎だった。鳥の体が触れている部分から、船に火が移り始めている。

「お、お頭ッ！」

「ビビるなって言ってるッ！ バケツに水を入れて持ってこい！ 俺がこの鳥を殺したらすぐに火を消せッ！」

船長はそう指示を出して鳥に近づく。鳥は逃げずに船長を睨んだままだ。

「仲間の元に送ってもらいたくて、わざわざ俺の所に来たのか？ たく、面倒くせえ野郎だな。宝を探すのは邪魔するし、食ってやるうにも不味くて臭くて食えたもんじゃねえ。とことんむかつく糞鳥だぜエ」

その言葉に、鳥はさらに強く睨んだように見えた。

「いくら粹があったところでな、鳥が人間様に勝つなんざあり得ねえんだよ！ くたばりやがれ！」

船長はそう言って剣を振り下ろした。その剣は全く抵抗を受けずに振り下ろされた。

（……………手ごたえがねえ）

剣を振り下ろす時、あまりにも抵抗がなさすぎた。何も切った感覚が無かったのだ。おまけに、肩から先の感覚も急になくなったよ。うな気が……………。

「お頭！ 腕が！」

「何？ ……う、うわああああ！」

部下に言われて腕を見ると、そこにはなにもなくなっていた。甲板に目を向けると、何か焼けた燃えカスのようなものが転がっていた。まさか、これが腕だというのか？

「いてえ！ いてえ！ 何なんだよ糞がア……あ？」

船長が方の傷口に手を当てて苦しがつていると、突然そこから火が噴き出した。

「うわああああ！ 燃える！ は、早く消しやがれッ！」

あまりのことに呆然としていた海賊たちは、船長の声で我に帰って、一斉に水をかけた。しかし、水をかけても船長の体の炎はまるで消える気配がない。

「うぎゃああああ！ 助けてくれ！ 焼ける焼ける焼ける！ 体が焼けちまう！」

炎は船長の体をじつくりと焼いて行つた。体中の皮が焼け剥げ、ジュージューと嫌な音をあげながら崩れ落ち、あたりには人の肉が焼ける嫌な臭いが漂った。

「た……すけ……」

消え入るような声で船長の口がそう声を漏らしたかと思つたら、船長は焼け死んでしまった。

「ひ……ひいいいい！」

誰かが悲鳴を上げて逃げ出した。するとその者の体から炎が噴き出し、炎に包まれてしまった。

「な、なんだよこれはああ！ 水、水を持ってきてくれエ！」

しかしさつき水をかけても消えなかつたのは全員見ている。だから今度は誰も水をかけようとしなない。

水をかけてもらえないと理解したその海賊は、海の中に飛び込んだ。他の海賊がそれを見下ろすと、海の中に入っても炎が消えないのが見えた。

「と、鳥を殺せえ！」

その声に、海賊たちは武器を手を取った。

「
鳥はそんな海賊たちを見て大きな鳴き声をあげた。言葉として意味を持たなかったとしても、その声からは大きな怒りが感じられた。」

次々に鳥に向かって振り下ろされる刃物。それらは、鳥がまとった炎に触れると、たちまち溶けてしまった。そして、その武器を振り下ろした者達の体に炎が灯り、嫌な臭いと共に焼け始めるのだ。

「海に飛び込め！ なんとか陸まで泳ぐんだ！」

誰かがそう叫んで海に飛び込んだ。しかし……。

「ぎゃああああ！ なんだ！ 海の中が熱いッ！」

海の中は燃えるように熱かった。何人か体が燃えたものが飛び込んだが、そんな程度で海が熱くなるはずがない。

しかし海は確かに巨大な熱を放っていた。飛び込んできた者を、三六〇度すべての方向から熱で包み込み、皮を剥ぎ取る。そして体中の肉が崩れ落ち、海の中に崩れていく……。

「駄目だ……海の中に飛び込んでも助からねえ……。ひい！」

絶望の呟きをする物に鳥が近づいてくる。

「た、助けてくれッ！ お前の仲間を殺しちゃったのは謝る！ 俺だって殺したくて殺したんじゃないやねーんだ！ お頭に命令されたから！」

言葉が通じるかも分からない鳥に向かって、海賊が命乞いをする。すると、一瞬鳥は動きを止めた。

「み、見逃してくれるのか……？」

海賊はそう解釈して頭をあげる。

「あ、ありがてえ！ 今度からは……あ、あがあああああ！」

鳥に向かって言葉を吐こうとした海賊の口から、仲間達を焼き払った炎が溢れだした。それは海賊の顔を焼いて、やがて全身を包み込んだ。

『殺したくなかった訳でもないんだろ？ 俺達のことを下に見ていたくせに今更命乞いなどするなッ！』

海賊はそんな声を聞いた気がした。

* * *

そんな地獄絵図とも言えるような海賊船を、女神は静かに見下ろしていた。

「鳳郎……、お前は復讐せずにはいられなかったのですね……。そんなことをして家族が生き返りましたか？ 幸せは取り戻せましたか？」

パチパチと木が燃える音に、海賊たちの悲鳴が混じる。しかし、女神の問いに答える声はない。

「……そうですね。お前はきつとこう答えるでしょう。『家族を取り返したくて復讐をしたんじゃない』と……。それでは鳳郎。お前の悲しみや怒りはこれで癒えましたか？ もう十分ですか？」

女神がそう問いかけても、返事はまた木の燃える音や悲鳴ばかり……。

「お前のちっぽけな復讐心がこれで満たされたというなら、なるほどお前のした行為は全く無意味ではなかったと言えるでしょう。しかしお前の憎悪は、ここに居る人間達だけでは足りないでしょう。お前はこの程度では満足しない」

鳳郎は答えない。すでに女神の存在などに意識が向いていない。鳳郎の頭にあるのは、目の前の人間達へ復讐すること。そして、その復讐心はここに居る以外の人間達にも向かうだろう。

「言葉にしがたい思いがします。お前達は、同胞の中で間違いを犯した者が出たら、その者だけが狂っているのだと言って切り捨て、自分達のことを守ります。しかし、自分達とは関係ない集団のものが間違いを犯せば、その集団すべてが狂っているのだと敵視してし

まっ」

今の鳳郎に、仇討すべき人間と、仇討すべきでない人間の区別などつくはずがない。

仕方がないだろう？ 鳳郎は鳥なのだし、今まで人間達とはほとんど関わらずに生きてきたのだ。目の前の人間達が犯した罪は、人間達すべてが犯した罪と同義。

人間達の間でだって、人種や国、宗教の違いからいがみ合っている例などいくらでもある。たった一発の銃弾で戦争が起きることだってあるのだ。

ならば、人間に家族を殺された鳥が、すべての人間達を恨むなど言えるはずもない。

「視野が狭いとか、思いやりの心が足りないと行ってしまえばそこまです。しかし悲しいことに、あなた達はそのようにできている」

* * *

「……………」

「や、やめてくれ……………許して……………」

最後まで生き残った海賊が、身につけている物を投げ出し、甲板に跪いて命乞いをする。

鳥を殺そうと戦った者は死んだ。逃げようと思って海に飛び込んだ者は死んだ。

ならばあとは、鳥に命乞いをする他ない。鳥に許してもらっほかは、生き残る方法はないのだ。しかし……………。

「うわ……………わあああああああああ！」

男が流した涙が、炎の雫に変わり、男の体を包み込んだ。けして消すことのできない炎。後は、苦しみながら焼け死ぬのみ……………。

* * *

「もはやお前を止めることはできません。お前自身が止まらない限り」
女神は最後にそう呟き、消えてしまった。

第八話『沈没』（後書き）

第2部終了。次回から3部です。

この3部が長引かなければ、サクッと終われるはず……。

次回以降は、更新が遅くなるかもしれません。

ですが、どんなに遅くとも今年中には完結すると思います。

第九話『小舟』

鳳郎は女神から得た力で、人間達に残酷な方法で復讐した。しかし、鳳郎の深い悲しみと怒りは、それでおさまることはなかった。

家族を殺した人間達に復讐しても、家族は戻ってこない。人間達を殺したからと言って、家族が殺された事実が無くなる訳ではないのである。

その悲しいまでの現実が、鳳郎に重くのしかかり、鳳郎の心を苛み続けたのだ。

もはや鳳郎に、人間達の区別はつかなかった。

自分の家族が殺された現場を見たわけではない。対象が人間の形をしてさえいれば、それはすべて復讐の対象に見えた。

あの日、鳳郎が炎の力を得た日を境に、女神の加護はなくなってしまったようだった。それまで一度も通りかかることすらなかった人間達の船が、島の近くに現れるようになった。

とはいっても、人間達の船が、鳳郎の住む島に用事があるはずもない。何もしなければ、その船は島の横を通り過ぎただろう。

しかし、鳳郎にはその船をただ見送ることなどできなかつた。

人間の作った船が目に入るたび、鳳郎の胸に怒りの炎が灯り、その船を焼こうとして燃え上がるのだ。

鳳郎はその炎を鎮めることはせずに、まっすぐと船に飛んで行って、怒りのままにその船を焼いた。当然、その船に乗っている人間達も焼き殺した。

そんなことを続けていると、鳳郎の島には武器や大砲を乗せた船がやってくるようになった。人間達が何かに気付いたのである。

鳳郎は、そんな船にも恐れずに向かつて行った。他の船とは違い、

無抵抗に焼き滅ぼすことはできなかったが、『神の炎』と『不老不死』の力を持つ鳳郎は、武装した人間達の船を炎の力で圧倒し、海の藻屑にした。

小競り合いがしばらく続いていると、人間達は船団を組んで鳳郎の島にやってくるようになった。

鳳郎の存在は、完全に人間達に知られるようになったらしい。数えきれない人間達を殺し続ける化物……。

どこかの国……いや、周辺のいくつかの国の王が、鳳郎の存在を危険視し、討伐のために船団を向かわせてきているのだろう。

もしも討伐できれば、国民からの支持も高まるし、化け物を退治した軍を持っていると言って、国の名も上がる。そんな思惑から、化け物退治を指示し、大船団を組んで鳳郎の住む島に押し寄せてきたのだ。

鳳郎は、そんな国の思惑など知らなかった。ただ、自分を殺すために人間達が向かってきているのだけは分かった。反撃し続ける理由としては、それだけで十分だった。

人間達は次々と船団を送り続けたが、神の力を持った鳳郎の前に敗れてしまった。

いくら攻撃しても手ごたえがなく、圧倒的な力を持って反撃される。戦うことには慣れていないはずの兵士達は、目の前の赤い鳥は、自分達の理解を越えた存在なのだと思いきや知らされ、戦意を喪失して敗走して行った。

大きな戦争規模の死者が出るほど、鳳郎と人間達の争いは続いたが、やがて人間達の方が諦めた。

国王は国民達に対して、一定の海域　鳳郎の島の近く　に入ることを禁じる命令を出した。事実上の、人間達の敗北宣言だと言える。

これにより人間達が島の周りに近づくことはほとんどなくなった。

ところで、女神の加護が無くなって変わったことは、人間達が訪れるようになっただけではない。

激しい嵐が島を襲うようになり、日照りによって島の植物が腐り果て、病気が流行って、魚や動物が死に絶えるようなことも起きるようになった。

鳳郎は、嵐が来れば翼を大きく広げて墓を守り、日照りや病気によつて食べる物が無くなれば、水だけを飲んで飢えに耐えた。

はじめの頃は、人間達への怒りの感情から、そんなものに対して苦しみを感じることはなかった。

しかし、島に人間達が近づくことが減ってから、厳しい環境の中で考える時間が増え、鳳郎の怒りや悲しみは、次第に小さくなっていった。

そんな時、島の近くを人間達の船が通りかかった。

国がこの近くの海域に入ることを禁じたと言っても、風や潮の流れによつてたどり着いてしまうことがあるし、遙か遠くの国からこの近くまで航海に来る船もある。

だから、ごくたまに島の近くを人間達の船が通りかかることがあるのだ。

そんな時鳳郎は、ほとんど義務心からその船に向かって行き、炎を使つて海に沈めた。

悲鳴をあげる人間達、わずかな抵抗を見せる人間達、命乞いをする人間達……。

昔はそれに対して、優越感を覚えていた鳳郎だったが、この頃になるとそれを見るのが苦痛に感じるようになっていた。

ある時、一艘の船が島の近くを通りかかった。鳳郎は翼を広げて、その船に向かって行こうとしたが、どうにも飛び立つ気分にはなれず、そのまま見送ることにした。

その船が水平線の向こうに消えるのを見た時、鳳郎はなぜか安堵してしまった。

その後また船は通りかかったが、鳳郎はまたその船を見送ってしまった。

「一艘見逃せば二艘見逃しても同じことだ……」

鳳郎はそう呟いたが、その後三艘、四艘と船が通りかかって、前のように襲いかかることはしなかった。

ある時、島を巨大な嵐が襲った。

嵐が島に来ることはよくあることだったが、その時はおまけに人間も島にやってきた。どうやら、嵐のせいで船が難破し、小舟に乗って流れついでしまったらしい。

島に上陸されたのでは無視をする訳にもいかない。鳳郎は、島の影に隠れて人間に話しかけることにした。この頃には、鳳郎は人間の言葉を覚え、自在に操ることができるようになっていた。

「その人間、聞いているか？」

「な、私に話しかけるのは誰ですか？」

急に聞こえてきた声に怯え、人間は周りを見渡した。声は、人ならざる者の気配がしたからだ。

「私はこの島に住む鳥だ。お前はこの島に何をしにやってきたのだ？」

「鳥……。ま、まさか！ 『孤島に住む赤い凶鳥』とは貴方のことですか！？」

人間は取り乱し、より一層怯え始めた。

「凶鳥……。？ それは、私のことなのか……？」

鳳郎はそう呟き、しばし考え込んだが、確かにそう言われても仕方がないだろうと思った。

自分は一体どれだけの船を海に沈めたことだろう？ 一体どれだけの人間を殺したことだろう？ 初めは復讐のためだったが、次第にそれはただの暴挙になり果てて……。

いや、そもそも最初の一回。海賊たちを焼き殺した以外は、人間達に罪などなかったではないか。それなのに、自分は殺戮を続けて……。

「ゆ、許してください！ 命ばかりはどうかつ！ 私は船から振り落とされ、共に投げ出された小舟にしがみついてこの島に流されてきただけでございます！ 決して、あなたに危害を加えることはいないと誓います！ ですから、どうか……どうかッ！」

人間は涙をぼろぼろとこぼし、額を砂浜にこすりつけ、顔は鼻水と砂でぐちゃぐちゃになり、何ともみじめな姿だった。

その姿は、鳳郎の心の中にあつた凶悪な人間の姿ではなく、何とも情けなく、か弱い存在に見えたのだった。

（人間とは……こんなに弱々しい生き物だったのか……）
「……島の奥には入るな。嵐がやみ、日が昇ったら島を去れ」

鳳郎はそう言い放ち、島の奥へ帰って行った。
人間はそのまま朝になるまでその場を動かさず、日が昇ると同時に小舟に乗って海に向かって漕ぎだして行った。

数日後、数十年ぶりに人間達の船団が島に押し寄せてきた。

どうやら、この間逃げ帰った人間の話を聞き、孤島に住む赤い凶鳥の力が弱まったのだと人間達は思い込み、再び討伐のために軍を向かわせてきたらしい。

鳳郎は、そんな人間達に呆れた。しかし、呆れただけで、特に怒りの感情は湧いては来なかった。

力が弱まったと思われてまた来られる訳にもいかなかったから、

鳳郎は船団に対しては前と同じように反撃した。
何度か反撃すると、人間達の攻撃は止んだ。

しかし、攻撃は来なくなつたが、人間達の船は島の周りを普通に通り過ぎるようになった。

孤島に住む赤い凶鳥は、自分に襲いかかる船に対しては反撃するが、ただ通り過ぎるだけの船には手を出さないと思つたかららしい。実際、その通りだつた。鳳郎は通り過ぎるだけの船は見逃すようになった。何度か島に人間が流れ着くこともあつたが、島の奥に入る前に警告し、すぐに島の外に逃げ出す人間に対しては攻撃するとはなかつた。

鳳郎は、物思いにふけるようになっていた。

自分はなぜ生きているのだろうか？　そもそも、自分は生きているのだろうか？　機械的に行動するだけで、生きているとはとても言えないのではないか？

『このままでは、あまりに悔しいではありませんか』

「鳳子……」

鳳郎はあの場所に来ていた。鳳子が死んだあの場所に……。

『このまま死んだのでは、不幸になるためだけに生まれてきたようではありませんか！　子供達はどのように生まれてきたのです？　私達はどのように生まれてきたのです？　幸せに生きるためではないのですか？　嫌われし鳥として生まれ、嫌われし鳥として死ぬ。私はそれが非常に悔しい……だからあなたに託すのです。私達だって幸せに生きる権利があるのだということを証明して欲しいのです！』

鳳子はあの日そう言った。しかし鳳郎は、復讐を除いて具体的に何かをした訳ではない。ただ生きているだけ……。

「鳳子……私はこれからどうすればいいのだろうか？」

途方もない時間が過ぎてから、今更のように鳳郎はそのことを悩むようになっていた。しかし、結局答えは出せないまま時間は過ぎ

る……。

気が付けば、百年近い時間が過ぎていた。

そんな時、嵐でもないのに、人間を乗せた小舟が一艘、島に向かってきていた。

第九話『小舟』（後書き）

ダイジェスト回です。

ほぼ説明だけの100年間。

第十話『会話』

「……あれは何だ？」

鳳郎が海の彼方を眺めていると、一艘の船がこちらに向かってくるのが見えた。

海に浮かぶ物の正体が船だと分かった。「ああ、いつもの漂流船か……」と一瞬気を緩めたが、良く考えると不審な点があった。

今日昨日と、海は全く荒れずに穏やかだった。それなのに船が難破することなどあり得ない。嵐にあつて小舟ごと海に放り出される状況になるはずがないのだ。

ならばあの小舟に乗っている人間は、わざわざ大きな船から小舟に乗り換えてここに向かつてきていることになる。しかし、周りを見渡しても他の船は見つからない。かなり遠くに船を止めているということか？

なぜそんなことをする必要が……？ 警戒しているということか？ たった一羽で幾万の人間を殺した赤い凶鳥を？

「ならば……敵か……？」

鳳郎は緊張して小舟をさらに注意深く見つめた。鳥の視力は人間の数倍はある。あちらからはここが見えなくても、こちらからは海の上に浮かぶ小舟が良く見える。

「……………」

鳳郎は船を注意深く見てみると、そこには予想に反したものが乗っていた。

人間は乗っている。ただ、その人間は明らかに老人だった。

顔を見ると、どうやら男であるようだった。見るからに弱々しいという感じではないが、特別力強いとも思えなかった。せいぜい、歳の割には元気なお年寄りといった程度だ。

状況が異様だったのは、乗っていたのが老人だったというだけではない。その老人が着ている服が真っ黒で、所々に寶石が散りばめられており、しかも体中を覆うような服を着ていたのだ。

今は夏だ。そんな恰好をすれば辛いはず。なのにわざわざそんな恰好をしているのが、鳳郎には理解できなかった。

さらに不思議だったのは、船だ。小舟には老人一人しか乗っていない。そしてその老人は、船を漕いでいないのだ。それにも関わらず、船はまっすぐと島に向かってきている。

「面妖な……」

鳳郎はそう呟きながら、どうしたものかと頭を抱えた。百年この島で生きていて、こんなことは一度もなかった。どう対処するべきか即決できない……。

鳳郎が悩んでいるうちに、小舟は島に上陸しようとしていた。島の内部にまで入られるのはまずい。とりあえずあの船が上陸した海岸まで行き、相手の出方を待って対応しようと考え、鳳郎は木や崖に隠れるように飛び立った。

「相手の出方を待ってか……少し前なら考えられんだろうな」

以前までなら、怪しい怪しくない関係なく焼き払っていた。悩む必要などない。自分には女神から与えられた最強の炎の力があるのだから。

鳳郎は、そんな自分がおかしくなって、少し笑うのだった。

* * *

鳳郎が、海岸が良く見える木の影まで来ると、すでに老人は上陸していた。

いつもならここで、島の中に入るなと警告する所なのだが、今日

は相手の出方を見る。何もせず引き返せばよし、何か妙なことをするようなら……力を持って対応せざるを得なくなる。

しかし、老人はどちらもしなかった。というより、本当に何もしなかった。

老人は島に上陸した後、じつと森の奥を見つめ、静かに立っていた。

ただただ立ち尽くしている老人に対して、鳳郎はどう対応するべきか悩み、追いつくことも、攻撃することもできなかった。

膠着状態が続く。その場には風が木の葉を揺らす音と波のざわめく音以外何も聞こえない。

そのままの状態で、一時間が過ぎた。

老人は相変わらず立ち尽くしたままだったが、二度三度周りを見渡した後、目をつぶって俯き、一言一言呟いた。

すると目を開き、意を決したように叫んだ。

「この島に住む強力な力を持った赤き鳥よ！ 聞いているか？」

鳳郎はびくりとして耳を澄ます。やはりこの老人は自分に会いに来たのだ。そして見張られていることを知っている。油断してはならない……。

「私は神林王国かみはやしからやってきた呪術師で、相崎忠政あいきまたまみというツ！ どうか姿を現してはくれないか？」

鳳郎は一瞬驚いた。神林王国と言えば、鳳郎が生まれた島にある国だ。四国のうち、最も資源と食料が少ない小国だった。しかし、人材だけは豊富で、大陸まで名前を轟かすほどの人間も居た。

そんな国の呪術師が、一体何の用があるというのだろうか？

「何用か？」

鳳郎は目の前の人間が自分の故郷の人間であり、老人一人では何

もできないだろうと思ひ、呼びかけに答えることにした。

鳳郎の答える声が聞こえると、相崎と名乗った老人はその場にひざまずき、敵意がないことを示した。

「先ほども言いましたが、私は神林王国の呪術師です。たくさん弟子を抱え、四国の中でも五本の指に入るほどの力を持っていると自負しております」

「お前が何者かなど聞いていない。何をしに来たのかと聞いている用がなければ早々に立ち去れ！ 島の奥に入りたいというのなら、力を持つてお前を排除するぞ」

鳳郎は語気を強め、やや脅し気味に相崎にそう告げた。まだ警戒を解く訳にはいかない。相崎の言っていることが本当かは知らないが、実力を持った人間なら油断ならない。

「あなたの話は、幼いころからずっと聞かされていました。大海の途中にポツンと浮かぶ孤島に住む、残酷非情な赤い鳥。まだ若く、好奇心が旺盛だった頃の私は、いつか自分の手で退治して、手柄をあげたいと思っております」

「ほう……ずいぶんと正直だな……」

鳳郎はいつでも炎を生み出せる体勢をとった。

見たところ、相崎はずいぶんと歳をとっている。このまま老衰で死ぬのでは満足できず、どうせなら悪名高い赤い凶鳥と一騎打ちして殺されたいとも思ったのかもしれない。

どれほど力を持っているとは言っても、人間では寿命にも力にも限界がある。まさか鳳郎が劣ることはないだろう。ならば、一瞬のうち勝負を決めず、少し演武をしてから殺してやってもいい。

鳳郎はそんなことを考えて相崎の話に耳を傾ける。

「しかし、ある時から孤島に住む赤い鳥のことを、色々と思つようになりました」

「何？」

「赤い鳥はなぜ誰も訪れない孤島に居るのだろうか？ それだけの力を持ちながら、なぜ世に羽ばたこうとしないのだろうか？ なぜ人間達を襲うのだろうか？ 感情はあるのだろうか？ 知性は？ 何か島にいなければならない使命でもあるのか？」

鳳郎は首を傾げた。自分が思っていたのとは違う雰囲気になってきたからだ。

赤い鳥のことを想うようになったと？ この老人が何処に話を持って行くこうとしているのか分からない。

「私が幼い頃は、近づく者すべてを焼き払う残酷な鳥というのが、あなたに対する世間の一般的な認識でした。しかし、数十年前から自分に危害を加えない者に対しては、島に一時的に上陸する者に対しても攻撃をしない鳥という認識に変わって行きました。ある男が、島から生還したという話が広まってからです」

恐らくその男は、嵐の夜に小舟に乗って流されてきた男だろう。あの後人間達から再び攻撃があつたくらいだから、それなりの衝撃を与えた出来事だったのかもしれない。

「その男は、国に戻るとあの島から生きて帰ったという話をして驚かれました。そして、変わった言葉を残しています。『なぜか、鳥の言葉が悲しいものに聞こえた』……と」

その言葉には鳳郎も驚いた。

確かにあの時は、それまでの自分の行動を思い返し、感傷的になつていたかもしれない。しかし、言葉にはそのことを出さなかつたと思う。ならば想いか。言葉の節々にその時の自分の感情が混ざり、男はそれを感じたのかもしれない。

「後にも先にも、鳥が悲しそうに感じられたと言つたのはその男だけでしたが、私の中で赤い鳥に対する想いは深くなりました。鳥は悲しんでいる。なぜ？ 島に留まる理由がそこにあるのだろうか？

島に訪れ、直接話ができればそれが分かるのだろうか？」

気付くと鳳郎は、相崎の話に真剣に耳を傾けていた。この百年間、自分を他人に評価してもらったことなどない。ただただ孤独に島に居て、人間達と戦う毎日だった。そんな鳳郎にとって、他人と会話をするのがなぜか重要なことに思えたのだ。

「島に行きたいと思いました。しかし私にはまだ守るものが多すぎた。私を頼ってくる弟子達、私の身を案じてくれる友人達、私をしただしてくれる者たちも大勢いるのです。なので、なかなか島に来ることはできませんでした」

敵意を持たないものに対しては大人しくなつたらしいという話も、絶対ではない。現に昔は近づく者には容赦なく攻撃していたのだ。

そんな鳥の住む島に上陸して、しかも話がしたいなどというのは非常に危険と言える。己の鳥に対する想いを満たすためだけに上陸するのをためらうのは当たり前だろう。

「しかし見ての通り、私はこのように歳をとり、守るものは少なくなりました。私の開いた修行場も、すべて弟子に引き継ぎ、親しくしていた者達には別れのあいさつを済ませてきております。後は死を待つのみ身となつた私です、灼熱の炎に焼かれて殺される覚悟はできています。死の間際、あなたの話を少しでも聞かせてもらえれば。死後の世界に持っていく土産には十分すぎるでしょう」

覚悟。鳳郎は、目の前の人間からかつてない強い覚悟を感じた。相崎は、身の回りのすべてを片付け、殺されるかもしれないことを分かった上で、たった一人でこの島にやってきている。それも、たかが鳥一羽の話を知りたいがためだけに……。

「姿を見せてください！ 幼いことから最も身近で、最も遠い存在だったあなたの姿を！」

空を飛ばば後ろ指をさされ、声をあげれば不気味だと罵られた自分の姿。百年経ってもいまだに癒えることのない心の傷。

それを今……鳳郎は乗り越える……。

「なんと立派な……」

相崎は思わず感嘆の声を漏らした。

鳳郎は力強く羽ばたき、相崎から良く見える木の枝にとまった。

太陽の光を受けて、鮮やかに映える赤い羽根。翼を広げ、尾羽や冠羽を揺らしながら大空を飛ぶ姿を見れば、誰もそれを醜いなどと罵ることはないだろう。

「特に面白みもない長い話だ。しかし、私にとってはとても重要な話だ。お前にとって意義のある話かは分からないが、付き合ってもらえるなら私はそれを嬉しく思う……」

鳳郎は目を細め、相崎にそう告げた。相崎は何も言わず、こくりと頷いた後身を正した。話を聞いてくれるということだろう。

「私が生まれたのはお前の国だ。あれは百年ほど前、その頃私は……」

淡々と、しかし思いを込めて鳳郎は語り始めた。生まれてから今までの生涯を、相崎はやはり何も言わず、それを静かに聞いていた。

* * *

「……これで、私の話はすべてだ」

鳳郎はすべてを話し終えた。百年の間があるとは言っても、そのほとんどは復讐で埋め尽くされている。語る内容はそう多くない。太陽がすっかり傾く頃には、鳳郎の話は終わった。

相崎は話を聞き終わると、おもむろに自分の胸に手を伸ばし、首飾りを鳳郎に見せた。どうやら開くようになっており、中には人の絵が入っているらしかった。

「妻の絵だ」

相崎はそう言って鳳郎にかざしてきたので、鳳郎はその絵をしつかりと見た。まだ若く、とても美しい女性の絵が描かれていた。

「美しい女性だ」

鳳郎が正直にその口になると、相崎は一度頷き、大切そうに胸にしまった。

「妻は数十年前に事故で亡くなってしまったんです。まだ結婚したばかりでしてね、子供もいなかった。その後何度か見合いの話も来たがすべて断りました。私は生涯妻以外の女性を愛することはしなかつたし、出来ませんでした」

鳳郎はそれを聞いて顔を伏せる。相崎も愛する者を突然奪われた経験があるのだ。

「墓は家のすぐ近くなんです。だからよく花を持っていきます。そして墓の前に立つたびに、涙が溢れそうになるんです。だから……私はあなたの気持ちが良く分かる……」

相崎はそう言って、一筋に涙を零した。

「ありがとう！」

しかし、すぐに顔をあげて鳳郎を見た。その顔は穏やかだったので、鳳郎は相崎の中で愛する人を失った話は、過去の物になりつつあるのだと感じた。

「私の話が、何かの役に立てたのなら幸いです」

これで相崎の要件は終わっただろう。自分は語るべきことはすべて語ったのだから……。鳳郎はまた永遠の生をこの島でひたすら過ごすことになる。

「赤い鳥よ、あなたは自分の罪から解き放たれたいとは思いませんか？」

相崎は突然そんなことを言い出した。

「どついう意味だ？」

「女神はあなたの不老不死は罰であると言ったのでしょ？ 確かに私もそう思います。永遠に生き続けることが、幸せであるとは思えない。私が老人で、体のあちこちに不調が出て苦しんでいるからかもしれないが……」

「そうとも、不死は自分にとっては罰だ。死にたくとも死ねない。解放されたくとも解放されない。家族の……愛すべき者達の後を追いたくとも……追えないのだ……」。

「鳳郎にはそれが良く分かる。だがそれがどうしたというのだろう？ 『罪から解放されたくはないか』とは？」

「私には、優秀な力を持った弟子たちがたくさんおります。呪術師の力……それは祈祷、占い、呪い……そして封印です」

「封印……」

「祈祷は魔を払い、占いは未来を知り、呪いはある事象を起こします。そして封印は、何かしらの力を封じ込めることができる」

「先ほど、漕いでもないのに相崎が乗った船が海を進んでいたのも呪術の力だろう。そして封印は、力を封じ込めることができるという。」

「私一人では神の罰を封じ込めることはできません。しかし、私の弟子達と力を合わせれば、あなたを解き放つことができるかもしれない」

鳳郎は、相崎が言わんとしていることを理解した。

「私を……殺すことができるというのだな……？」

相崎はこくりと頷く。

「危害を加えるつもりなどない。話を聞きに来ただけだという私がこんな話をするのを疑うでしょう。ですが私の話に嘘はありません。あなたに危害を加えるつもりなど全くない。ですから強制はしません」

相崎は鳳郎の顔をまっすぐとみる。その顔は使命に燃えているようにも見えた。

「ですが、私は思うのです。あなたはこれ以上苦しむ必要があるのでしょうか？ 家族の仇討をするために力を求めたら、それは罪だと言って理不尽に罰を与えられ、永遠に休むことができない。百年という時間のほとんどを、あなたは戦うことに費やしました。体に幾千幾万もの傷を付け、幾千幾万もの罵声をその耳で聞いた。あなたはもう十分苦しんだはずではありませんか？ そろそろすべてから解放されてもいいはずですよ」

相崎が嘘を言っているとは思えない。演技ならあれほど感情のこもった言葉は言えないだろう。

それに、鳳郎は生に対して特に執着はない。そもそも死ぬるものならとつくに死んでいたかもしれない。騙された上で殺されたところで、それがなんである？ しかし……。

「私は墓を守らなくてはならない……」

家族の墓。これが今でも鳳郎をこの島に……この世界に繋ぎとめている。それを放棄することなどできるものか。

「……埋葬とは何でしょうか？」

「何……？」

相崎がまた話を変えた。

「私は妻を失った時、埋葬は死者のためにするのだと思いました。どのような生であったとしても、最低限生きた証として墓という形で残してやりたい。そう考えてするものだと思います。しかし、歳をとるうちに別の側面もあるのではないかと考えるようになったのです。それは、残された生者のためです」

「生者のため……」

「死は悲しいものです。ですが悲しむのは死者ではなく生者です。墓に埋葬するというのは、もちろん死者に対してするという意味合いもあるでしょうが、生者を慰めてやるという意義もあるのではな

いでしょうか？」

鳳郎はそれが何となく理解できるような気がした。そうとも、鳳子達は埋葬してくれなど一言も言わなかった。鳳郎がそうしたかったからしたのだ。それによって、幾分か自分の悲しみが紛れた気がする。

「別れはつらい。だが、墓に行けばまだそこに居る。声は聞こえずとも、姿は見えずとも、そこにいるという気持ちになる。生者はそれによって悲しみを紛らわせる。その時墓は、誰のためにあると言えるのでしょうか？ 死者のためではない。生者のためです」

「……お前の言いたいことも分かる。だが、それでなんだというのだ？」

相崎は意を決したように口を開いた。

「あなたが死ななければ、あなたの家族も永遠に死ぬことができないのではありませんか？」

「なッ!？」

鳳郎は相崎の一言で衝撃を受けた。何か自分の中の心を見透かされたようなそんな衝撃を……。

「失礼なことを言いましたね……。気に障ったのなら謝ります。私になにを言っても、あなたの生き死にを決める権利などありません。ですがもし……」

そう呟いて、相崎は懐から玉のようなものを取り出してその場に置いた。

「もし休みたいと思ったのならこの玉を割ってください。すぐに駆けつけて迎えに来ます。……ただ、私も長くはないと思いますので、決心されるならお早めに……」

相崎はそう言って一礼をしてから小舟に向かって歩き始めた。

「……待ってくれ!」

鳳郎はそう叫んで相崎を呼びとめた。

「……決心はついた。確かに私は家族のためと言いながら、自分のことしか考えていなかったのかもしれない……」

「では……」

鳳郎は目を瞑り、少し間を置いてから相崎に言った。

「私を、殺してくれ」

第十一話 『航海』

相崎は鳳郎の意志を確認すると、小さな鈴を取り出してそれを鳴らした。

鈴を鳴らせてからしばらくすると船がやってきた。鈴の音が、沖合に止まっていた船まで届くはずがないのだが、これも呪術の一つだろうか？ 呪文を呟く様な仕草は全くなかったのだが……。

鳳郎が首を傾げていると、それを察した相崎が説明してくれた。

「鈴を良く見てください。小さな文字が書いてあるでしょう？」

言われて鈴を良く見ると、針で波線を描いたような字が彫り込んであった。

「これが呪文の代わりです。物体に呪文を書くことによって発動させるものもあるのです。ただ、呪文を書くだけでなく、その物体に気を送り込まなくてはなりません……」

鳳郎はそう言うものかと心の中で呟き、深くは気に留めなかった。難しいことは分からないし、原理が分かれば特に考え込むこともない。

相崎が言うには、船に乗っているのはすべて自分の弟子達らしい。弟子達は、相沢の無事を確認すると表情を緩めたが、すぐに鳳郎の存在に気付いて緊張した。

何しろどれだけの人間を焼き殺したかもわからない怪物なのだ。安心だと判断したから呼ばれたのだろうが、そんな危ない鳥の傍にいつまでも居たくはない。急いで梯子はしを下ろし、手招きして相崎を呼ぶ。

「少し話をします」

相崎はそう言って梯子を登って行った。鳳郎が船に乗ることを話

に行くのだろう。いきなり鳳郎が船に乗り込めば、混乱してしまう。相崎が船に乗り込んでから少しすると、怒鳴るような声が聞こえ始めた。

これは説得するのは難航しそうだなと思い、鳳郎は島を振り返って墓がある方を見つめた。

「鳳子……すまない……」

鳳郎は一言謝罪の言葉を口にした。鳳子の期待……遺言ともとれる最後の言葉を裏切ってしまったことについて……。

『私達だつて幸せに生きる権利があるのだということ証明して欲しいのです！』

「お前達が殺されてしまった時点で、私に幸せな生などあり得なかつたんだよ……」

鳳郎の願いとは何だつたのか？ 仲間を得ることだ。孤独から解放され、共に生を歩む仲間を手に入れ、精一杯生きること。

一度は手に入れることができた。しかしそれはわずかの時間に奪い去られ、鳳郎は悲しみの底に沈んでしまった。

もう一度それを手に入れるために旅立とうとしても、鳳郎は家族の亡骸に縋り、守り、この島に縫い止められてしまった。

幸せな生などあり得るはずもない……。

だが、それなら……。

『このままでは、あまりに悔しいではありませんか。……誰からも認められず、忌み嫌われ、住んでいた故郷を追い出される』

これくらいはできたはずじゃないのか？ この言葉は、誰かから認めてもらいたい、好かれないまでも、嫌われることなく生きたかつたと鳳郎に訴えたようにも解釈できる。ならば、鳳郎がそのように生きたなら、間接的に鳳子や子供達も認められたことになるのではなかつたのだろうか？

しかし鳳郎はそのようには生きなかつた。それどころか、正反対

のことをしてしまったのだ。

数えきれないほどの人間達を、怒りにまかせて焼きつくした。その結果、人間達は鳳郎を恐れ、怯え、距離を取った。そしてしまいには、『孤島に住む赤い凶鳥』と呼んで化け物扱いをしたのだ。

別に認められるなら人間達でなくてもいい。むしろ、認められるというなら、同胞である鳥達に認めてらうのが一番いいだろう。だが、赤い凶鳥と呼ばれるまでになった鳳郎を、鳥達は迎え入れてくれるだろうか？

圧倒的な力の前に跪ひざまづき、ゴマをするようにご機嫌伺いをしてくることならあるかもしれないが、それでは鳳子が言った『認められる』ということとは違う気がする。

支配ではなく、共生したいのだ。共に生きたい。わずかな時間でもいいから仲間として認められたい……。

しかし、もう何もかも遅すぎる。鳥にも人間にも……その他ありとあらゆる生き物に認められることなどあるものか。

「赤き鳥よ！」

相崎が船の上から鳳郎を呼ぶ。

「話がまとまりました！ 乗ってください！」

「……分かった！ ありがとう！」

鳳郎は相崎に返事をして、飛び立つ前にもう一度島の方を見た。「所詮私は嫌われし鳥だ。一体何ができるというのか。……もう、休みたい」

言い訳の様に呟き、鳳郎は飛び立った。

*

*

*

出発してから数時間がたった。船は海の波に揺られてゆっくりと前に進んでいる。

鳳郎は船尾にとまり、ぼんやりと島の方向を眺め続けていた。

鳳郎が船に乗り込むと、相崎の弟子達は恐れるように鳳郎から距離を取った。

これが百年間の自分の行ってきたことに対する結果か、鳳郎はそう思いながら自嘲し、邪魔にならないように船尾移動したのだ。

船が沖に出てから、船員である弟子達が、たまに鳳郎の様子を見に来る。どうやら船が燃えていないかを確認しているらしい。鳳郎は、それは当然だろうと思いつつも少し悲しかった。

島が見えなくなる瞬間、鳳郎は反射的に翼を広げて、飛び立とうとした。無意識のうちには島に戻ろうとしてしまったのだ。

しかしすぐに翼をたたみ、水平線を見つめた。その後もなんだか落ち着かず、翼を広げては閉じるのを繰り返した。

鳳郎は自分の島に帰ろうとしているのだ。だが、寂しさからではない。恐らく……。

「赤き鳥よ」

相崎が声をかけてきた。どうやら鳳郎が落ち着かないのを見てやってきたらしい。

「落ち着かないようですな。これから死のうというのですから当たり前ですが」

「どうにも島に帰ろうとして体がうずくのだ。まあ大したことはない。ここで踊っているだけで本当に帰ったりはしないさ」

「……死ぬのが怖いのですか？」

恐怖、この世で死の恐怖以上のものはそうないだろう。それを考えれば、鳳郎が落ち着かないのも当たり前の話だ。だが、鳳郎は首を振った。

「恐怖ではない。たぶんこれは罪悪感だ……」

「罪悪感……？ 家族の墓を放ってきたことですか？」

鳳郎はまた首を振った。

「確かに放ってきたことは忍びない。だがそのことで悩んでいたのではないのだ。……はたして、私は本当に死んでもいいのだろうかと思っていたのだ……」

「……は？」

相崎は、どういふことか分からずに首を傾げる。

「女神は私の永遠の生が……いや、死を奪うことが罰だと言った。ならば私は、償いから逃げ出すことになる。それに対して罪悪感を覚えていたのだ」

「何を言うかと思えば、あなたは十分すぎるほど生きた。普通の鳥は十年生きれば長い方だ。あなたはそれの十倍は生きて苦しんだんですよ？」

「しかし、人間は軽く七十年は生きる。百年生きる人間は珍しいが、ありえない話ではない。なら、永遠の生を苦しむ時間としては、百年は短すぎると思う」

「あなたは鳥だ。何の引け目も感じる必要はない。大体、復讐することが罪だとする女神が間違っている」

「……それはそうだと思うが」

鳳郎は今だつて、海賊たちに対して復讐したこと、家族の仇を取ったことを後悔していない。しかしその後の行動はどうだっただろうか？

復讐として海賊たちを焼き殺すことが罪なら、罪なき者達を焼き殺すことは重罪のはず。それに対する償いはどうなのだ？

そう言う思考が働き、これから死のうとする自分の行動に対して罪悪感を覚えてしまうのだろうか。

「それより赤き鳥、ちょっと来て欲しいのですが？」

「ああ、構わない……」

相崎は鳳郎を船の中に案内した。そして倉庫のような場所まで来ると、木箱を指さした。

「大変申し訳ないのですが、入国してから私の道場に行くまで、この箱の中に入って欲しいのです」

「箱の中に？ なぜ？」

「入国するときに、あなたが国の人間に見られるのはまずい。だから、荷物として道場までお連れしたいのです。あなたが現れてから……というと、気を悪くされるかもしれませんが、周辺国の人間は、赤い鳥に対して神経質になっているのです。少しでも体が赤い鳥はすべて捕まえられ、殺処分されてしまうほどです」

「なんだって……？」

自分が国の人間に見られるのがまずいというのはすんなり納得したが、赤い鳥が殺処分されるという話は衝撃だった。

かつては自分を迫害した鳥達、又はその子孫達とは言っても、自分のせいで大きな迷惑をかけているのは申し訳ない。

凶鳥……不幸を運ぶ鳥、不幸を生み出す鳥、存在するだけで周りを不幸にする……。

「心配ですか？ 大丈夫ですよ。あなたには鉄をも溶かす無敵の炎があるじゃないですか。こんな木の箱にいくら細工をした所で、あなたを畏になどはめられません」

相崎は、鳳郎がこの箱を怪しんで深刻な表情をしていると思ったようだった。

「相崎……一つ頼みがある……」

鳳郎は声が震えそうになるのを必死でこらえながら口を開いた。

「なんですか？」

「もし私を殺すことができたなら、そのことを国に……世界に対して公表してくれないだろうか？ そのせいで迷惑をかけるかもしれないが、私は消えなければならぬ……」

相崎は少し驚いた表情をして鳳郎を見た。

鳳郎は木箱の開いている所から中に入り、相崎を振り返る。死ぬことに対する罪悪感、すっかり忘れ去ってしまった。

「頼む……」

鳳郎の眩きに対し、相崎は静かに頷いた。

第十二話 『帰郷』

相崎は鳳郎に話しかけた頃には、神林王国かみやままであと少しのところだったらしい。鳳郎が木箱の中に入ってから、いくらもしないうちに港の音が聞こえてきた。

入港したらできるだけ音は出さないように指示を出されたため、鳳郎は息を潜めて木箱の中でじっとしていた。

しばらくは、ゆらりゆらりと波に揺られている感覚しかなかったが、突然木箱が大きな音をたてて揺れた。港に入り、箱を運ぶために台車にでも乗せたのだろう。

「おい！ その箱までッ！」

ガヤガヤとした港の中に、大きく叫ぶ声が響いた。

鳳郎は、この声が自分の入っているはこのことを指しているのではないことを祈った。しかし箱の動きが止まったので、相崎達が呼び止められたのだとすぐに察しがついた。

鳳郎は今まで以上に息を潜めて聞き耳を立てる。

「お前達の荷物の中で、その箱だけ異様に大きいな。少し中身を見せてみる」

「これはこれは、入国審査官殿、今日もお勤めご苦労様です。荷物検査ですか？」

相崎がやけに説明臭く挨拶をする。鳳郎に状況を伝えようとしているのだろう。どうやらこの木箱は不審に思われたらしい。

「挨拶はいらない。さっさと中身を見せろ」

「できません」

「何？」

相崎はきつぱりと中身を見せることを拒否する。すると、審査官

の声色が変わった。余計に怪しまれたようだ。

「……お前達呪術師だな。呪術師の荷物は丁寧に審査するのは常識だし、マニュアルにも優先的に審査するようという項目がある。確認せずに通す訳にはいかなあ」

「この荷物は王宮へのお届け物です。勝手に中身を空ける訳にはいきません」

「……ほう？」

審査員は値踏みするような声を出す。状況はまるでよくなっていないようだ。

「王宮への荷物だと？ この何の変哲もない木箱が？ 王宮にこんな質素な荷物が届くはずあるまい。この箱のどこに金属がつかわれている？ 宝石はどこだ？ 最低でも見栄えのいいように模様くらいあるべきだろうが。これが王宮への荷物のはずがない」

審査官は見破ってやったぞと言わんばかりの様子だ。今にも無理やり木箱を開けそうな雰囲気さえ感じる。

相崎も相崎だ。呪術師として何十年も過ごしているなら、呪術師に対する審査が厳しいことくらい知っているはず。それに対して何の対策もしなかったのか？ 変装くらいはするべきだったろうに……。

いや……そんなことは相崎も百も承知しているだろう。しかし相崎は、そんな対策をする暇などなかったのだ。なぜなら、鳳郎を連れて帰ることは予定外だったからだ。

初めから鳳郎を連れて帰る予定だったならともかく、鳳郎を連れて帰る予定ではなかったのだから、対策などしているわけがない。船の中にたまたまあった箱の中に鳳郎を押し込めるのが精いっぱいだったのだろう。

だから後は相崎の話術だけが頼りだ。今までの会話を聞く限り、かなり部が悪い様だが……。

「どうあつても中身を見せないつもりか？ これ以上拒否するつもりなら、法律によってお前を逮捕することになるぞ？」

それまで静かだった弟子達が少しざわめいた。それだけでもかなり緊迫した状況だというのが分かった。

「……では仕方ありません。これで通してもらえませんか？」

「なんだ……？ そ、それはッ！」

審査官の様子が変わった。非常に驚いているようで、声を荒げるのが抑えているようでもあった。

「これでもまだ通していただけないというのですか？」

「い……いや、しかし……」

審査官は迷っている様子だった。状況がマシになったのは分かったが、何を迷っているのだろうか？

「審査官殿。あなたはマニュアル通りに行動できる優秀な方だ。公務員、特にこういう仕事をするにはそう言う性格の方がいいと思うのですがね審査官殿……たまにはマニュアルを無視された方が、自分に有益なこともあるのですよ。もしかしたら、ここが人生の分岐点になるかもしれないのです」

(金……かな？)

鳳郎は、相崎の話す内容を聞いてそう思った。鳥である鳳郎には分からないが、人間にとつて金は命の次に大切なものらしい。相崎ほどの呪術師になれば、金はたくさんあるのだろう。審査官一人買収できる程度には……。

「……分かった。通つていい」

「ありがとうございます審査官殿。あなたの判断に感謝します。助言をしますが、このことは誰にも話さない方が良くと思いますよ？」

その後は誰に呼び止められることもなく、港を出ることができた。

港を出ると、海の上とは違うリズムで小箱が揺れる。馬車に木箱

を積んで運んでいるらしく、ガタガタと小さく揺れた。

「赤き鳥……気分はどうですか？」

相崎が普通の声の大きさを話しかけてきた。もう周りには自分の弟子しか居ないのだろう。

「気分は問題ない。どんな病原菌に触れても病気になったりしない体なんだ。船酔いなどしないさ。それより、さっきの港でのことだが……」

「ああ、ある程度金を握らせたら通してくれました。使い道がない金はかなりあるので、気にしなくていいですよ」

相崎はそのことはさらっと流した。特に金を払ったことを後悔している様子もない。老人だからか、金に対する執着が薄いのだろう。

「申し訳ありませんが、目的地まで箱の中で我慢してください。他の人間に見られるのはさすがにまずいので……」

「ああ、構わない」

鳳郎はそう答えて緊張を解いた。一年しかいなかった故郷だし、百年も経つうちに見慣れた場所など変わってしまっただろう。

それでもせっかく帰ってきたというのに、景色すら見られないというのは、寂しい帰郷だった。

* * *

しばらくは山道だったらしい。登っている感覚の次に下っている感覚が長く続いた。時々大きな音がして浮き上がったのは、大きな石でも馬車が踏みつけたのだろう。

下りきった後は長く平面の状況が続いた。そしてしばらくすると、港とは違つたざわめきに包まれた。どうやら街に入つたらしい。相崎が街に入った時、『この町に目的地があります』と声をかけてきた。ならば声を出すのはまずいと思い、鳳郎は軽く返事をした後は沈黙した。

馬車に揺られていると、楽しそうな人の声が聞こえてくる。こういう賑やかな雑音に包まれるのはいつくらいぶりだろうか？ この雑音に慣れたものにとっては別段変わったものでもなく、むしろつつとうしく感じるものですらあるだろう。しかし鳳郎は、この雑音に包まれるのが少し心地いいのだった。

しばらくそんな雑音に包まれていると、急に馬車が止まった。誰かが降りる気配がした後、相沢が誰かと話をしているのが聞こえてきた。すると、大きな扉が開く様な音が響いてきた。どうやら、目的地についたらしい。

その後少しだけ馬車に揺られる感覚に包まれた後、木箱が宙に浮いたような気がした。持ち上げられたらしい。

鳳郎はそこで一瞬だけ首をひねった。目的の建物の中に入ったのなら、もう木箱の中から出てもいいはず……。

しかし、その疑問はすぐに解消された。鳳郎を連れて帰るのは予定外のことなのだから、道場の人間達は当然知らない。そこに鳳郎の姿が現れれば混乱させてしまう。だから、最低限の人間にしか知らせないか、後でゆつくりと伝えるのだろう。そして……その後、鳳郎を殺すことになる……。

どうやらかなり大きな道場らしく、馬車から降ろされた後もなかなか移動が終わらなかつた。そして、周りに人の気配はするのだが、不思議と話声が聞こえず静かなのが気になった。道場の人間にとつて相崎は師匠のはず。その師匠が返ってきたならもつとざわめいても良いだろうに……。

鳳郎はそう考えて相崎に声をかけようとしたがやめた。鳳郎はまだ声を出してもいいと指示を出されていない。それどころか、全く声をかけられなくなっていた。こんな状況で声を出す訳にはいかないだろう。しばらく何も考えずに大人しくしていることにした。

それからしばらく運ばれ続けた。だがある扉が開く音がして少しすると、箱は止まった。

「着きましたよ……赤き鳥……」

相崎が呟くのと同時に指を鳴らす音がした。すると、木箱が解けるように消え始めた。一瞬鳳郎は驚いたが、「ああ、また呪術か」と思つて特に気にしなかった。

それまでずっと暗い箱の中に居たから、光が差し込んできた時部屋の様子が良く見えなかった。だが、この部屋が非常に広く、とても美しい飾り付けをされた部屋だということはかるうじて分かった。それに、甘い花のいい香りもする。

道場というと、狭いうえに汗臭く、シンプルな作りをしているものだと思ひ込んでいたから、目をこすりながら見たその光景は意外なものだった。相沢ほどの呪術師の道場ともなると、違うものなのだろう。

目が光に慣れてくると、部屋の様子がわかり始めた。

……いや、これはおかしい。いくらなんでもあり得ない……。

まず部屋の広さ。小さな家なら丸ごと一軒入ってしまいそうなほど広い。個人の所有している建物……団体が所有している建物にしてもだ！ 一部屋でこの広さはおかしい！ この建物はどれほど大きいというのだ！？

さらにおかしいのが、それだけ広い部屋にも関わらず、まったく手を抜かずに美しく飾られているということだ。ここが舞踏会の会場ならともかく、ここは道場のはずなんだろう？ 何でこんなに美しく飾る必要がある？ この部屋にある物を半分も売り飛ばせば一生遊んで暮らせそうじゃないか！

そして人……。これだけ広い空間なのに、全く空虚な感じがしない。それもそのはずだ、部屋の中には人間達が集まって整列しているのだ。そして皆姿勢を低くして沈黙し、ちらちらと鳳郎の方を盗み見てくる。人間達がこれだけ集まっているのに、これほど静まり返っているのも異常だが、その人間達の格好もまた異常だった。

相崎とその弟子達は、軽くて暗い色の魔術師のような服を着ていた。しかしここに集まっている人間はどうだ！？ 鎧をまとい、勲章を胸に付け、腰には剣を携えて、騎士のような……。いや、ようなではなく彼らは間違いなく騎士だ。似たような格好をした人間達と何度も戦ったのだから見間違うはずがない。

そして……。一番異常だったのが……。

「なん……。なんだこの鉄の檻はッ！」

鳳郎はいつの間にか鉄の檻の中に閉じ込められていた。その檻は大きく、今まで鳳郎が入っていたのとはほぼ同じ大きさのようだった。恐らく木の箱はカモフラージュだったのだ。まず鉄の檻を用意し、それを呪術か何か分からないが、木の板でコーティングしたのだから。木の板が無くなり、本来の姿がこうしてあらわになったという訳だ。

「ようこそ赤き凶鳥さん？ あなたに会えて嬉しいわ」

鳳郎が鉄の檻に戸惑っていると、部屋の中に若い女の声が響いた。女？ 女などどこに居る？ 相崎達の中には女はいなかったし、部屋をざっと見回しても男の騎士たちがいるだけ……。

しかし、鳳郎はやがて声の主を見つけた。部屋の一番奥、その部分だけ階段で登れるようになっており、その一番上に置かれた巨大な椅子に少女が座っていた。

相崎達の呪術師衣装とも、騎士たちの鎧とも違う。何とも重そうで、豪華で、煌びやかな服を着た少女だった。

「状況が分かってなさそうね？ 当然だけど。だってそう言う風に
組んだんだもの！ それじゃあ私直々に色々教えてあげましょ
う」

そう言っつて少女は立ち上がった。そして服を引きずりながらゆっ
くりとこちらに歩いてくる。付き人らしき者と、護衛兵らしき兵士
達も、その後ろに続く。

「この国がどこかについては勘違いしていないと思うわ。ここは神
林王国よ。ただ、この建物が何か分かってないのでしょ？ この
建物は、神林王国の王宮。そして、この部屋は玉座の間……この私、
神林王国国王……爛姫様のねッ！」

そう叫び、爛姫と名乗った少女は大きく腕を振りあげた。それと
同時に、部屋に居る者達が拍手をして歓声をあげる。

この部屋に居る誰よりも幼く、誰よりも弱く、しかし……誰より
も偉いこの少女に対して忠誠の意を示しているのだ。

第十三話 『王宮』

爛姫が腕を振り下ろすと、再び部屋は静かになった。

鳳郎はそんな様子をただただ呆然として見ていた。目の前の光景がどうしても信じられない。自分は箱の中で夢でも見ているんじゃないのか？

爛姫はそんな鳳郎を見て薬と笑うと、相崎の方に向き直った。

「相崎。私の書いてあげた『国王証明書』は役に立った？」

「はい。審査官も始めて見たらしく、戸惑っていましたが」

「滅多に発行するものじゃないものね？ お父様も二回しか書いたことが無かったって言ってたわ」

国王証明書。王族が、個人又は団体に対して巨大な権限を与えることを証明するものだ。これ一枚あれば、国の軍隊を率いて他の国と勝手に戦争を始めても許される。

鳥をここまで連れてくるためには国民全員を騙す必要があった。

下手にこのことを伝えてパニックにさせるのもまずいし、スパイに情報が漏れるのもまずい。

「国民を全員騙すのは簡単じゃないもの。切り札として国王証明書を渡しておいてよかったあ……一枚書くだけでも、腕が腱鞘炎になっちゃうかと思っただけ」

「しかし、そのお陰で、赤き鳥は私のことを深く信用してくれたようでした。国に入ってから逃げられる訳にはいきませんでしたから」

実は港で相崎が審査官に見せたのは現金ではなく、国王証明書だったのだ。マニュアルとして、一応国王証明書の項目は存在する。しかし、一生に一度見ることがあるかどうかという代物だ、急に見せられて本物か偽物か判断することは難しい。

しかし、厳正に審査するなど言ったら、反逆罪で罰せられる可能性すらある。故に審査官は、迷ったのだ。迷い、悩んだ挙句、誰にもこのことを伝えないで勝手に通した。通した後も誰にもそのことを伝えずに胸にしまっておくだろう。

その悩んでいる様子が、鳳郎にはワイロを渡されて悩んでいるように感じられ、そこまで相崎が自分のためにしてくれたのだと解釈して、さらに信用することにもなった。

「さすがお父様の考えた計画！ 何もかもうまく行ったわ」

「あの……」

なんとか言葉を口にした鳳郎の声は、非常にか細いものだった。

「私は……死ねると聞いて……」

「つぶッ！ クッ！ ハハハハハハハハ！ この鳥まだこんなこと言ってるわッ！ やっぱ長い間生きてると言っても、鳥は所詮鳥ね！ まさに鳥頭だわッ！ あははははははは！」

爛姫は国王の威厳も風格もない、本当に愉快なように大声で嘲り笑った。その声によって、鳳郎の意識が戻ってくる。

「相崎……ッ！ お前、騙したなッ！」

鳳郎は力の限り相崎のことを睨みつけて怒りをあらわにした。

「……騙したなだと？」

「……なに？」

相崎の声は静かだった。しかし、僅かばかり隠しきれない怒気がかもっていた。『どうだ？ 罠にはめてやったぞ』という歓喜に震える声ではない。国王の前だから自嘲しているのとも違う雰囲気があった。予想外の態度に、鳳郎の怒りが少しそがれる。

「赤き鳥よ、知っているか？ 私の妻……響子きょうこの墓には骨がないんだ。墓の中はこまごまとした遺品しか入っていないんだよ。なぜだと思っ？」

相崎は突然そんなことを言い出した。まるで関係ない話をされて、

鳳郎は混乱する。

確か相崎の妻は、事故で亡くなったと言っていた。だったらその関係で遺体が見つからなかっただけの話じゃないか？

「響子は船に乗って出かけた。大陸に用事があったんだ。そんなに長くない航海のはずだった」

相崎は顔を伏せたまま淡々と語る。感情がこもっているようでもっていない。不気味な声だった。

「響子が旅立った次の日、海岸に響子の乗った船の破片が流れ着いた。その一部が焦げていた……どういう意味が分かるか？」

鳳郎は嫌な予感がして震えた。

「響子は焼かれたんだ。骨までな。鉄をも溶かす灼熱の炎で骨が無くなるまで焼きつくされた後、乗っていた船と共に海の底に沈んで行った……」

「ま……さか……」

鳳郎は相崎が言わんとしていることを理解して身震いをした。

「響子は……お前に焼き殺されたんだよ赤き鳥……この凶鳥があ！
相崎の顔は怒りの形相ウツクシに変わり、鳳郎を鳳郎以上に睨みつけた。

「そ、そんな……だがッ！ 私は私に襲いかかる人間しか焼き殺していない！ お前の妻が私を殺そうとしてやってきた以上、私の行為は……」

「ふざけるなッ！ 貴様は見かける船すべてを焼き流行っていた時期があつただろうがあッ！ 響子は近づきたくて近づいたんじゃない！ 嵐に巻き込まれ、お前の島の近くまで流されてしまったんだ！ お前に危害を加える気があつたはずがないだろうが！ それなのにお前は殺した……あれほど慈愛に充ちあふれ、誰からも慕われていた響子を……俺の妻をお前は殺したんだッ！」

相崎はそう叫んだかと思うと、鳳郎が入っている檻をガンガンとものすごい勢いで蹴り始めた。玉座の間にはその音が響き渡り、部

屋に居る者たちすべての視線がそこに注がれた。

「お、おい！ 姫様の前でそんな無礼な！」

「良いじゃない」

爛姫の付き人らしき者が相崎を止めようとする、爛姫がそれを遮って止める。

「相崎が一番危険な仕事をやってくれたのよ？ これくらいの無礼は許されていいはずだわ。それに……」

爛姫の表情が愉快そうに歪む。

「誰かが誰かのことを責める姿を見るのって最高に気分が良くないツ？ 責められてしゅんとしている方も馬鹿馬鹿しくて笑えるし、責めてる方は責めてる方で『私怒ってます』ってのを全身でアピールして滑稽だわ！ みんなどうせ私より地位が低いくせに、下の方でみみっちい背比べをやってて本当に腹がよじれそうになるくらい笑えるわ！ ハハハハハッ！」

汚らしい言葉を使って大笑いをし、付き人の方に視線を向けた。

「それから私はもう姫じゃないのよ？ 国王様！ 呼びにくいなら爛姫様と呼びなさい」

「……はい、失礼いたしました爛姫様」

相崎達にはそんな会話など耳に入っていないかった。相崎はひたすら檻を蹴って鳳郎のことを責める。鳳郎は鳳郎で、そんな相崎から目を背けることができずに震えていた。

「貴様がただ通り過ぎる船には手を出さなくなった頃から、『赤き鳥にも何か理由があるのではないか？』などという言説が世に回り始めたのが許せなかったツ！ 理由がある？ 理由があったらあれほど無差別に人間を殺し続けてもいいというのか？ そうじゃないだろうツ！」

檻はガンガンと音を鳴らしている。

「家族を海賊に皆殺しにされた？ そうか、それはつらかっただろ

うな。海賊に復讐できてさぞいい気分だっただろう……。だったら、私がお前に復讐するのも理解できるだろうがッ！」

鳳郎は直接蹴られてはいない。蹴られたところでそれほど辛くもないだろう。しかし音が……。

「なぜ怒りをすべての人間にまで広げた!? お前は家族を奪われる痛みが分かるはずだろうが! お前の痛みを他の人間にまで押し付けるんじゃない! お前になど誰が同情するものかッ!」

音が響く。相崎が檻を蹴ってガンガンと音を出す。

ガンッ! ガンッ! ガンッ!

規則的に響くその音が、刃物の様に鳳郎をえぐる。騙された怒りなどとつくに消えた。むしろそんな感情を一度でも浮かべた自分を恥じた。

「お、ま、え、はッ! その名の通り凶鳥だッ! 不幸をばらまく悪魔の鳥だッ!」

そして何より、相崎が自分を責める言葉の音が、深く深く鳳郎を刺した。相崎の言葉はすべてが正当。言い返す隙間もない。完全に相崎が善。絶対的に鳳郎が悪。

「はあ……はあ……」

相崎はひとしきり檻を蹴った後、そこから数歩下がってしゃがみこんだ。その周りに弟子達が集まってくる。

「どう? 相崎、これで少しは気が済んだ?」

爛姫がニコニコと場違いな顔をして相崎にそう問いかける。相崎は特に気を悪くした風でもなく爛姫を見た。

「はい、爛姫様。このような機会を与えてくださったことに感謝します」

「あなたには褒美をあげなきゃね? 何が欲しい?」

「……いえ、褒美ならもう十分いただきました。それに……」
そう言って相崎は立ち上がる。

「もう生きる意味ありません」

周りの弟子達が息を飲んだ。爛姫はそれを聞いてにやりと笑う。
「そ！ 疲れたでしょう？ 今日はずっと休んでね？」
爛姫はあくまで軽く答える。相崎は小さく一礼して玉座の間を去ろうとした。

「……相崎ッ」

すっかり気落ちした鳳郎が、相崎の後姿に声をかけた。
「私に言ってくれた言葉は全部……全部嘘だったのか？」

相崎は後ろを振り返ることなく立ち止った。代わりに相崎の弟子達が鳳郎のことを睨んできた。

「すべてが嘘だったわけじゃない。本心からの言葉だってあった。……だが」

相崎は再び部屋の外に向かって歩き出した。

「お前は響子の顔すら覚えていなかったじゃないか……」

「……………ッ！」

鳳郎はそれ以上相崎に声をかけることができなかった。

「……………何で相崎を使いに出したか分かる？」

相崎が部屋から出て行くと、爛姫が鳳郎に声をかけてきた。

「もちろん自分から志願したっていうのもあるし、この計画を遂行できるだけの人格の持ち主だからって言う理由もあるわ。でも一番の理由は、相崎が老人だったことよ」

「それは……………ん」

鳳郎は思った考えをあえて口にはしなかった。爛姫はそれを見破る。

「今あなた、年寄りならいつ死んでも大丈夫だからって理由を考えたわね？ 違うのよ。本当の理由はね、相崎がいつ死ぬか分からない状態だから任せたの」

鳳郎には爛姫の言わんとしていることがいまいちわからなかった。結局自分が思いついた理由と変わらない気がする。

「ほんつとに鳥頭ね！ いつ死ぬか分からない状態ってことは、あなたが死ぬるチャンスはすぐになくなっちゃうってことなのよ！」
「……あ」

鳳郎はそこまで言われて気付いた。

「あなた死にたかつたんでしょ？ そう言う雰囲気を感じたって報告が入ってきてたもの。だからこそこの作戦が考えだされた。あなたは焦つたのよね？ 今後永遠に自分のことをこんなに考えてくれる人間が現れるとは限らない。もし考えてくれる人がいたとしても、あなたを殺せる力を持ったものであると限らない。相崎が死んじやつたら永遠に死ぬ無くなるってことよね？ だからあなたは即座に決断せざるを得なかつた！」

爛姫が身を乗り出して鳳郎を見下す。

「あなたは我が身かわいさから畏にはまがつたってこと！ 分かるウ？ あなたがそこに入っているだけで、あんたが意地汚い存在だつてことを証明しちゃってるのよ？ あはははははッ！」

爛姫は醜悪な笑みを浮かべながら鳳郎を嘲笑つた。ここまでされれば鳳郎だつて黙つてはいられない。

「ふんッ！ 何が畏だ！ こんな鉄でできた檻なんて簡単に溶かせる……あれ？」

鳳郎は翼を広げて炎を出そうとしたがうまく行かなかつた。炎が出せないと分かると、爛姫はさらに笑いだした。

「あははは！ バーカ！ この檻がただ鉄を組んだだけのものであるはずがないでしょ！」

「な、どうということだッ！」

鳳郎は急に焦りだして爛姫に聞き返した。爛姫は余裕の笑みを浮かべながらそれに答える。

「少し歴史の話しましょう。実はこの神林は、あなたのおかげで大きくなれたのよ」

「……え？」

鳳郎は何のことか分からず、間抜けな声をあげてしまった。

「始まりは百年ほど前……あなたが人間を襲いだした頃のことよ」
爛姫は付き人の持つてきた椅子に座り、ゆっくりと語りだした。

鳳郎が家族を殺され、女神に力を与えられて人間達に復讐しだしたのは百年前。その頃から、ある海域で船が消えるという事件が起こり始める。

この海域は、人間達にとって用のない場所だった。航海するため
の海路でもなく、豊富な海洋資源がとれる場所でもない。しかもこ
の場所は、海賊が出ることで有名だった。故に人間達は、鳳郎の存
在を知らなくても、めったにこの場所に近づくことはなかった。

しかしたまに、風や波の関係で迷い込んでしまう船もあった。迷
い込んだからと言って何があるわけでもない、少し遠回りして目的
地に向かうことになるだけ……。そう、百年前まではそうだった。

「あなたが現れたわ、目に入った人間の船は片っぱしから焼きつく
す化け物。しかし私達はすぐにその存在に気付くことはなかったの」
その理由として、生存者がいなかったことがあげられる。鳳郎は
狙いを付けた人間はすべて殺した。故に、その存在を被害者が伝え
ることができなかったのだ。

それともう一つ、海賊が出没する海域だったというのも、鳳郎の
存在が認知されなかった理由の一つだ。この海域に迷い込んで船が
消えれば、それは自然と海賊の仕業しわざということになった。だから人
間達は、鳳郎の存在に気づくことができなかったのだ。

「でも長い時間が経つと、人々は違和感を覚え始めたわ。第一、海
賊が船を襲っているという割には、海賊の姿も消えてしまったの。
何かある……。人々は気付き始めたってわけ」

周辺国は調査を始めた。初めは小規模に、噂の海域に船を数隻派

遣するだけ。しかし、その船も帰ってこなかった。

調査結果が得られず、命の危険が大きになると、国は調査を中止し始めた。割に合わないからだ。そもそも立ち入ることが少ない海域で船が消えたところで大した問題はない。そこに近づかなければいいだけの話だ。

しかし、ついに鳳郎は目撃されてしまった。

「あなたに襲われて、偶然逃げのびることができた船が現れたのよ。船員達は国に化け物の存在を伝えて、討伐してくれるように頼んだ」。各国の元首たちは、その化け物を退治、もしくは捕獲しようと考えた。退治できれば自分の支持が向上するし、捕獲できれば軍事利用できるかもしれない。

鳳郎と人間の戦争が始まった。

「でも、我が神林王国は軍を出さなかった。他の国の軍隊が、次々に敗走しているという報告を受けたからよ。当時の国王は、その報告を聞いて自分たちも軍を出せば被害が出る。でも、出兵しなければ、国民に見放されるかもしれないから、形だけ……全く違う海域に向かつて軍を出したただだったわ」

だから、神林王国は全く被害を受けなかった。

しかし他の国はなかなか撤退せず、毎回大きな被害を出しながら出兵し続けた。

「それを見た神林王国は、他の国に向かつて軍を出したの。結果は大成功。国土は広がり、資源を大量に得られるようになって、神林王国は強くなったわ。ふふふ……赤き鳥？ あなたはこの国にとっては繁栄を手助けしてくれた存在なのよ？」

爛姪はいやらしい笑顔で鳳郎を見た。鳳郎はなぜかとても屈辱的だった。

神林王国の侵略にあい、同じ島に存在する三国はようやく鳳郎に

向かって派兵を止めた。

それからしばらくは何もなかったが、ある時凶鳥の島から生きて帰って来たと言言をした男が現れた。

「他の国はそれを聞き、鳥が弱つたのだと考えて再び兵を出したの。その結果また被害を出してるんだから馬鹿みたいよね？ でも私の国は違った」

神林王国は、鳥が精神的に弱つたのではないかと考えた。軍の船に対しては無条件に攻撃してくるが、普通の船は見逃すという情報を得たからだ。

ならば、普通の船で近付けば鳥と接触し、捕獲できるのではないかと考え始めた。

「当時の国王……私のおじいちゃんね。あなたのことをゆっくりと時間をかけて調査し始めた。普通の船で通り過ぎるだけなら大丈夫か？ 嵐で流されたのを装って上陸するなら大丈夫か？ それとも、敵意がなければ普通に上陸しても大丈夫か？ 兵士の格好をしてたら？ 男なら？ 女なら？ 細かく細かく、慎重に鳥と接触できる条件を探した」

爛姫の父親に代が変わる頃には、その条件が大体はつきりとした。後は、鳥を捕まえる方法と作戦を考えるだけ。

「作戦は見ての通り。あなたに同情的な考えを伝えて気を引き、こっそりと国に連れてくる。そして方法が……その檻よ」

爛姫は勝ち誇った表情をしながら鳳郎を指さす。鳳郎は自分の力を封じている正体が檻だと知って、改めて檻を見た。

「こんな平凡な形をした檻がなんだと言うんだ？」

「檻を良く見てみなさいよ。あちこちに小さな傷があるでしょ？」

それは、虫めがねで見なきゃ分からないくらい細かい文字の呪文が彫られてあるの」

言われて檻を良く見て見ると、確かに傷が無数に付いていた。これがすべて呪文。こんなに大きな檻の隅々にまで掘られているとい

うのか……しかし……。

「それだけ力がこもった檻ならそれなりの気配がするはずだ！ 今
は確かに力を感じるが、少なくとも港まではこんな気配はしなかつ
たはずだぞ！」

鳳郎も、一応木箱に入る時に何か仕掛けがないか軽くは探った。
そうでなくても、あれだけ長時間箱の中にいれば、何らかの違和感
に気付いたはず。それが全くなかったのはどういう訳だ？

「私は専門外だから詳しくは分からないけど、その檻には強い念が
込められてるわけじゃないそうよ。作業時間も数人がかりでせいぜ
い一日らしいわ。その檻の役割は皿なんですよって」

「……皿？」

「そう、皿。受け皿のことね。その檻に書かれてる呪文は、力を呼
び寄せる効果がある物。あなたの力を封印する呪縛の呪文は別の場
所に彫り込んである」

爛姫の言葉に、鳳郎は部屋中を見まわした。一体どこにその呪文
が書いてあるのだ？ あの壁の模様か？ それとも天井からつるさ
れた布か？ 床か？ 絨毯か？ 知識を持たない鳳郎にとっては、
そのすべてがそれっぽくも見え、また違うようにも見えた。

爛姫はそんな鳳郎のことをクスクスと笑う。鳳郎は急に悔しくな
り、爛姫に向かって吠えた。

「私の力は神の力だぞツ！ すべてを焼き滅ぼす神の炎だ！ 人間
達がどれだけの呪縛を施そうとしたところで、封じ切れるものかツ
！」

鳳郎はそう叫んで再び翼を広げる。今まで呼吸をするように当た
り前に出せていた炎が出せない。炎さえ出せればこんな檻など……
この部屋の間人達等一瞬で焼きつくせるといふのにツ！

鳳郎がバタバタと檻の中で騒ぐのを見て、爛姫はますます愉快そうに笑う。そして椅子から立ち上がり、鳳郎の目の前まで近づいた。「凶鳥？ あなたの炎の力は確かにすごいわ、何千何万という人間を焼き殺せるくらい強大な力よ。あなたが言う様に、それは神の力なのかもしれない。でもね……」

爛姫は怪しい笑顔を浮かべて言った。

「人間の感情というのは……人間の欲望というのは時には神すらも殺すものなのよッ！ あははははははッ！」

爛姫は手を顔に当て、周りを憚らずに声を張り上げて笑う。勝利を確信し、自分を讃え、鳳郎を蔑む笑い声だった。

「ねえ凶鳥？ あなたの力を封じ込める呪文が何処に書いてあるか知ってる？ 呪文はね？ この神林王国中央都市のあちこちに彫り込まれているのよ！ この巨大な中央都市が、そのまま強力な呪術陣になっているという訳ッ！」

指の間から爛姫の目が見えた。強い負の感情を感じさせる、嫌な目だった。

「国中の呪術師達をかき集めたわ！ 裏切られたり、力を抜かれたりされたら困るから、家族や友人をたくさん……たっくさん捕まえたのッ！ そして呪術師が失敗したら、呪術師本人では無くて、その人質を痛めつけるのよ。目の前でね？ 死なないように手加減なんて一切しないのよ？ だって代わりの人質はたくさんいるんだものッ！ 死んだらまた別の人質を連れてきて痛めつける！ そして二十年かけて町中に呪文をほらせ続けたのよッ！」

鳳郎は戦慄した。目の前の少女から発せられている言葉は本当に人間のものか？ 何かもつと別の残酷な生き物、悪魔や魔物のものではないのか？

異常なほどに感情が高まり、実に楽しそうに叫ぶのだ。自分が何を言っているのか理解できているのか怪しい。それくらい、少女が言っているとは思えないくらい異常な雰囲気だった。

「当然呪術師達は苦しいわよね？ 暗い感情を抱く者もたくさん居たでしょう。でもね？ その感情が向かう先は……私達王族ではないのよ？」

呪術師達は苦しかった。無理やり連れてこられたかと思うと、人質まで取られて働かされ続けている。それはどうやら噂の凶鳥を捕まえるためらしい。

凶鳥は悪だ。小さい頃からそう教え込まれてきた。それに実際、たくさんの人々が殺されているし、自分の友人の中にも凶鳥に殺された者が何人かいる。凶鳥が憎い。

作業は苦しい……。だがこれだけしなければ凶鳥を封じ込められないのだと聞かされれば仕方ないという気もする。それくらい凶鳥は強く、危険な生き物なのだ。

ああ、辛い！ でも休めない……休んだら封印の力が落ちてしまう！ 凶鳥を封印できない！ 絶対的な悪である凶鳥を封印できないんだ！ 凶鳥を封じ込めることは正義なのだ！

今日人質が死んでしまった！ それは自分が失敗をしたせいだが、元はと言えば凶鳥のせいだ！ 凶鳥さえ現れなければこんな目に合わずに済んだんだ！

凶鳥さえいなければ……凶鳥さえいなければ……凶鳥さえいなければ……。

『凶鳥さえいなければッ！』

「呪術師達を極限の状態まで追い込み、負の感情を抱かせる。呪術というのは呪う気持ちが大敵なんですって。だから、あなたに負の感情が向くように仕向けながら作業をさせる。町中にお前を封じるための呪文が彫り込まれ、その力は街の中央であるこの城に向かう。すると、その檻が受け皿となって呪いを受け止め、お前をその檻の中に封じ込めるといふ訳。丁寧に説明してあげたつもりだけど、納

得してもらえたかしら？」

爛姫は誇らしげに語り、鳳郎を見下ろした。

鳳郎は、もうどうしようもないことを悟り、うなだれるのだった。

爛姫は鳳郎が諦めたことを察すると、付き人に目で合図をして剣を持ってこさせた。

そして、剣を鞘から抜き放ち、鳳郎の方を見る。

「……………何をするつも、グツ！」

爛姫は無言で鳳郎のことを突き刺した。そしてゆっくりと剣を引き抜く。

鳳郎の体は剣が抜けると、すぐに傷が塞がった。

「ああ、良かったわ。不死は死んでないわね。不死まで封じ込められてたら計画倒れだもの」

「……………何のことだ？」

爛姫は剣についた鳳郎の血を丁寧に指で取り、小さな器に集めた。「あなたに関する報告を聞いていて、お父様はあることに気が付いたわ。大陸にある伝説に出てくる赤い鳥の話よ。ただ捕まえるためだけの計画が、その後を見据えた計画に変わったのはその時」

爛姫は器に集めた血を見つめながら話し続ける。

「その鳥は決して死なず、炎を操って自分を捕まえようとする人間を薙ぎ払う。でも、その鳥の血を飲むと、飲んだ人間も不老不死になれるんですって」

「……………なに？」

大陸にある不死鳥の伝説というのは、鳳子の言っていた鳳凰のことだろう。しかし、炎を操るといふ話と、不老不死という話は初めて聞いた。特に、その血を飲んだ者は不老不死なるというのは……………

「……………んッ！」

鳳郎が考え込んでいると、爛姫は血を一気に飲み干した。部屋の中で小さなどよめきが起こる。

「……………」
沈黙。爛姫は血を飲んだ後何も言わなくなった。数分はそんな状況が続いただろうか？ 爛姫はおもむろに剣を自分の手のひらに突き立てた。

「！……………爛姫様ッ！」

付き人が慌てて駆け寄った。しかし、爛姫のてのひらの傷は、剣が引き抜かれると同時に塞がってしまった。

「か……………爛姫様？」

付き人は様子を窺うように爛姫の表情を見た。爛姫は……………笑っていた。

「すごい……………すごいわ！ 自分の体の中で血が巡っているのが分かるの！ 力が満ち溢れてくるのが分かるッ！ 見たあ？ 私の手に傷がある？ 剣で刺したのに、今は小さな傷一つのこつちゃいなわ！ 私は不老不死になったのよッ！」

爛姫がそう叫んだ瞬間、部屋の中は爆発的な歓声に包まれた。みんなが拳を突き上げ、『爛姫様！ 爛姫様！』と、不滅の王が誕生したことを祝っている。

「そんな馬鹿な……………」

一番驚いたのは鳳郎だった。目の間で起こった現象がどうしても信じられない。不死は罰だと言われた。それが何で、血を飲ませただけで他者にも伝染するのだ？

「お父様は道半ばで病に倒れたわ！ でも私が……………この私、爛姫がそれを引き継ぐ！ 不死身の力を持って島すべてを統一し、やがて大陸にまで進出して神林王国を繁栄させて見せる！」

部屋の中は歓声で満たされている。爛姫の言葉は信頼性があった。先代の国王からの計画だった。不死の力を手に入れ、神林王国を一気に繁栄させる。そのための赤き凶鳥捕獲作戦だった。

「その鳥は地下室に連れて行きなさい。餌はやらなくていいわよ？
どうせ死なないからッ！」
運ばれながらも、鳳郎は何が何だか分からず、ずっと混乱し続け
ていた。

第十三話『王宮』（後書き）

あまり意味のある区分けではないですが、内容的にはここで第三部
完。

次回から第四部という感じになると思います。

第十四話 『鳥籠』

もう数カ月は経っただろうか？ この地下室に閉じ込められた時は夏だったはずだが、すっかりと冷え込むようになってしまった。

部屋はろくに掃除されないから埃ほこりつぽく、ろくに物が置いてないから寂しく、当然太陽の光など届かないから薄暗かった。

ドアの窓から差し込んでくる、部屋の外のたいまつだけが光源だ。ゆらゆらと揺れる不安定なその光がとても頼りなく、不安を煽っているようでもあり、同情されているようでもあった。

鳳郎は、そんな部屋の中に無造作に置かれた檻の中で倒れ込んでいた。当然死んでいるわけではない。ただ、かなり弱っているのは事実だった。

肉体的には弱っていないだろう。しかし、精神的に弱ってくると体が重くなり、風邪でも引いたようなだるさに襲われる。鳳郎は自らの意思で動くことをしなくなっていた。

ここに閉じ込められた初めの頃は、それなりに行動していた。

叫び声をあげ、爪で檻を引っ掻き、バサバサと翼を動かして暴れた。しかしそれは長く続かなかった。

地下に閉じ込められたらもうそれっきり放っておかれるのかと思つたが、そんなことはなかつた。

地下に閉じ込められてから数日が経つと、人間達が大勢押しかけてきて、鳳郎の血を抜いた。血を抜くための道具など使わず、無遠慮に剣や槍で刺し、好き放題に血を抜かれる。

当然鳳郎は死なないし、今更刃物で突き刺されるくらいの痛みなどどうということはないが、長時間にもわたってそれを続けられれば苦しい。

人間達は、大瓶五本分くらいの血を抜くと、ご機嫌で部屋から去

って行った。

爛姫はすでに血を飲んでいるから、国の主要な人物に飲ませる分の血を抜いて行ったのだろう。鳳郎はそう思いながら人間達の後姿を睨みつけた。そして、あれだけ血を抜いて行ったのだから、十分な人数に血が行きわたり、もうこんな採血はされないだろうと少し安堵した。

しかし数週間が経つと、また人間達はやってきた。人間達の後ろには、前と同じくらいの大瓶があった。

呆然としている鳳郎に対し、人間達は無遠慮にまた採血を始めた。ボロボロに切り裂かれる鳳郎、瓶に溜まっていく赤い血……。すべてが終わった後、部屋の中に残っていたのは、打ちのめされた鳳郎の姿だった。

なぜまたこんなに大量の採血がされたのか？ 爛姫は一口血を飲んだだけで不死になっていたはず。前回採血した分だけでも、相当の人数に血が行き渡ったはずだ。あまりに大量の人間を不死状態にしてしまうと、統制できなくなる可能性だってあるのに……。

その疑問は門番が教えてくれた。鳳郎の部屋の前にはいつも門番が待機している。声で聞き分けた限り、門番は全員で六人。毎日二人一組になって、交代で番をしているようだ。

しかしここは地下、ほとんど人が来ることもなく、何か面白いものがあるわけでもない。故に門番は割と自由に会話していた。それが鳳郎にとって重要な情報源だった。

門番の会話を盗み聞いた情報によると、不死には制限があるらしい。血を飲めば永遠に不死でいられるのではなく、一定の期間を過ぎると不死でなくなるのだそうだ。そして、飲んだ血の量によって不死の期間も変わるらしい。

それを知った爛姫が、定期的に飲むために採血を指示したという

のだ。

そして、不死に一定の期間があるというなら、兵士に飲ませることもできる。一口飲ませるだけでも、戦力は大幅に変わるはずだ。だから神林王国には鳳郎の血を大量に求めるようになり、必然的に鳳郎は、捕まっている限り永久に採血され続けることになった。

それを理解した鳳郎はさらに暴れた。きっと人間達は、酒樽さかだる同じ気分きぶんで鳳郎のことは見るだろう。そして、樽の蛇口をひねるような気持ちで、血を抜き続けるのだ。そんな屈辱など耐えられない。

しかし、炎を封じられた鳳郎がいくら暴れたところで檻が壊せるはずもない。体力を消耗するだけだ。

それに、鳳郎は苦しめられていた。

爛姫の命令通り、鳳郎には食べ物たべものが全く与えられなかった。それによって死ぬことはない……それによって死ぬことができず、飢餓きがに耐えなければならぬ。

たまに爛姫自ら採血に立ち会うこともあった。そう言う時は、いつもより過激な方法で採決が行われ、爛姫の毒舌を聞きながら血を抜かれた。

初めは余裕ぶって言い返していた鳳郎だったが、常に苦しみを与えられ続けている鳳郎は、次第に弱り、苦悶の表情を浮かべながら耐えるのみになっていった。

そんな生活を数カ月も続けられれば、誰であっても気力が尽きる。そもそも、不死でなければとくに死んでいる苦しみを味あわされているのだ。精神的に弱らないはずがない。

もうどれだけ地下に閉じ込められているのか分からない。前は、一週間に一度床に爪で線を引いていたりもしたが、数本引く頃には馬鹿馬鹿しくなってやめてしまった。そんなことを気にしている余裕などもうとつくに無いのだ。毎日、今日は採血がないことをただ

ただ祈るのみだった。

「逃げだせない……なぜこんなことになってしまったのだろう……」

「お前の選んだ道ではありませんか」

「……誰？」

鳳郎の呟きに、誰かが返事をしたような気がした。だがドアが開く音はしなかつたはず。採血に人が来たなら、もっとバタバタと入ってくるから、今の鳳郎でも十分気付く。

ドア越しに居る門番の声が聞こえたなら、もっとくぐもった声が聞こえるはずだ。追い詰められたせいで、幻聴でも聞こえたか？

……幻聴？ 確か昔もそんなことがあったような……。

鳳郎はハツとして顔をあげ、声の主を探した。するとそこには居た……。

「……女神……様……」
そこには純白の衣を纏まとい、漆黒の杖を持った女神が立っていた。

「久しぶりですね鳳郎。最後に姿を見せたのはいつだったでしょうか」

そこにいたのは間違いなく女神だった。あの日、死という代償を払って、無敵の炎を与えてくれた女神。

鳳郎は、あまりの事にしばらく言葉を失っていたが、なんとか言葉紡ぎだした。

「わ、私の事は見捨てたのではなかったのですか？」

「加護を与えるのはやめました。しかし私には、お前に炎の力を与えた責任があります。炎の力をお前がどのように使うかを見届けるのは私の責務です」

女神は相変わらず無感情に回答してきた。鳳郎に対して憐れみの感情を抱いているわけでも、怒りの感情を抱いているわけでもない

らしい。

「……いくつか聞きたいことがあります」

「どうぞ」

女神は質問を許してくれた。しかし、鳳郎には聞きたいことがいくつもある。どれから訊ねるべきか……。

「私の力について教えてください。私はこのように、檻に閉じ込められて炎の力を封じられています。そこまでは人間の力が勝つただと納得はできません。しかし、なぜ炎だけが封じられ、不死は封じられないのでしょうか？」

炎とともに不死の力も封じられていれば、最初に剣で突き刺された時に死んだはずだった。しかしなぜか不死の力だけは封じられることはなく、鳳郎は今もこうして生きている。

「与えられたものと、科せられたものでは意味合いが大きく違ってきます。炎の力はお前の求めに応じて『与え』ました。しかし不死は、お前の罪に対して『科せられた』ものです」

鳳郎は女神が結局何を言いたいのかわからず首をひねる。

「お前は勘違いしているのです。炎と不死を与えられた『力』だと思っ込んでいます。ですが、不死は力ではなく『罰』です。はずしてくれと言われてははずせるものではありません」

「そ、そうです、そこがおかしいのです！」

鳳郎は一番最初に覚えた違和感、疑問を思い出した。

「不死は罰。そうであるならば、なぜ他者に伝染するのです？ それも、血を飲ませるなんて簡単な方法で！」

「お前の不死が絶対的なものになっているからです。神の与える罰というものは、必ず執行されます。それは世界のコトワリであり、誰にも覆すことができない絶対的なものです。それはお前の体を離れた血にも言えること。例え他者の体の中に入っても、絶対性は失わ

れることなく存在し続ける。故に、その者の体内に入っている限り、その者にも不死の力が及ぶのです」

また以前と同じように、神の理論を用いて説明してきたせいで、鳳郎はいまいち理解できない。とりあえず分かったことは、自分の血を飲んだ者は一時的にはあるが不死になるということだけだ。神とはこれ議論をしても無駄だろう。とにかく打開策を探さなければ……。

「不死を消すことはできないのですか？」

「罪はいかにして許されますか？」

また神の理論だ。そんなもの鳥である鳳郎が分かるはずがない。

鳳郎がそう考えて顔をゆがませると、それを理解したのか、女神は話を続けた。

「罪は消えません。犯した以上は永遠に残ります。世界中のいたるところに、その罪の爪後が残っています。罪は消えることはありませんが、許されることはできます。その方法の一つとして、科せられた罰をすべてこなすという方法があります。人間たちは犯罪者に対して罰を与え、それを終えた者に対しては社会的には一応許し、償いを終えさせます。鳳郎、神が^{わたし}お前に科した罰はなんでしたか？」

永久に……死を奪われること……。

「先ほども言いましたが、お前の不死は科せられたものです。もう私にも消し去ってやることなどできません」

鳳郎の罰は永久に死を奪われることだ。刑期で言うところの終わりがない。つまり、鳳郎は永遠に許されることなく、罰を与えられ続けるということになる。

その事実にいまさらながらに気づき、頭がくらくらと揺れたが、今はそんなことをしている暇はない。とにかくここから抜け出さなければならぬ。

しかし、不死は消えず、炎の力を持たない鳳郎になすすべはない。助かる道が残されているとすれば……。

「女神さま……助けてください……」

か細く、情けないとも言えるような声色で、鳳郎は助けを求めた。鳳郎自身にはこの檻を抜け出す手立てがない。ならば他者に助けてもらうほかないが、人間たちが鳳郎を助けてくれることはないだろう。

鳥たちも無理だ。誰も覚えてなどいないだろうが、鳳郎は嫌われ者の鳥だった。助けてもらえるはずがない。仮に助けてくれる気になるものがいたとしても、檻を破る力が鳥達にはない。

だから、島にいたときにそうしていたように、神に祈るしかない。他の存在すべてを凌駕する力を持つ、神に助けを求めるほかないのだ。

そしてその神は、今鳳郎の目の前にいる。

「……………」

女神は何も言わずに鳳郎を見ている。鳳郎は構わず続けた。

「今の私を見てくださいッ！ こんな不気味な檻に閉じ込められて、飛ぶすら許されない。私が自由に飛んでいた空を、見上げることすらできないのです！ それだけでなく、まるで物のように扱われ、好き勝手に血を抜かれる。血を抜くとき人間たちは私を生き物だとは見ていません！ きつと私を石つころと同じに見て、石を砕けば無限の生を与えてくれる水が手に入るくらいに思っているのです！ これではとても生きているなんて言えないではありませんか！」

鳳郎は必死に訴えた。自分がどれほどの扱いを受けているのかを必死に……。すると女神は小さく頷いた。

「ええ、お前は確かに生きていたとはいえませんが」

鳳郎は女神が理解してくれたのだと解釈して、また口を開く。

「永遠に生き続けよというのが私に対する罰だったはず！ このよ
うな生きているとはいえない状況は、女神さまも想定していなかつ
たはずです！　どうか……どうか助けてください！」

女神は相変わらず無表情で、そこからはどんな感情も読み取れな
い。しかしそれは今までも同じだった。初めて鳳郎を助けてくれた
ときだって女神の表情は今と同じだった。だから今回もきつと……。

「鳳郎、お前が生きているとはいえないというのは、お前の待遇の
事を言っているではありません」

「あ、あの？　女神さま？　一体何のこと……」

「いいですか鳳郎？　生きるというのは、死に向かつて歩むことを
言うのです。生き物は皆、長さの違いはあれど必ず、死ぬという点
では共通です。死ぬからこそ生き物なのであり、生き物であるから
こそ死ぬのです。死は苦しみでもなければ安らぎでもない。生きて
いる者たちが最後に到達する終着点です。その終着点を失ったお前
はもはや生きているとは言えない」

鳳郎には、女神が判決を言い渡す裁判官のように見えた。事実そ
うなのだろう、鳳郎の罪を問い正し、鳳郎に罰を提示し、鳳郎に罰
を科したのが女神なのだ。女神は鳳郎の行動を見届けるのは責務だ
といった。罰を与えた犯罪者がどのような行動をとるか監視するこ
と。それが女神の責務だったのだ。

「お前はまた私の言葉を勘違いしているのですよ。私はお前に永遠
に生きると言ったわけではありません。永遠にこの世に存在し続け
ると言ったのです。私はあの日、お前から『死と生』を同時に奪っ
たのです」

「ですが……今の私の状況はあまりにも……」

「永久に死ねない、消滅できないということは、どのような理不尽
な状況をも許容するということです。それが想定不可能なものであ
ったとしてもです」

鳳郎は自分の瞳から、血ではない水をこぼしていた。それが口に

入り込み、喉に絡まっつてうまく声を出すことができない。

「海賊たちに復讐した時点のお前ならともかく、今のお前に同情できるものは少ないでしょう。お前は自分を律せず、感情のままに行動し、巨大な怒りを人間たちに生み出しました。その結果がその檻です」

女神は檻を指さしながらそう言った。

「お前に対する人々の憎しみが、神の力をも凌駕した。その檻からは、お前に対する怨念があふれています。それは鎖となり、お前の炎を封じ、お前を不死の地獄に閉じ込めた。これは私が与えた罰ではありませんが、お前のこれまでの行動に対する罪には妥当な刑罰と言えるでしょう」

女神は後ろを向いた。その姿が淡い光とともに消えてゆく。

鳳郎はその後ろ姿に何か声をかけようとしたが、やはり喉に水が絡まっつてうまく声が出ない。檻から身を乗り出し、翼は空をかいて、爪で床を削った。

「お前の行動を見届けるのは終わりです。……そしておそらく、もう二度と目の前に姿を現すことはないでしょう」

「ああ……うわああああああッ！」

鳳郎がやっと声を発することができる頃には、女神の姿はすでに消えていた。

第十五話 『来訪』

あれからまた、非常に長い時間が過ぎた。今度は数カ月経ったな
どという、漠然とした時間すら分からない。

何年？ 何十年？ それもと、何百年かの時間が過ぎたのではな
いか？ それくらい長い時間を、この狭い空間で過ごしてきた気が
する。

活動している時の時間の流れは速い。しかし、動かずにいる時の
時間の流れは遅い。実際は変わらないのだが、どうしてもそのよう
に感じてしまう。

だから鳳郎は、外で過ごしていたのより遙かに長い時間をここで
過ごしている気がするのに、間違いなくここで過ごしている期間の
方が長いとは断言できなかった。寒くなり、温くなる度に印でも
付けていれば、何年すぎたかくらいは分かっただろうか？

いや、そんなことに意味はない。別にそこまで何年経ったかが知
りたい訳でもないのだから……。

そのどのくらい経ったか分からない時間の中で、閉じ込められた
ばかりの頃に比べて、些細ちひさいな変化があった。

まず採血。これは完全にただの行為になり下がっていた。
当たり前だが、剣や槍で無造作に刺して血を取るのには効率が悪い。
専用の道具を使った方がはるかにスムーズで、効率的に血を取るこ
とができる。人間達は途中でそれに気付き、鳳郎に剣を向けること
はなくなった。

爛姫が来ると、見世物的な意味合いも発生するから、その時だけ
は乱暴に採血された。しかし、何度見てもそう面白い行為ではない。
別にもっと娯楽的な物をいくらでも見れるだろう。爛姫が達会うこ
とは少なくなっていた。鳳郎は、もう何年も爛姫の顔を見ていな

い気がする。

門番の立ち話に聞き耳を立てることも少なくなった。

鳳郎が情報を欲していたのは、ここから抜け出すためだ。しかし、この果てしない時間の中で、逃げ出すことができると思えたことはただの一度もない。

採血のための針など、檻の隙間を簡単に通る。食事を与えるために扉を開けることもない。鳳郎はただ血を抜くためだけの存在。それ以外で誰も関わらないし、関わりうとも思わない。だから隙を見て抜け出すことなどできないのだ。

鳳郎は檻が弱くなることを期待していた。しかし、どれだけ長い時間がたっても、錆さび一つつかない檻を見て絶望した。

鳳郎を縛りつける怨念は今もここにあり、それが檻という物質に宿って力を与える。その力によって檻は風化することなく、こうして鳳郎を閉じ込めている。

こうなればいくら情報など得ても同じことだ。鳳郎にできる行為と言えば、檻の中で羽ばたくこと、爪で檻を引っ掻くこと、大声で騒ぎたてることくらいだ。

羽ばたいて何が起ころはずもなく、爪で引っ掻いても傷一つ付けられず、騒ぎ立てても誰もやってこない。

門番を挑発したところで無駄だ。この門番達は優秀で、いくら煽ってやっても何も反応してこない。檻に閉じ込められた鳳郎がなにを言っても、門番達が心動かされることなどありはしないのだ。

だから聞き耳を立てる頻度は減って行った。暇つぶしのためにたまに聞き耳を立てることもあるが、鳥と人間では前提知識が違う。話を聞いていても別段面白いわけでもない。

それなら出来るだけ長い時間眠り続けて、夢を見ていた方がまだ気がまぎれる。

変化したと言ってもせいぜいこの程度だ。ここでの暮らしは、変

わかることができるほど大層なものじゃないのだから……。

変化しないと言え、女神の言ったように、やはり鳳郎は死ぬことが出来るようにはならなかった。肉体的に死ぬことができないのはもちろんだが、精神的にも死ぬことは許されない。

ここでの暮らしは拷問とも言える。それをこれだけ長期の間、継続的に与えられ続けているのだから、精神が崩壊し、何も考えられなくなる人形になることは十分あり得ることだ。

しかし鳳郎は、精神的に弱ることはあっても、精神崩壊することだけは絶対になかった。衰弱しきりそうになると、不思議と気力が回復するのだ。何のきっかけも、変化もないのに。この苦しみを味わい続けるという罰なのかもしれない。

そして記憶。記憶というのは、その者をその者たらしめる最大の要因だ。肉体が減じたとしても、記憶だけを他の体に移動させることができれば、その者は滅びない。そして、それを永遠に繰り返し続けられれば、その者は不死と言ってもいい。

ならば逆に、記憶さえ消え去ってしまえば、その者はある意味死んだと言ってもいいはずだ。

鳳郎の記憶、ここに居る理由、これまでの暮らし、自分がどういう扱いを受けていたのか。これらの記憶が消え去り、閉じ込められている間だけの記憶が残れば、鳳郎の中で個の暮らしが当たり前となり、苦痛はいくらか和らぐかもしれない。

だが、それすら許されない。記憶を失うというのは死ぬのと同義ならば、死を奪われた鳳郎は記憶を失うことも永遠にできないのだ。自分が何をし、どういう理由でここに居るのかを、鳳郎は完全に理解している。だから苦しみ、絶望し、それでも死ぬことは許されず、ここに存在している。

だが、記憶を失わないというのは、悪いことばかりではない。

「鳳子……」

鳳郎が夢の中でよく見るのは、鳳子と子供達と一緒に暮らしていた頃の内容だ。

たった二年。果てしなく長い時間の中で、鳳郎が楽しかったと思える唯一の期間。その間の夢を、鳳郎は何度も見るのだ。

鳳子に出会わなければ、自分は名前すら持たなかったかもしれない。島で一羽暮らし、ただ生きるだけの生活をして、誰にもみとられることなく島の土に還る。鳳郎はそれで満足しただろうが、鳳子や子供達との日々は、それが惜しくないくらい楽しい日々だったと間違いなく言える。

鳳子と家族は希望だった。希望がなくては意思ある者は生きて行けない。

先の生涯に絶望が待ち受けていなかったとしても、希望がなければその生は苦痛だ。

逆に、先の生涯に絶望が待ち受けていたとしても、希望を胸に抱いていれば生きられる。

しかしその希望は失われてしまった。もはや鳳郎に生への執着などない。しかし鳳郎は、意図せず生と共に死をも失ってしまった。それを覆すことはもうできない。

どうしようもない袋小路。そこに迷い込んだことに鳳郎が気付いた時には、もうここに閉じ込められていた。

もはや逃げ出す気力もわからない。今この瞬間、何かの間違いで扉が開いたとしても、もはや炎を出すことができるかも怪しい。

今度こそ間違いなく女神に見捨てられたのだ。あれは女神から与えられた力。科せられた不死はともかく、与えられた炎の力はどうなっているか分からない。だからもういい……もう疲れた。

鳳郎はただただ眠るのみ……。

コツコツコツ……。

「……ん」

鳳郎は夢の中で、人が歩く音を聞いた。硬い石の床の上を、ゆっくりと歩くコツコツという音。

対して大きな音ではない。だがその音は不思議と鳳郎の耳に強く響き、鳳郎は眠りから目を覚ました。

目を覚ますと、続いて『ギイ……』という扉が開く音が聞こえてきた。

どうせ採血員が来たのだろう。鳳郎はそう考えて顔をそちらに向けていることもしなかった。細い針を刺して血を抜くだけだ。居たい訳でも苦しいわけでもない。ある程度血を抜けばすぐに居なくなる。だから鳳郎は、目を閉じて再び眠りにつこうとした。

「ここが赤き鳥のいる部屋か。なかなか雰囲気のある良い部屋ではないか」

扉から入ってきた者は、部屋に入るとそう呟いた。良く響く女の声で、若干尊大な印象を受ける口調だった。

鳳郎は眠気が覚めていくのを感じた。採血員ならばこんなことは言わない。最近では一言もしゃべらずむ感情に血を抜いて去っていくことがほとんどだ。

では……今扉から入ってきたのは誰……？

鳳郎はようやく体を起こし、声の主を探した。するとその主はすぐに見つかった。

見知らぬ女の間人……というより、見慣れぬ恰好をした女がそこに立っていた。

採血員は決まった格好をしている。地味な形状で、血が飛び散ってもいい様に、汚れが目立たない色の服を着ている。

しかし目の前の女の服はどうだ？ 高そうな和服に、鮮やかな色で模様が幾重にも描かれている。とても採血員の姿ではない。

もちろん兵士の服装とも言えない。恰好だけ見れば、どこかの王族の人間かと思ってしまうような姿だ。しかし、爛姫以外にこの国に王族は居ないはずだし、王族の人間が護衛もつけずにこんなところに来るはずがない。一体何者……？

「弱々しい……噂で聞いた赤き凶鳥とは思えぬ……」

鳳郎が呆然としてしていると、女は若干残念そうな声を出しながら、服が汚れることも気にせずそこに座った。

そうかと思うと、胸元から瓢箪ひょうたんと猪口ちしよを出し、猪口にひょうたんの中の酒を注ぎ始めた。

「あの……」

自分を無視するかののような態度をとるその女に、鳳郎は遠慮がちに声をかけた。すると女は、そんな鳳郎が面白かったのか、軽く笑った。

「予期せぬ客の来訪で、驚かせたか？ いい加減この部屋の主に挨拶なしでいるのも失礼だろう。私は狐だ」

女がそう言うと、女の頭に狐の耳が生え、狐の尻尾も数本生えた。

「う……うわッ！」

鳳郎は驚き、後ろに尻もちをついた。そんな鳳郎の様子を見て、女……妖狐はまたカラカラと笑った。

「自分以外の妖怪の類を見るのは初めてと見えるな。ずっとここに閉じ込められていたなら無理もあるまい。案ずるな、危害を加えようとしてやってきた訳ではない」

妖狐は落ち着き払って酒を飲む。まあ、危害を加える気があったとしても、不死である鳳郎に何ができるはずもない。鳳郎は気を取り直して声をかけることにした。

「あの……門番が居るはずなのですが？」

「私は妖狐であるぞ？ 簡単には死なぬと言っても門番は人間。化かすのは造作もない。相手が死なぬと分かっていたら、それなりの対応のしようはいくらでもある」

にやりと微笑んだ妖狐の顔に、なぜだか恐ろしいものを感じて、鳳郎は少し体が震えた。

「名は何と言う？」

「鳳郎……です。あの、あなたの名前は？」

「私の名か。私は固定の名前を持たぬ。門番を化かす時には桔梗ききょうと名乗ったが、名で呼びたいならばそれで呼ぶと良い」

「はあ……では桔梗殿。こんな埃ほこりっぽい所に何の用事？」

桔梗と名乗った妖狐は、酒を一口飲むと鳳郎に向き直った。

「その問いに答える前に私のことを話しておこう。私は数千年を生きた妖狐だ。大陸のとある森の中で、妖狐達の長をしている。しかし生まれた土地はこの島だ。大昔に力を磨くために大陸に渡った」大陸の狐か。大陸には人間の他にも、力を持った魔物や妖怪もたくさんいると聞いた。この島にもいるには居るだろうが、鳳郎は出会ったことはない。

「大陸で暮らしていると、どうも海岸の近が騒がしい。その近くに人間にまぎれて行ってみると、この島の人間達が大陸に攻め込んできているというのが分かったのだ」

鳳郎の血の気がサツと引いて行った。何か嫌な予感がする。

「侵略行為大いに結構。そう言う場所には負の感情が集まりやすく、そこに居るだけでも心地よい。しかし、島からやってくる人間達がどうにもおかしい」

間違いない。その島の人間達というのは、北の国の人間達のことだ。

「死しないのだ。槍で刺しても、弓矢で射ぬいても、すぐに立ち上

がって攻撃をしてくる。薬をやっているのは違う。何かもつと別の力によるものだ」

それも、鳳郎の血を飲み、不死となった人間達だ……。

「情報を集めて行くと、それはどうやらこの島の四国のうちの一国に、赤き不死鳥が協力をして与えた力らしい事が分かった」

「……何ですって？」

鳳郎は今の桔梗の言葉の中の『協力』という単語に違和感を覚えた。言い方が違うだろう。協力などという言葉を使ったら、鳳郎自らが北の国に力を貸しているようではないか。

腑に落ちないような顔をしている鳳郎を見て、桔梗はクスリと笑って話し始めた。それは伝説を語るような口調だった。

「北の国の前の国王が病で死ぬと、悲しみにくれる姫の元に赤き鳥がやってきた。その鳥は言った。

『おお、なんと悲しいことだろう！ 私の愛する北の国の王が死んでしまった！ 彼はこの島のみならず、世界すべてを統べるに値する人間だったというのにッ！』

『仕方ありません。どのような優秀な人間であっても、死からは逃れることはできないのです。それは世界の絶対の真理。しかし私も、父が永遠の命を持っていれば、必ずや世界を平定し、皆が幸せに暮らせる世界を築いてくれたに違いないと信じています』

『今度は鳥がそれに答えた。』
『姫よ！ あなたにはこの王の血がしっかりと流れている。あなたならこの王に変わって、そんな世を築いてくれるに違いないと確信しています。だから私はあなたに力を与えようと思う』

鳥はそう言っ自分の体を傷つけ、その血を器に入れた。
『この血を飲みなさい。それによってあなたは不死となり、世界を平定する力を得るのです。これから私はあなたに血を分け与えます。北の国の王が成し遂げられなかったことを、あなたが継ぐのです』

姫はその血を飲み不死となった。鳥はその後も北の国に協力し、力を与え続けている」

桔梗は語り終えるとまた酒を飲んだ。

「……何ですかそれは？」

「だいぶ省いたが、北の国が言いふらしている『赤き鳥伝説』だ。実際は北の国の王や姫の賛美がもっと長々と続く。お主は北の国に自ら協力したということになっているのだよ。この国ではお前は聖鳥として扱われているが、一步国の外に出れば悪魔の鳥と呼ばれている。残忍な姫に不死の力を与えた凶鳥としてな」

目のくらむような衝撃に撃たれた。こうしてただ食い物にされているだけでも屈辱的なのに、外では自ら力を与えたことになっている？　なんと……なんと……。

「わ、私はそんなことはしていないッ！」

「そのようだな」

桔梗は、鳳郎が激昂しても落ち着いた態度を変えなかった。予想していた反応だったのだろう。

「さて、そこで私が何をしに来たかという話になる。私はな、私の故郷にそんな極悪な鳥がいるなら是非挨拶をしておかなければと思、久しぶりの里帰りついでにやってきたのだ。別に退治しようなどと思っただけで来た訳ではない。人間が人間をいくら殺しても私には関係のない話だ」

悪狐あくこと呼ばれる妖狐達が居る。主に、人間に危害を加える妖狐のことをそう呼ぶのだが、桔梗は悪狐に近い妖狐なのだろう。

「しかし、この島に渡り、この島の妖狐達に話を聞くとどうも噂と違うらしい。島の間人達は信じているようだが、妖狐達はさっき話した伝説を全く信じていないのだ」

「……なぜです？」

「誰もその鳥の姿を見た者がいないからだ。伝説では、王宮の中で

丁寧に扱われているということになっていくが、鳥の本分は飛ぶこと。それも、何処までも広がる大空を、誰にも縛られることなく自由に飛ぶことだ。しかし、誰もその姿を見た者がいない」

それはそうだ。鳳郎はこうして地下に閉じ込められているし、国には居る時すら誰にも見つからないように細心の注意を払ったのだ。目撃者がいるはずがない。

「妖狐達は、赤い鳥など存在しない。もし存在したとしても、捕まっつて利用されているのだらうと思っっている」

「……そう言えば、私のせいでこの島の動物達にも迷惑が……」

「そうでもない。人間達が支配の定義は、人間達を服従させた時だ。そこにその土地に住む妖怪や動物は含まれない。うわべだけを掌握し、その土地を支配した気になっているのだからいい気なものだと妖狐達は笑っていたわ」

それを聞いて鳳郎はホッと息をついた。迷惑をかけるものは少なければ少ない方が、気が重くならなくて済む。

「私は重要なものを守っているらしいこの部屋の門番達に近づいた。そして化かし、十分に話を聞いた後でこうしてお主に会いに来たという訳だ」

桔梗は再び酒を猪口につき、口に運んでそれを飲む。

「しかしこの国の人間は、厳しい環境で育つだけあって、味のある人間が多かったのだが、温室育ちの小娘ではダメだな。こんな小さな島を統一するのに何十年もかけたかと思えば、即座に大陸の国に向かって宣戦布告。島を統一したならば、まずは内政を重視し、国力を高めることが先決だろうに……」

「大陸の国は防ぎきれますか？」

「資源の差が大きすぎる。それに、相手が不死と分かっていたら、対策を立てればいい。お前の体一つで全軍の人間を不死にできるはずもあるまい？ 噂だが、これは不死の力を得る血だと言って、た

だの赤い水を飲まされて特攻させているという話を聞いたことがある」

「……ひどい」

爛姫は異常だ。別の種族、大量の人間を殺した鳳郎に対してひどい扱いをするならまだ分かる。屈辱的ではあるが、自業自得かと思うことだってある。しかし兵士たちは人間だ。それも、自分の国の……守つてやらなければならぬ宝のはず。それに対してその仕打ちには……。

「あッ！ そうだ桔梗殿、私をここから出してくれませんか？ そうすればこの国の不死は無くなる！」

見たところ、桔梗はかなりの力を持った妖狐だと思う。大陸の妖狐の集団の中で長をやっているくらいなのだから、その力はそこらへんの妖怪より遥かに強いはずだ。

「駄目だな」

しかし、桔梗はそれをあっさりと断る。

「な、なぜですか？」

「別に嫌がらせをしているわけではない。お前がその鳥籠から出たら何をするのか興味もある。しかし……」

桔梗は言いながら檻の錠前しじょうまへに触れる。すると強い光が発生し、バチバチと大きな音と共に桔梗の腕が弾き飛ばされた。桔梗の手を見ると、少し焦げていた。

「桔梗殿ッ！」

「何、ただの火傷だ」

そう言つて桔梗は自分の手をぺろりと舐めた。

「見ただろ？ この檻は強い力を放っている。特に、私のような妖怪を抜く力が強く練り込まれている。触ればこのように吹き飛ばされてしまう。これは錠前の形をしていて、鍵穴もあるが、これを

開ける鍵は存在しないだろう。これはお前への憎悪が錠前という形になったものだ。あの小娘め、政治に関しては素人だが、お前を閉じ込めておくことに関しては天才だな。人間達の怒りがお前に向く様にうまく仕向けている」

そう言えば鍵らしい鍵を鳳郎は見たことがない。門番が持っているのを見たことがないし、ここに入った時にも鍵なんて閉めなかった気がする。なら、どの道人間を煽っても開けられるはずがなかったのだ。

「では、やはりこの檻からは出られないのですね？」

「長い時間をかければ開けてやれないこともないだろうが、そこまでしてやる義理はない」

鳳郎は気落ちした。これだけ長い間閉じ込められ続けていたから、外に出られる可能性が低いのは承知していた。

しかし、桔梗とのやり取りで、より一層外に出ることが困難なのだと思い知らされた。

やはり、このままここで食べ物にされ続けるしかないのか……。

「檻から出してやるほどの義理はないが、話くらいは聞いてやろう」
「……は？」

鳳郎が顔をあげると、桔梗はもう一つ猪口を出して鳳郎の前に置いていた。そしてその猪口に酒を注ぐ。

「見た様子では、食べ物もろくに与えられていないのだろう。酒とつまみくらいしか用意はできないが、これでもないよりはましだろうっ？」

鳳郎は遠慮がちに猪口と魚の干物を見つめる。これを食べてもいいのか？

「愚痴でもいいえ。お前は私が見てきた中でも、かなり理不尽な扱いを受けている方だ」

「あ……ありがとうございます」

鳳郎は目から熱いものがこみあげてくるのを感じた。

相崎の時とは違う。あの時は打算的に、鳳郎の機嫌を取ろうとして相沢は下手に出ていた。だから鳳郎も自分を取り繕って、何もかもをさらけ出すことはできなかった。

しかし今回は、上から目線でも受け止めてくれるという意思を感じる。

むしろ桔梗が、無理に鳳郎を立てようとしてくれないからこそ、鳳郎は何もかも話すことができる。

自分が理不尽な扱いを受けた時、どう考えたのか、どう傷ついたのか、どう悲しかったのか。

涙を零し、嗚咽交じりに、情けなくとも、今度こそ……心からすべてを……。

鳳郎は酒を飲み、魚をついばみ、感情を露あらわにしながら語った。

桔梗は、すぐに酒が無くなる鳳郎の猪口の中に、せっせと酒を注ぎながら話を聞いていた。時に相槌を打ち、時に野次を飛ばしながら……世間話でもするかのように話を聞いてくれた。

第十六話 『風船』

鳳郎ははじめ興奮して、脈絡もなく叫ぶように話をしていた。

しかし徐々に落ち着き、今は整理をして話ができるようになった。

これまで、鳳郎がこの島から飛び立ち、島で凰子や家族達と過ごし、その家族を殺され、海賊たちに復讐した所まで話し終わった。

そして今は、人間達を無差別に襲っていた時期について話している。

「数えきれない人々を、無差別に殺し続けました。これは大罪です。その罰が今の待遇であり、戒めがこの檻なのだと思います」

「ほう、人を殺すことは罪か」

桔梗は特に鳳郎を軽蔑することもなく、相槌をしながら酒を飲んでいる。

「はい、女神様もそう言っていました。この檻は、私にとって妥当な罰だろうと……」

鳳郎が目を閉じて思い浮かべたのは、最後に見た女神の後姿。女神は振り返ることなく居なくなつた。

その後も現れる様子はない。十分な罰が執行されたことに満足し、言葉通り見捨てたのだろう。

「ふむ……女神が間違っているな」

桔梗は突然そんなことを呟いた。

「はい？ 女神様のどこが間違っているの？」

「人を殺すことを悪と呼ぶのは間違っている。人が理由なく人を殺すことは人にとっては悪と言えるだろう。秩序が乱れるからな。しかしお主は人ではない、鳥だ。しかもそれなりの理由を持った殺人だ。それが罪だというならば、人が他の動物達を理由なく殺すことの方が圧倒的に多い。その罪に罰を与えず、なぜお主だけ罰を受け

ねばならぬ？」

鳳郎は一瞬賛同しかけたが、女神が言っていた言葉を思い出した。ひどく理不尽で、うまく理解できているか怪しい言葉だが……。

「神は裁きを与える時、その存在の立場になつて罪を量るはかのだそうです。あの時海賊たちには罪が無かった。そして、私が自分の力ではなく、神の力を使って復讐することが罪だとも言っていたと思います」

「ほう……」

桔梗は愉快そうにやけながら顎に手を当てた。神の理論を興味深げに受け取っているように見えた。

「お主に力を与えたのは女神だ。お前がなにをするかを見こして力を与えたなら、女神にも罪があることになると思うが？」

「それは……」

鳳郎自身、確かにそうだとは思うが、自分は女神ではないのだから答えようがない。

「その後のお主の行動を罪と呼ぶのも理解できぬ。お主は何も自らの村に出かけて行って虐殺をした訳ではない。通りかかった目障りな虫を潰したようなもの。お主には家族の墓という守るべきものもあつた。それを守るために戦うことの何が罪か？」

桔梗は、空になつている鳳郎と自分の猪口に酒を注ぎながらそう言った。まるで神が目の前に居て、その神に対して不満を言っているかのような口調だ。

「熊が己の巣に迷い込んできた外敵を食い殺したら、罪があると言われたようなものだ。このような熊を罰しようなどと考えるのは人間くらいだろう。迷い込んだ方に罪があるとは微塵も考えぬ」

桔梗は若干怒りを覚えているようだった。表情や口調には現さないが、言葉に小さなとげがあるように感じられた。神という存在に

対して否定的な考えを持っているのかもしれない。

「やれやれ、創世そつせいの神とは言っても所詮は人の神だな。難しい言い回しで煙に巻いているが、結局人間が一番得をするように理論構成している」

「ですが、女神様の力で復讐することができたのですから……」

鳳郎は、桔梗をなだめようとして自分から折れた。結局、女神がいなければ何もできなかったのだと。

「ふむ……そうだな。力を与えられたお主が、不満を言う資格はないか……」

桔梗は冷静を取り戻し、猪口に注がれた酒を一気に飲みほしてから立ち上がった。

「さて、私はそろそろ行くでしょう。考えていた程度には楽しめたぞ、鳳郎」

「私の方こそ助かりました桔梗殿。何もできませんが、ありがとうございました」

桔梗は頷き、入ってきたときと同じように扉から出て行くこととした。

しかし、扉を開けたと同時に振り返り、鳳郎に声をかけてきた。

「お主、もしそこから出られたらどうするつもりだ？」

突然の質問。とつくの昔に諦めてしまったことだ。急に聞かれても、はつきりと答えることはできない。

「さて、どうするでしょう？ 私は一步外に出れば恐ろしい『赤き凶鳥』ですから、どのように生きるかはわかりません。鳳子は他者に認められるようになりたいと言っていました、それも叶わず……」

「お主はもう認められているではないか。凶鳥という恐怖の対象として」

桔梗は鳳郎の言葉を遮ってそう言った。鳳郎はその言葉の意味が

理解できず、首を傾げる。

「あの……意味が良く……？」

「認められるというのは何も好意的な意味だけではない。恐怖の対象としてであるうが、認知されればそれは認められたということができる」

桔梗は鳳郎に向かって右手を差し出し、その指先についている鋭い爪を見せた。

「私は悪狐だ。私に対する恐怖や憎悪は私にとっては贅辞も同じ。それが私の存在理由なのだから」

「……しかし」

「悪という言葉に抵抗があるか？ 悪とはいかなる意味か知っておるか？ 悪とは、人間に害があるもののことを言う。悪狐や凶鳥などという言葉は、人間達が勝手に言っていることだ」

確かに思い返してみれば、鳳郎は人間達以外から凶鳥と呼ばれたことはない。

「人から見れば悪だ。しかし、私のような存在から見れば、お主は悪にも善にも見えぬ」

桔梗には鳳郎の行動が容易に許容できる。桔梗にすれば人を殺すのは当たり前前の行為で、善や悪などという概念をあてはめるほどのことではない。だから鳳郎は悪とも善ともいえない。

「少なくとも、お主は赤き凶鳥として広く認められていることは断言できる。その名を聞けば震えあがる者達がたくさんいるだろう。」

お主はそれに誇りが持てるようになればいい」

桔梗の言葉をうのみにすれば、若干でも今の自分に自信が持てるかもしれない。

でも……。

「しかし鳳子は優しい鳥でした。このように認められることは望んでいないでしょう」

鳳郎はきつぱりとそう言った。今桔梗が言った言葉は、何度か考えたことがあるものだ。だが、結論はいつも同じ。鳳子はそんなことを望まない。恐怖の対象として認められることなど……。

桔梗はきつぱりと断ってきた鳳郎に少し驚いたようだった。しかし不快感を覚えたわけではなく、むしろその言葉が心地よかつたらしい。

「あくまで善き鳥として認められることを望むか。それも良いだろう。なんにしてもその檻から出られなければ何も出来ぬ。その檻から出た時、お主がどう行動するか興味はあるが、もう去らねばならぬ」

「……それではまたいつか出会えることを、桔梗殿」

鳳郎の言葉を聞くと、桔梗は扉をくぐって部屋から出て行った。

* * *

コツコツという歩く音が地下通路に響く。ここには普段人はいない。だから、そこを歩けば嫌でも歩く音が響いた。

桔梗はその音を心地よく耳に感じながら歩いていた。この足音を聞きつけて兵士がやってくれば、殺される可能性すらあるというのに。

「……ん。来たか」

遠くの方からバタバタと走る音が聞こえてきた。一人や二人の足音ではない。何も無いのにこんなに慌てて走ってくることはないだろう。ならば、侵入したことがとうとうばれたようだ。

「挨拶中に邪魔が入らなかつたのは幸いだった。あのような静かな場所に、怒声は似合わぬ」

桔梗は呑気にそう呟き、歩くのをやめて、ここに向かってくる者達を待った。すると、いくらも待たないうちに六人の男達がやってきた。そしてその中に……。

「あ、信二様！ どうしたのです？ そのような恐ろしい顔をして……」

桔梗は体をくねらせ、甘ったるい声と口調で一人の男に声をかけた。

「黙れ女狐ッ！ せめてその穢らわしい耳と尻尾を隠したらどうだッ！？」

声をかけられた男は激怒し、顔を真っ赤にしながらそう叫んだ。もちろん、桔梗は正体がばれているのは百も承知。耳や尻尾を出したままにしているのも分かっている。

「そのように声を荒げて……お好きでしょう？ 街を見ておりましたらそのような店を何件か見つめましたよ？」

「いい加減そのふざけた口調で話すのはやめるッ！ よくも……よくも騙してくれたな……」

「ふふふ……」

桔梗は腕を顔に当ててクスクスと笑った。そしてその笑い声は次第に大きくなり……。

「ふふふ……クククク……くはははははは！！ どうしたんだ信二様ああ？ 布団の中で私にあんなに愛していると云ってくれたではないかあ？ 赤子のようにしゃぶりつき、乱暴に私を抑えつけ、あんなに激しく私を求めてくれただろう？ まさか、また私の体が欲しくなったのかあ？」

桔梗は挑発的に言い放ち、太もを少し見せてにやりと微笑んだ。それが馬鹿にしていると分かっているから、門番の怒りはさらに高まる。

「やかましいッ！ また欲しくなったかだと？ どうも貴様の体は獣臭いと思っていたんだ！ 八つ裂きにしてくれるわッ！」

会話していた男がそう叫ぶと、他の五人もそれぞれ武器を構える。桔梗は焦るでもなく構えるでもなく、ただクスクスと笑いながら

対峙した。

「ところでどうやって抜け出してきたのだ？ 相方と共に、杭で壁に磔はりつけにしてやったはずだが？」

桔梗は散々門番から情報を聞きだした後、門番の両手首と両足首に杭を刺し、壁に磔にしたのだ。交代の時間まではかなりある。ならば、自分達だけで抜け出したということだ。

「いくらひどい怪我をしても治るんだ。手首を力づくで引きちぎってやった。百年近く不死のままにいる人間の狂気！ いくら妖怪であつても恐ろしいだろう？」

門番は少し誇らしそうにそう言った。他の人間ならまずできない。不死である自分達を特別視しているのが良く分かった。

「誇らしげに言う割には随分と覚悟するまで時間がかかったようだな？ 涙でも流しながら引きちぎったのか？ うん？」

「こ……この糞狐えー！」

門番は挑発に乗り、二人同時に襲いかかってきた。手には大きな斧を持ち、それが当たれば桔梗の体など真っ二つに切り裂かれるように思われた。しかし……。

「ぬああああ……あれ？」

門番は奇妙な光景を見た。飛んだわけでもないのに、視界がいきなり上昇し、ゆっくりと回転を始めたのだ。そしてそのまま天井にぶつかり、受け身も手をつくこともできずに床に転がった。

「力任せに振り回すだけでは、私には当たらぬ」

「ひい……」

飛びかかった二人以外の者達が、小さく悲鳴を上げて後ずさった。この者達は飛びかかって行った者達とは別の光景を見たのだ。目の前の女は軽く腕を振って前に出たようにしか見えなかった。それなのに、瞬きをした瞬間には、首が二つ宙を舞っていた。

「そこそこ力のある狐のようだ。しかし無駄だぞ」

桔梗の後ろから声が聞こえた。たった今殺したはずの男のものだった。

体の方が首を持ち上げ、その首を切られた部分に付けると、すぐに傷が塞がった。

「なるほど不死だな、面妖な」

桔梗は目を細め、いま自分が殺したはずの男達を見つめた。

「どうだ、傷一つ残っていない！これが我々の手に入れた力だ！いくら切られても瞬時に傷が塞がる。お前はいずれ疲れ果てて殺されるといふ訳だ！我々門番達だけで十分お前を殺せる」

実はここに居るのは全員門番だ。化かされた男は、腕を引きちぎって壁から抜け出した後、すぐに門番達を集めに走った。

そして、門番以外の者達には何も言わずにここへやってきた。なぜなら、他の者達に自分達の失態が知れるのが嫌だったからだ。

門番の仕事は良い。退屈だが辛くはないし、給料もいい。六人三交代だから休みも十分ある。そして何より不死の血を飲むことを許されている。ここまで好条件がそろった仕事はそうない。門番達は国が存続する限りこの職についているつもりだ。

しかし侵入を許したとなるとそうもいかなくなるだろう。ミスが一度もないのが、今まで門番でいられた理由だ。今回の侵入は、間違いなく門番達の失敗。責任追及は免れない。罷免される可能性がかなり高い。下手をすれば拷問されることすらあり得る。

だから門番達は考えた。内密に処理をしようとする……。

侵入の事実がばれなければミスもない。ミスがなければ責任追及はされない。自分達は不死なのだ。妖狐一匹狩るくらいなら全員でかかれれば難しくないだろう。門番達はそう考えたのだ。

「同じ妖怪の類として情が湧いたか？助けに来たはいいが結局檻

を壊すことができずに逃げ出したと見える。ざまあみる女狐めッ！」
「内心ホツとしているくせによく吠える。不死鳥を逃がしたとなれば罷免ではすまぬ。拷問の末の死……私の侵入を知って小便でも漏らしたのではないか？ 臭うぞ臆病者」

桔梗は服の裾で顔を隠し、反対の手で払うように手を振った。自分達の方が優勢なのに、ここまで馬鹿にされ続けて、門番達の怒りはさらに高まった。

「言わせておけばまたしても侮辱を……許さんッ！」

門番はまた襲いかかってきた。桔梗は動かない。門番にはそれが観念したように見えた。

「いたぶってやりたいところだが時間がない！ 首を切り落としてくれるわッ！」

「いたぶるのは私の方だ」

門番の目の前から桔梗の姿が消えた。

「なっ！ 何処に！」

「後ろだ」

門番はその声を聞いて振り向こうとしたが遅かった。

「死ね」

桔梗は門番の背中に手を当て、軽く撫でた。するとそれだけで門番の体中に切れ目が走り、門番の体は破裂した。

「ひゃ、ひゃあああッ！」

見ていた門番達は、今度は悲鳴を上げるだけでなくその場に尻もちをついた。首が飛ぶだけのとは違う。あたり一面に血が飛び散り、通路は真っ赤に染まった。

「ふ……ふふ、無駄だあ！」

だがそれでも門番は死ななかつた。飛び散った血と肉が一か所に集まって人の形を作り始める。

「死なぬ死なぬ！ 不死の血は絶対だッ！ お前がどんなに力を持つていたとしても意味がない！ ハハハハッ！」

復活した門番は笑った。しかし、笑ったのはその門番だけだった。「ならば……その右腕はどうした？」

「右腕え〜？」

桔梗に言われて、門番は右腕を見た。だが、右腕があると思った場所に、右腕は無かった。

「あれ……え……？ い、い……いてえええええッ！」

門番は自分の体から右腕が無くなっていることに気付き、自覚と共にやってきた痛みに転がりまわった。

「ハハハッ！ やはり、お主らは勘違いをしているようだ。戦争に行ったことがないんだ。知らなくても無理はない！」

桔梗の顔に黒い悪意のこもった笑みが浮かび、口からは恐怖を駆り立てる笑い声が響いた。

「お主らはこう思っているのだろうか？ 不死鳥の血を飲めば、一定期間は不死状態でいられると！」

門番達は互いに顔を見合わせて困惑する。門番達の理解はまさにそうだ。コップ一杯血を飲めば、半年は不死でいられる。そうじゃないのか？

「ククク……違うのだ。不死鳥の血が体の中に混ざっている間は不死で居られるが正解なのだ」

鳳郎の血は、他の人間の体内に入っても吸収されない。血は血のまま滅びることなく巡り続ける。体のあらゆる管の中を回り続ける。そしてそれが体外に放出されると不死でなくなる。

「戦争で体がバラバラに吹き飛ばされても再生はする。しかしその時、不死鳥の血が体外に放出され、不死でいられる時間がかなり減る。お前達の不死は完全ではないのだ。少々手間をかければ殺すことだってできる。まあ、お主らの姫の様に、浴びるほど飲んでる者

はそう簡単に死なぬだろうがな」

門番達はそれを聞いて狼狽した。自分達の認識が完全に間違っていたのだ。今まで侵入者なんて入ってきたことがないから、そんなことは全く知らなかった。

最後に血を飲んだのはいつだった？ 数力月は前のはずだ。仲間は今も片腕を抑えて転がりまわっている。自分達も、あのような激痛を味わうことに……？

「ひ……うわあああッ！」

門番の一人が逃げ出した。それにつられて、二人三人と逃げ出す。しかし……。

「!?!? 何だ、前に進めない！」

そこには壁なんてない。ただの通路だ。たつた今ここを通ってやってきたんだから間違いない。ここは通れるはずだ。なのに前に進めない。そこに見えない壁があるかのように！

「そこにはなにもないぞ？」

桔梗がゆつくりと歩きながら声をかけてくる。その手には小石が握られていた。

「見てみる」

桔梗は小石を軽く放る。門番達は何か仕掛けがあると身構えたが、それは門番達の横を素通りして床に落ちた。

……素通り？ だって今ここは通れないはずじゃないか？ 見えない壁で封じられてるはずだろう？

「お主らは化かされているのだ。そこに見えない壁があると思いつまされている」

「な……何がどうなって……」

門番はその場に座り込んで見えない壁を通り抜けようとする。しかし無駄、一ミリも前に進まない。

「化かされるのは意識のある者だけだ。小石は意思を持たないから

化かされぬ。そこに壁があると錯覚などしないから素通りして床に落ちる」

「さ、錯覚……だって、ここに……ほ、ほら！」

門番は力強く見えない壁を叩く。しかし通らない。

だがそこには間違いなく壁などない。だって、そこに壁があるというなら、殴りつける拳に痛みが走るはずだし、音だってするはずだ。なのにそれがどちらもない。

つまり門番達は、この通路でパントマイムをしているのだ。逃げなければ殺されるというのに、今まさに命が尽きようとしているのに、命がけてパントマイムをしているという訳だ。

「さて、なかなか愉快な見せものだが、私もそろそろ参加しよう。水風船は好きか？」

桔梗は突然門番達に質問をする。門番達はそれに答える余裕などない。

「私はあれが好きでな。水を詰めて膨らませ、相手に投げつけて遊ぶのが好きだった。だが難点がある。膨らませるのが非常に面倒臭い」

桔梗は言いながら近づいてくる。門番は必死で何もないとところを叩き、声を荒げて助けを呼ぶ。

「手の上に乗せ、針でさして割るというのも味がある。冷たい水がてのひらの中で広がるのは気持ちが良い。だが、続けて遊ぶには何度も膨らませなければならぬのだ。一つだけでもいい。割ってもすぐに元通りになる水風船が欲しかった」

桔梗はついに門番達の手の届く場所までやってきた。門番達は何もないところを叩くのをやめ、桔梗の顔を見上げる。

「た、助けて……」

「さあ、何度潰しても元通りになる水風船は、何回割ったら元に戻

らなくなるかなあ？」

「この日……今まで一人も変わることもなかった門番が、すべて入れ替わった。」

第十七話 『少年』

桔梗が去ってから小さな変化が起こった。門番がすべて入れ替わったのだ。

はじめ鳳郎は、『聞き慣れない声の者達がいる』程度にしか思っ
ていなかったが、聞き耳を立てると、門番はすべて新しく入れ替わ
ったらしい。

桔梗の侵入が上の人間達に知られ、その責任をとって全員罷免さ
れたのだろう。しかし全員を罷免するとは厳しい判断だ。落ち度が
あった者だけを罷免すれば十分だっただろうに……。

鳳郎にとってはどうでもよい話だ。門番が変わったところで、自
分の待遇が変化することなどあり得ない。鳳郎はそう考えていた。

しかしこの新しい門番達は、ひどく不真面目な者達だった。

はじめはさすがに真面目に門番をしていた。何しろ、国の秘密兵
器といえる赤き凶鳥を守護するのだ。門番達は気を引き締めて任務
についたに違いない。

ところが、いざ仕事を始めてみると全くやることがない。任務に
ついて一ヶ月くらいは、見周りの者が来たりもしたが、それ以降は
採血以外まるで人が来ないのだ。

そして、守っているものと言えば、ろくに動きも鳴きもしない、
巨大な赤い鳥一羽だけ。しかも、その鳥は檻に入れられて何もする
ことができない。自分達がここに立っていることに疑問を感じ始め
るまで、そう時間はかからなかった。

門番達は、次第に労働時間をいかに楽しく過ごすかを考えるよう
になった。本や暇をつぶせる小道具はもちろん、賭けの道具や酒ま
でこっそり持ち込み、仕事を放り出して遊んだ。

採血に来る日は決まっている。その日だけ真面目に働けば、他の

日は遊び放題なのだ。ひどい時になると、職場を投げ出して、こっそり街に遊びに出かける始末。そんなことをしても上の人間にはされないのだから、上の人間達も門番の仕事を重要視していないのだから。

それくらい、鳳郎を閉じ込めている檻に信頼を寄せているということだ。侵入者を許しながら、結局鳥は持ち出されず、檻も無傷だ。桔梗の侵入は、警備の心を逆に弱めてしまったのかもしれない。

門番達が不真面目になる理由の一つとしては、鳳郎のことを良く知らないことがあげられる。

鳳郎が復讐に燃えていた頃は、『赤き凶鳥』と言えば、数えきれない人間を焼き払った恐ろしい化け物。傷を一つも負うことなく、国の軍を丸ごと灰に変えてしまうほどの力を持った恐ろしい存在だったのだ。

しかし今はどうだ？ その鳥は檻に閉じ込められ、抵抗することも声をあげることもなく寝っ転がっている。赤き凶鳥の姿は見る影もない。

実は門番達は、肩すかしをくらったのだ。

赤き鳥は神林王国の救世主。王族と同等の扱いを受け、政治に意見を出している偉い鳥ということになっている。

新しい門番達もそう思い込まされていた。そのような重要な存在の守護なら、きっとやりがいも誇りも持てる立派な仕事に違いないと考えていた。

だがいざ対面してみると、埃っぽい地下室の真ん中に鉄の檻、その中に横たわる埃まみれの赤い鳥。

呆然としているところに真実を聞かされ、けして口外しないことを誓わされた。やる気が削がれたなんてものじゃない。

そうして門番達は遊び呆けるようになってしまった。

しかし、結局それくらいだ。やはり鳳郎のここでの暮らしが変わ

ることはなかった。門の向こうから聞こえてくる話声の声質が変わった程度。

今の門番たちなら、煽つてやれば扉を開けかねないが、これは簡単に開けられる扉ではない。鳳郎の囚われの生活はいつも通りだ。

* * *

ある日、門番達は二人とも街に出かけて行ってしまった。今日は採血のない日だ。きつと勤務時間いっぱいまで遊んでくるのだろう。今この近くに人間は誰一人いない。まるでこの場所が忘れ去られてしまったかのように……。

静寂が鳳郎の周りを包む。門番が変わってから、前以上にこの部屋は静かになった。音と言えば、ネズミの鳴き声やどこかで水滴が落ちる音がするくらい。

鳳郎は眠っていた。時折周りから聞こえてくる小さな音は子守歌だ。門番達の話声よりは遥かに心地よい。鳳郎は浅く長く眠り、夢の世界に浸る。

「……ん？」

鳳郎は人の気配を感じて目を覚ました。通路を歩く人間がいる。鳳郎は門番達が帰ってきたのだと思った。しかし、それにしても様子がおかしい。

ひたひたと忍ぶように歩いているのだ。

門番だったらこんな歩き方はしない。もっと堂々と歩いてくるはずだ。それは見回りの者や採血員であっても同じ。こそこそとする理由がないのだからこんな歩き方をするはずがない。

「泥棒か……？」

泥棒と言っても、民家に忍び込んで金を盗むような泥棒ではない。鳳郎の血を盗んでやろうと考える泥棒だ。

ここは城だ。警備が厳重なのだから城の兵士が、こっそり盗みにやってきたというところか？ 門番の警備がいい加減になると、こういうことも起こるようになるのか。しかし、血を盗もうと考えるとは、命知らずな発想だ。

鳳郎は、そんなことを考える人間に興味を持ち、体を起こして扉の方を見た。人の気配は、すでに扉の前まで来ている。何故かなかなか入ってこないが、部屋の確認でもしているのだろう。

ギイ……。

扉は開いた。最小限の音を立てながら、ゆっくりと扉は開いていく。

鳳郎は目を細め、その扉を開けた者の顔を見た。その者は……。

「……子供？」

入ってきたのは意外にも少年だった。鎧や剣を携えていない所を見ると、城の者でもないように思えた。

服は薄い布でできた質素なもので、所々破けてボロボロだった。

体中に泥やほこりが付いており、まるで泥だからの地面に寝転んだ後のように見えた。

体つきは貧弱……というより、ろくなものを食べていないように見えた。体は痩せこけ、顔色も良くない。

ぱっと見ただけで、貧しい子供なのだと分かったが、それがどうしてここに居るのか分からない。確かにここは地下で、華やかな城の中とは違うが、こんな子供がいる場所ではない。

鳳郎は困惑しながら少年を見ていたが、困惑しているのは少年も同じのようだった。周りを見渡し、檻を見て、鳳郎を見た。

そして、手に持った紙を確認し、慌てて外に出て、まわりを見渡したかと思うと、首を傾げながらまた部屋に入ってくる。

少年はしばらくそうやって落ち着かないように動き回っていたが、

やがて鳳郎を見据えた。

「お前……喋れるか？」

「……？」

鳳郎は、少年の問いに言葉を返すことができなかった。ぼうつと少年を観察していたからというのもあるが、声を出す機会も少なくとも一瞬声の出し方を忘れてしまっていたのだ。

「はぁ……喋らないよな……そうだよな」

少年は安堵したような、困ったような声でそう呟いた。その頃には鳳郎も、声の出し方を思い出していた。

「いや、私は喋ることができるぞ。すまない、声の出し方を忘れていた」

「！？ お、お前……しゃべって……」

少年の顔が一気に険しいものになる。この部屋に入ってきたときよりも慌てた様子だった。

少年はしばらく黙ったまま鳳郎を睨んだ。しかし、やがてもう一度少年は口を開いた。

「お前……凶鳥か？」

「……」

鳳郎は答えに詰まった。できればその問いは否定したいものだった。

しかしどうだろう？ 鳳郎は凶鳥でないとと言えるだろうか？ これだけ暴れ回り、人々を殺し、今では爛姫に不死の血を分けてしまっている。世界中に不幸をばらまいているという点では、鳳郎は間違いない凶鳥で、それを否定することなどできない。

「そうだ。私が『赤き凶鳥』と呼ばれている鳥で間違いない」

鳳郎は、あくまで凶鳥は呼称的なものであると解釈できるような答えをした。

きつと自分は凶鳥なのだろう。しかし、それを自分でも認めてしまったら、心の底から凶鳥になってしまうような気がして怖かった。だから少年にはぼかした答えを返した。

「そうか……お前が凶鳥か……」

少年は、鳳郎が凶鳥であることを認めると、目を見開いて驚いた。しかし、その目はすぐに据わり、手に持っていたボロボロの袋から何かを取り出した。

「お前がどうしてここに居るのかは知らない。ただ、お前が凶鳥だというなら、僕はするべきことをするだけだ」

袋の中には細長い棒のようなものが何本も入っていた。少年はそれを一本一本つないでいく。

その先端には、鋭い刃が付いていた。

「赤い凶鳥ッ！ お前はここで死ななきゃならないんだああ！」
「!?!」

組み立て式の槍を手に取ると、少年は鳳郎に向かってきた。一気に距離を詰めると、迷うことなくそれで鳳郎を突く。

不意を突かれた鳳郎は、避けることもできずに貫かれてしまった。

* * *

少年は、鳥を突き刺した確かな手ごたえがあった。鳥は避ける間もなかったはずだし、今もこうして自分が槍で貫いたまま動かない。完全に殺した。

「そうか……君は私を殺しに来たのか……」
「う、うわッ！」

少年は鳳郎が何事もなかったかのように話したことに驚き、後ずさる。

「だが、私はその程度では死ねない」
槍で突かれた傷は深かった。しかしその傷はあつという間に塞がり、傷跡すら残らない。

「ク、クソ！ 凶鳥めッ！」

少年は槍を強く握りしめ、もう一度鳳郎に向かってきた。鳳郎は少年をただ見つめていた。槍を振りかぶっても、それを突き出しても、己の体を突き刺してきても何もしなかった。

避けることもせず、声をかけることもせず、望むままに貫かれてやった。

「この！ この！ こいつめッ！ 死ねッ！ 死ねええええッ！」

少年は何度も鳳郎の体を刺し、切り、傷付けた。しかし無駄。

鳳郎の不死は完全。いくら傷つけようと、いくら血が飛び散るうとも関係ない。無限に塞がり、すべての傷が致命傷とならない。鳳郎は絶対に死ぬことはできない。

「まだ……だッ！ ハアアッ！ 喰らえ！ この……化け物めエ！」
「……………」

傷は治る。しかし痛みは感じる。だが鳳郎は悲鳴を上げなかった。槍で突かれる程度の痛みは、とうの昔に慣れてしまった。

「はぁ……はぁ……」

少年は疲れたらしく、その場に膝をついて荒く息を吐く。鳳郎は少年を気遣い、努めて優しい声を出して話しかける。

「少しは気が済んだか？ 少年」

「うるさいッ！」

まだ怒鳴り返してくる力はあるようだ。少年はその場にあぐらをかいて座り、鋭い瞳で鳳郎を見返してくる。

「お前さえいなければ、この島はこんなことにならなかったはずだ」

敵意を持つて少年は言った。だが鳳郎は、実際島がどうなっているか詳しくは知らない。あの爛姫が国王になつて政治を行っているのだから、ある程度は想像がつくが……。

「……よかつたら、島がどうなっているか教えてくれないか？」

「!? お前ツ！ どの口で……」

少年は激怒し、再び槍を構えて立ち上がった。だが、鳳郎と目があつた瞬間、動きを止めてしまった。この部屋に入つてきた時と同じ、困惑したような表情を浮かべて。

「……………」

鳳郎は黙つて少年を見つめる。少年の表情からは怒り以外の感情も感じ取れた気がしたのだ。

それは『怯え』の感情。噂の凶鳥と話しているのだから、多少怯えるのは当然かもしれない。だが、少年の怯えはそれとは少し違う……何か不安を感じているような、そんな怯えのように思えた。

「……僕……僕が生まれるずっと前、神林王国は他の三国に対して宣誓布告をした……」

「……………」

少年は、ポツリポツリと話し始めた。どんな心境の変化があつたのかは分からない。だが今は少年の話に耳を傾けるべきだ。鳳郎にはその義務がある。

爛姫は赤き血の効力を十分に実験してから、他の国に対して宣戦布告をした。神林王国は、険しい山脈と厳しい天候に守られ、他の国からの侵略からは非常に強い国だった。

だが神林王国は、同じ島にある他の三国と比べても、資源がかなり少ない。守ることはできても、他の国に攻め入る力は無かつたのだ。

そんな国が、突如他の三国すべてに宣戦布告をした。

他の国からすればありがたい話だ。風の噂で、国王が死に、幼い娘が後を継いだと聞いた。

その娘が勝手に暴走し、臣下達もそれを止めることができないくらい力を失っているということだ。神林王国を自分の領土にすることができる。

しかし、現れたのは不死兵たちだった。予想外の敵に軍は総崩れ。何とか対策を立てる頃には、もう神林王国の優位は揺るぎないものになっていた。

「島は統一されて、爛姫の独裁が始まったんだ。おじいちゃんの話だと、その日から島から笑顔が消えたんだってさ。気持ちは分かるよ。現状を見ていればね……」

「……それほどひどいのか？」

鳳郎のその問いを、少年は鼻で笑う。

「ひどいなんてものじゃないよ。増税、厳罰化は当たり前。死刑方法が六つに増えて、公開処刑場も作られた。それに参加しないと、国民義務違反で処罰されるんだ」

鳳郎は顔を伏せた。爛姫に残酷趣味があるのは知っている。自分も長い間それに苦しめられた。

それは自分への罰であるとも思い、苦しみながらも納得はしていた。しかし、罪もない自分と同じ人間達にもそれを押し付けるとは……。

「僕達だって黙ってられない！ 昔の三国の人達が集まって反王国軍を作って対抗している。でも、不死の兵には敵わないし、例え爛姫の所まで行けても、爛姫自身が不死の血を飲んでるに決まってる。だから、島中に散らばって、国の兵士に苦しめられてる人達を助けるようなことしかできない……」

それだって勇気のいることだろう。そんな軍団に支援してくれる団体があるはずがない。自分達で武器を集め、自分達で人員を増や

し、巨大な国に対して戦いを挑むのだ。生半可な覚悟でできることじゃない。

「でもこのままじゃ終わらない！ だから考えたんだ。爛姫じゃなくて、すべての元凶の赤き凶鳥を何とかしよう」とツ！

「すべての元凶……」

鳳郎は自分で咳いて悲しくなったが、それを否定することもできずに口を噤む。

「僕の父さんは反王国軍の一人だった。なんとかこの中央都市に入り込んで、陣を敷いた。当然、この 町は警備が厳重だったけど、この元々神林王国であった場所でさえ、国への不満が高まっていたんだ。父さん達に協力してくれる人達も見つかって、計画は具体的になって行った」

あの爛姫が、初めから自分の国に住んでいた人間を特別視するとは思わない。自分の役に立たない人間はすべて同じ扱いをするのだろう。

「調べて行くと、城の地下に何かを隠しているということが分かった。父さんたちはそれが凶鳥に間違いないと考えたんだ。どんな特徴をしているか分からないけど、爛姫の話から想像することはできた」

そして少年は、鳳郎を見下ろした。

「その鳥は爛姫を敬い、不死の力を与えた。でもそれだけでは満足できなくなって、自分も政治に介入したくなった。不死の血を分け続ける代わりに、鳥は色々と要求を始めた。さっき言ったのも、全部鳥が姫にやれと命令したことだ。そして豪華な部屋に住んで、臣下達を顎で使う。逆らえば不死の血を分けてやらないぞと脅して、それでも抵抗するとき己の炎で焼き払う。実質鳥が国を支配しているようなもの。爛姫の公式宣言や、噂話を聞くとそうなる」

「……………」
爛姫が、怒りが鳳郎に向かうように仕向けているというのは、桔梗からも聞いて知っていた。爛姫を含め、一部の者しか真実を知らない。鳥が王族を顎で使っているなんて言ったら、普通は正気を疑われる。

だが、不死の血という絶対の証明が爛姫にはあった。これを振りかざし、涙ながらに証言すれば、爛姫の話信じたとしても仕方ないだろう。

きつと爛姫は、圧政を敷く中でも、赤き鳥の扱いだけには気を付けていたはずだ。

公式に宣言をし、噂を流し、偽の書簡をわざと反王国軍の人間に掴ませ、巧みに黒幕は赤き凶鳥であるということを擦り込んで行ったのだ。

無論、それで完全に爛姫への恨みが消えることはないだろう。しかし、鳳郎への怒りも同時に噴出する。それは鳳郎を永久に爛姫の物とするための鎖になる。

鳳郎の不死の血さえあれば、爛姫の独裁は失われない。

「それだけふてぶてしい鳥なら、見ただけですぐに分かるはずだ。場所と特徴は分かっている。後は、赤い鳥をどう処理するかが問題だった。とりあえず父さんたちは、協力して抜け道を作った。そして、子供一人分くらいの穴を掘ることができた。この穴を広げて、たくさん的人数が通れるようになれば鳥を処理する作戦も立てられる。だけど、いざ穴を広げようとしたら……………」

少年は俯いて槍を握り締めた。

「途中で計画がばれたんだ！ 父さんは僕をかばって殺された。他の人達も多く殺されて、残りは町から地方に散らばった。幸い、抜け穴の存在はばれなかったけど、穴だけ残ってもどうしようもない。計画は完全につぶれた」

少年の目からは涙がこぼれていた。

「僕はこの街に取り残されて、逃げ出すこともできない。だから、一人でも凶鳥を殺してやろうと思った。穴はあるし、僕だけなら何とか通れる。不意を突けば僕にだって殺せるはずだ。そう思って今日忍び込んできた」

少年はさつき持っていた紙を鳳郎に見せた。それは地図だった。恐らく、抜け道からこの部屋までの地図だ。

「僕はそうしてここまで来たんだ。扉を開ければ、そこには凶鳥がいるはずだった。恨んでも恨み切れない……僕の父さんの仇……贅沢し放題の凶鳥が……」

「だが、そこには想像していたのとは違った鳥が居たんだな」
少年は鳳郎のその言葉に目を見開いた。そして、もう一度俯く。

鳳郎は理解した。少年がこの部屋に入ってきたときに困惑していた理由を、少年が怯えている理由を……。

「シヨックだっただろうな。爛姫の話では、私はもつと美しい装飾の施された部屋で、豪華な食事をしているはずだ。きっとこの部屋に入る者に対しては尊大な態度で応じ、爛姫など目じゃないくらい憎たらしい存在だったはずだ。だが、いざ入ってみると部屋は埃だらけ、土だらけ。日の光も入らない薄暗い部屋の中で、さらに狭い鉄の檻に閉じ込められている」

鳳郎は少年を優しく見た。

「君は不安になったんだ。これは反抗国軍をはめるために用意された罠じゃないかと。誰も見張りがいないのは、侵入を待つまでもなく、反王国軍を根こそぎ殺すことができたからじゃないかと。この部屋は用済み。用済みになった部屋に、用済みになった鳥が一羽いるだけの場所。君はそんな場所にきてしまったんじゃないかと不安

だっただ」

だが、国は抜け穴の存在を知らなかった。反王国軍の存在は知っていても、何を計画しているかは知らなかったのだ。何をするつもりだったかは知らないが、計画を未然に防げて良かった。だから鳳郎に対して警備を強化することも、場所を移すこともなかった。

少年の問いに対して鳳郎が答えた時、少年の不安はとりあえず解消された。しかし……。

「今度は別の思いが君を襲ってきたんだ。私が本物だというなら、噂は嘘だったことになる。部屋の様子を見れば、私がどんな扱いを受けているか一目瞭然だ。部屋に飛び散った血を見れば、どんな方法で採血がされているか想像できる。君は思ったんだ。鳥も被害者だったんだと……。その鳥に対して自分がしたことが怖くなって、怯えてしまったんだらう？」

少年は怯えた。自分は、自分と同じく苦しめられている存在に対して罵声を投げかけ、怒りのままに槍で刺してしまった。怒りをぶつける相手を間違えた。

罪なき者に対して槍で刺してしまったのか？　自分は罪を犯してしまったのか？　知らなかったとはいえ、自分はそれをしてしまったのではないか？

大きな罪悪感。罪を犯してしまった不安から来る恐怖に、少年は怯えたのだ。

「自分が苦しい状況に居る中でも、他者の苦しみを考えられる。君は優しい子だね」

「うるさいッ！　凶鳥のくせに！　凶鳥のくせに！」

少年は同じ言葉を繰り返して槍を構える。しかし、呟くばかりで、鳳郎を刺そうとはしなかった。

鳳郎は、この少年が勇氣に溢れ、優しい心を持っていることを理解した。

「君の認識は何も間違っていないよ」

「……え？」

少年はフツと力を抜いたように見えた。

「私は凶鳥だよ。私がここに居ること、島の人々を苦しめてしまっている。だから私がすべての元凶というのは、何も間違っていない。私が捕まらなければ……いや、罪を犯しさえしなければ、この島の人々が苦しむことなどなかったんだ」

それは鳳郎が犯した罪。怒りに任せて行動し、この少年の様に、他者の苦しみを理解しようともせず犯した罪。

あの時鳳郎が間違わなければ、この少年のような苦しみを味わう人は出なかつたはずだ。

あの時鳳郎が間違わなければ、相崎のような家族と引き離されるような人は出なかつたはずだ。

鳳郎には罪がある。償いきれない罪がある。鳳郎は、まぎれもなく凶鳥なのだ。

「君の私に対する怒りは正当だ。その槍でいくら貫かれても、私は君に文句を言うことはできない。殺されてやれば一番いいが、それすらもできない」

罪を償うという究極の形が死だ。誰もがそれを最も重い罰であると認め、贖罪の方法として不完全であるとしながらも、重い罪を犯した者に対しては、それで償えと人々は訴える。

しかし鳳郎は、それをしてやることはできないのだ。ここで苦しむことでいくらかは償えるかもしれないが、ここに居ればまた別の罪が増えて行く……。

「君は若い。そして思いやりと勇氣の心を持っている。今日はここから逃げるんだ。生きて、力を付け、仲間を見つけて人々を救うん

だ。君にはそれができる」

鳳郎は努めて優しい声を出した。少年はきつと立派な人物になる。一人の力ではどうしようもなくとも、仲間を見つければ、いつか爛姫の独裁を破ることもできるかもしれない。父親に報いる方法があるとしたら、きつとそれが最善の方法のはずだ。

「……さい」

少年は小さな声で呟いた。そして槍を再び構え、顔をあげて叫ぶ。「うるさいッ！ 僕は別に国を爛姫から解放してやるうなんて立派なことを考えてきたんじゃない！ 父さんの……父さんの仇を取るために来たんだ！ お前を殺せずにおめおめと帰れるもんかッ！」少年はそう叫んだかと思うと、再び鳳郎を槍で刺した。

少年が槍を振るうたび、鳳郎の血の雫に混じって、違う悲しい水が宙を舞っていた。

第十八話 『生涯』

少年は槍で鳳郎を刺し続けた。

何度鳳郎の傷が治るのを見ても、腕が痛くなり始めても、手が血で滲み始めても、ただひたすらに、それがまるで義務であるかのよう……。うに……。

しかしやがて力尽きた。槍を握り締めたまま後ろに倒れ込み、荒れた息を整える。

「はあ……はあ……」

「これで無駄だと分かっただろう？ 君がここでできることはない」「うるさいッ！」

鳳郎の声に逆上し、少年は槍を投げつけた。それは檻に当たり、金属がぶつかり合う音が響いた。鳳郎はまだ少年が深い怒りに苦しんでいることを察し、口を嚙む。

「はあ……はあ……うう」

少年の呼吸に、嗚咽が混ざりはじめた。

「クソ……クソッ！ ちくしょうッ！」

少年はなぜ泣いているのだろう？

鳳郎を殺すことができない不甲斐なさからか？

死んだ家族のことを思い出しているからか？

それとも、生きていることに絶望してしまったのだろうか？

鳳郎にそれが理解できるはずもない。ただ少年は苦しんでいる。

それだけは理解できた。

「私の言葉で、君を傷つけてしまったかもしれない。すまなかった」
鳳郎はぼつぼつと話した。少年は聞いているのか分からなかったが、今度は逆上することはなかった。

「君が勇気と優しさに満ち溢れた少年であるということは分かる。私がこの地下に閉じ込められてから、私を殺そうとやってきた人間はいなかったし、私にわずかでも同情する人間はいなかった」
この少年は、深い悲しみの中に居る。以前の自分がそうだったように……。間違えて欲しくない、以前の自分のように……。

「君は生きるべきだ。君の父親は君を守り、君はこうして生きている。敵中に居てもなお生きている。これは奇跡だ。きっと君には、神が加護を与えているのだと思う」

絶望の中で、鳳郎は女神に出会って生きながらえた。きっとあの時の私は、同情に値する存在だったのだろう。

神の加護が、理不尽に苦しめられる存在に与えられるものだとするならば、きっとこの少年にも加護が付いている。

「君にはするべきことがあるはずだ。私を殺すことではない。もっと尊く、もっと大切な何かだ。君の父親は、人々を解放するために戦ったんだろう？ 君にはその血が流れている。その若さで、敵に立ち向かう強い心を持っている。それは将来、多くの人々を救うはずだ」

少年には生きて欲しい。この心優しい少年には……。出来ることなら、戦いに身を置くことはしないで欲しい。だがそれは無理だろう。ならばそれでもいい。

昔の自分に重ねているのかもしれない。散々人を殺しておいて、今更何を言っているんだと思われるかもしれない。

それでも……。この少年には生きて欲しい。鳳郎はそう思った。

「門番が返ってくるかもしれない。だから……」
「黙れよッ！」

少年は立ちあがって叫んだ。また槍を手に取るかと思ったが、槍は拾わなかった。

「なんなんだよお前はッ！ あれだけ槍で刺されてもまだ僕の心配をするのかよ！」

「気に障ったのなら……」

「そうじゃないんだよッ！ そうやって優しい声をかけられたら恨めないじゃないかッ！」

「え？」

鳳郎は予想外な言葉に驚いた。少年の顔は相変わらず怒りに染まっているのに、そこには憎悪が感じられなかった。

「想像してたのと違いすぎるんだよ！ 豪華な部屋は？ 召使は？ 目のくらむような宝石はどこにあるの！？ その中心に堂々と座って、城の人間達を顎でこき使う。凶鳥って言うのはそういう生き物なんでしょ？ 僕達の敵なんでしょ？ それなのに何なんだよこの部屋はッ！」

少年は腕を広げる。部屋を見渡し鳳郎に向かって叫ぶ。

「見るからにぜいたくな暮らしをしてそうなら恨みも湧くッ！ でもこの部屋は埃まみれだ！ 掃除もろくにされてない！ 格安の宿屋だって……貧乏人だってこんなところに住んでない！ 太陽の光が届かない！ 空気は汚れて息苦しい！ 一週間もここで暮らしたら病気になるそうなのひどい部屋だ！」

少年は鳳郎を指さす。その顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。

「上から目線で、高笑いをしながら僕を嘲笑うなら怒りも湧く。口汚く罵って、お前はクズだ、俺は偉い、食い物にされる奴が悪いんだというようなら怒りをぶつける気になれるんだッ！ それなのに……何で優しい言葉なんていうんだよ……。僕はお前に襲いかかったんだぞ……？」

少年はとうとう膝をついた。膝をつき、両手を拳に変えて床を殴

った。

「凶鳥だというなら、最後まで凶鳥のままにいるよッ！ 同情の余地なんて残すなッ！ 悪だと思っていた存在が善だったら、僕達は何処に拳を振りおろしたらいいッ！？ それじゃあ本気で恨めない……恨んでる僕達が馬鹿みたいじゃないか！ 結局僕は……復讐する相手を間違えて……うう、えつく……うわああああああん！」

少年はやはり優しい少年だった。悲しみと恨みの感情に押しつぶされそうになりながらも、盲目になることなく、鳳郎は恨みをぶつける相手ではないと理解した。

それがどれだけ難しいことかということを、鳳郎は知っている。

「……………」

鳳郎は胸が痛かった。少年の言ったことは凶星だったかもしれない。生きて欲しい？ あれだけのことをしておいて、これだけの事態を引き起こしておいて何を言うのか。

鳳郎には、少年に生きて欲しいなどという資格はない。怒りをぶつけるはけ口として、凶鳥を演じてやることすらしなかった。

罪は明らかだというのに、鳳郎は今もそれから逃げ続けている。抵抗すら……戦うことすらせず、爛姫に自分の血を与えている。これが逃げでなくて何か？

「結局私は、達観たっかんした気になっていただけだったのか……………」

少年の涙を見てそれに思い至り、鳳郎は深く恥じ入って、今度こそ何も言えなくなった。

*

*

*

少年は少し泣いた後立ちあがった。その顔にはわずかな笑顔が浮

かんでいた。

少年はふらふらと檻に近づいてくる。そして、檻のすぐ目の前までやってきた。

一体何をするつもりなのかと思い、鳳郎はその少年の顔を見上げる。

「お前をここから出す」

「……えッ！」

鳳郎は少年の言葉に驚いた。

「考えてみたら、お前が爛姫に自ら協力しているんじゃないなら、ここからお前を解放すれば全部解決するんだ。時間はかかっても、不死の血はいずれなくなる。そうすれば、僕達は一気に反撃することができるはずなんだ」

確かにその通りだ。少年の父親たちが一番困っていたのは、凶鳥をどう処理するかだろう。

凶鳥は不死のはず。それも、切り続けなければいつか死ぬなんて言う不完全な不死じゃない。どれだけ手を尽くしても殺すことのできない完全な不死だ。鳥を追い詰めたところでどうにもならない。

しかし、凶鳥が捕まっていると分かっていたなら、いくらでも作戦を考えられたはずだ。逃がせばいいだけなのだから。

「確かに私をここから出せればすべて解決するが……」

「でしょ？ この鍵を外せばいいんだよね？」

少年はそう言っつて錠前に手を伸ばす。

「待てッ！ 触るな！」

「え？」

少年は鳳郎が突然大声を出したことを不思議に思い、キョトンとした。鍵を触ったまま。

「……触れた？」

気が抜けたのは鳳郎も同じだ。前に桔梗がカギに触った時は、桔

梗の腕を弾き飛ばしたはずじゃないか。その桔梗の手はやけどを負っていた。なぜ少年が触っても何も起きない？

「そう言えば……」

『……この檻は強い力を放っている。特に、私のような妖怪を払う力が強く練り込まれている。触ればこのように吹き飛ばされてしま……』

桔梗はこう言っていた。この檻と鍵は、妖怪の類たぐいを封じ込めておくためのもの。だから人間である少年が触れても何も起きないのだ。しかし……。

「結構簡単な作りをしてるのに開かないな……この！ クソ！」

少年は何処からか取り出した針金を使って開錠かいじょうをこころみる。しかし開かない。開くはずがないのだ。

例えこの少年が鍵を開けることに長たけていたとしても、これは普通の鍵ではない。強い念のこもった魔の鍵だ。これを作った者にさえ、今となっては開けられるかあやしい。

「無駄だ。そんな物で開けられるものなら、とっくの昔に開けていた。いいから君は、ここから逃げ……」

「また『無駄』か」

少年は少しうんざりしたように言った。そして不敵に笑い、鳳郎を見おろす。

「お前が開けられなかっただけでしょう？ 僕は負けず嫌いなんだ。この鍵だけは絶対に開けて見せるよ」

少年はそう言い放って作業を再開しようとする。しかし、何かを思い出したように手を止めて、鳳郎に声をかけた。

「そつだ、お前の意思を聞いてなかった」

「私の……意志？」

少年は何を言い出すのだろうか？ 鳳郎にはこの少年の言っている意味が分からなかった。

「お前はここから出たいの？ 出たくないの？」

「え……？」

「思い返せば、僕はお前がここから出たいと言っているのを聞いた覚えがない。出ようとしている気配もない。僕がせっかく扉を開けても、俺は出たくないなんて言われたら意味がない」

鳳郎は動悸が早くなるのを感じた。

出る？ ここから？ 出してくれるというのか？

出たいかだつて？ そんなの出たいに決まつてる！ こんな場所に居るのは嫌だ……。

でもどうせ無理に決まっている。今までだつて無理だつた。

女神にすぎた。だが断られた。

桔梗にすぎた。でもダメだつた。

これだけの存在にすぎても無理だつたんだ。ここからは出られない。この檻に入っていることが自分への罰……。

でも少年は手を差し伸べてくれている。出してくれると言っているんだ。

無理無理ツ！ こんな小さな少年に開けられるはずがない。開ける方法なんて一つもないんだ。開けられるものかッ！

……あれ？ おかしいぞ？

何で開けられる、開けられないの話になつているんだ？ 少年の質問に答えてない。少年はそんなこと聞いてない。

少年が聞いているのは……。

「お前はここから出たいのか？ 正直に言っていんだよ？」

「……たい」

鳳郎は微かな声で呟いた。少年はそれに首を縦に振らなかった。聞こえなかつたわけじゃない。もっとはつきり言つて欲しかったの

だ。だから今もこうして、真剣な顔をして鳳郎を見つめている。
だから鳳郎は、今度は叫ぶように答えてやった。

「ここから出たいッ！ もう嫌だ！ こんなところで……こんな埃や塵まみれの場所に閉じ込められているのは嫌だッ！ 外の空気が吸いたい！ 太陽の光を背に、思いつきり空を飛びたい！ 川の水で喉をうるおし、海の音や風の音を聞きながら眠りたいッ！」

鳳郎はその場にうつぶせに倒れた。そして檻の中を涙で濡らす。
「こんな苦しいのは……もう嫌だ……」

鳳郎は苦しんだ。苦しむことによつて罪が消えることはない。しかし、贖罪はしたはずだ。

もはやここに居たところで、鳳郎にとつても、他の存在にとつても益はない。外に出ることを願つて悪いはずがない。

少年は鳳郎の最後のひところまで聞き終わつてからにつこりとほほ笑んだ。

「よし！ お前をここから出してやる！ 待つて……」

少年は鍵をガチャガチャといじる。しかしびくともしない。鉄がこすれる音に、鍵が外れる音が混ざることはない。

「針金じゃ外せないか……なら！」

少年は針金を捨てて、槍を拾つた。そして大きく振りかざし、力強く鍵に振り下ろす。

大きな嫌な音が部屋中に広がる。恐らく部屋の外にも届いているだろう。それくらい大きな音だった。だがやはり、鍵が壊れる様子はない。

だが少年は諦めず、何度も槍を鍵にぶつけ続ける。

「や、やめろ！ そんなに音をたてたら部屋の外にまで聞こえるぞッ！」

鳳郎は慌てて少年を止めようとする。しかし少年はやめない。

「誰もいないんだよ？ 聞いている人間がいないのになぜ気にする必要があるの？ それに、僕は負けず嫌いだって言ったでしょ？」
少年はそう言って作業を続ける。鳳郎は、少年がやめる気がないと知って、仕方なく鍵を見つめた。
大きく揺れる錠前。しかし壊れる気配はない。この程度では傷も付かないのではないだろうか？

途中、少年が作業を続けながら声をかけてきた。

「ねえ、お前名前はあるの？ 教えてよ。僕の名前は……」

言いかけて、少年は驚いたように扉の方を振り返った。表情は焦ったように曇り、汗をかいている。

「どうかしたのか？」

「たぶん……門番が帰ってきた」

「な、何だとツ！」

鳳郎も扉を見て耳をすませる。するとかすかだが、人の足音が聞こえてきた。その音はだんだん大きくなっている……。

「急がなきゃッ！」

少年はそう言って今まで以上に激しく槍を鍵に打ちつける。当然、音はさらに大きくなってしまふ。

「馬鹿ツ！ 逃げる！ 捕まったらどうなると思ってるツ！？」

「ここから出口までは一本道。逃げ道って言ったって、ここの地理はあっちの方が詳しいんだ。逃げられるわけがないよ」

少年の顔がちらりと見えた。焦ってはいない。

「諦めるなツ！ 負けず嫌いはどうした！ 逃げるのが無理なら隠れる！」

「隠れる？ 何処にも僕の体を隠してくれるものなんてない。それに諦めるわけじゃない。僕は最後までこの鍵を開けることを諦めない」

少年の顔は真剣だった。汗を流し、槍を持った手からは血が流れ

ている。この瞬間も、鍵を壊すことをあきらめていない。

「私はいいッ！ 何十年もここに居たんだ！ 今更出られなくても関係ない！ だが君はそうはいかないだろうッ？ 君には何十年かの未来があるッ！」

少年は、フツと笑った。

「ねえ、僕は赤き凶鳥と刺し違えるくらいのもりでここに来たんだよ？ 最初から死ぬつもりだったと言ってもいい。その先のことなんて何も考えてないし、僕には見えない。僕の未来は真っ暗に覆い隠されている。闇の中で手を伸ばしてもなにも掴むことなんてできないんだ」

少年は手を止めて、鳳郎に笑いかけた。

「帰ることなんて……考えていたと思う？」

その瞬間。部屋のドアが荒々しく開かれた。

「お前……何処から入り込みやがったクソガキッ！」

門番が二人入ってくる。

少年はその門番から逃げようとはしなかった。門番が入ってくるのと、再び鍵に向かって槍を振りおろし始めたのだ。その槍を門番に向けようともしない。

「鍵を壊すつもりか！ させねえッ！」

門番が二人がかりで少年をとらえようとする。若干の抵抗をしたものの、少年はあつけなく捕まってしまった。

「やめろッ！ その少年を離せッ！」

鳳郎が門番達に向かって荒々しく叫ぶ。

数十年声を荒げることなんてなかった。久しぶりにあげた怒号は、鳳郎の喉を裂き、痛みを走らせた。

「見ろよ。鳥がおしゃべりしてるぜ？ あんなにでかい声が出せた

んだなあ」

「鳥なんざどうでもいいだろうが！ 問題はこのクソガキだ」

「こいつ！ 離せ！」

少年は門番の腕に掴まれたまま暴れた。門番は少年を舐め切っているのか、槍を取りあげようともしない。

少年の持った槍が、門番の頬をかすった。わずかに血がこぼれた後、その傷はすぐに塞がってしまう。

「お前達……やっぱりお前達も不死なんだな！」

少年が怒りの表情を門番達に向ける。

不死は少年にとっては仇かたきのようなものだ。怒りを覚えて当然のこと。

「ああそうだぜ？ 羨ましいだろ？」

「羨ましいもんか！ 反吐が出る」

少年はそう言って再び暴れる。しかし大人と子供だ。少年は完全に抑え込まれてしまっている。

「で、このガキをどうするかだが……」

「今すぐその少年を解放しろッ！ そうしなければお前達を焼き殺してやるッ！」

鳳郎が檻の中からそう叫ぶ。門番はその脅しを鼻で笑う。

「はん！ そこから出られもしないくせに良く言っぜ。ガキ一人がそんなに大切かよ？」

「鳥には構うなって！ それでどうするんだよ？ 上につきだすのか？」

少年と鳳郎は、暴れながら声をあげている。しかし門番達は、それを無視して話を続ける。これは、門番達にとってはまずい事態だ。

「確か前の門番は、侵入者をここまで入れちまって首になったんだろ？ 処刑されたって噂まである。だったらこのガキを突き出すの

はまずいだろ……」

「真面目に警備してた途中で捕まえたんならともかく、サボってる間に入りこまれちまったんだからな……。ガキも余計なことを言うに決まってる」

門番達は目を合わせて頷きあつた。この少年をどう処理するか、二人とも合意したらしい。

「殺そう」

二人の声が綺麗にそろつた。その声は鳳郎や少年の暴れる音をはねのけて、部屋中に響いたように感じられた。

鳳郎はより一層暴れた。しかし、檻から出ることなどできない。

「よし、じゃあ死んでもらおうか。血が飛び散ってたって、鳥の血に混ざって分からねえ……」

門番は腰に携えていた短剣に手を伸ばした。

「赤い鳥ッ！」

一瞬の隙。門番の拘束が腕一本になり、力が弱くなったところを見計らって、少年は一瞬拘束から逃れた。

そして、槍を持つている腕を振りかぶって、鳳郎の檻に向かって投げた。その槍はまっすぐに飛んで行き……。

ガチャンッ！ カランカラン……カラン……。

鍵に命中し、鍵は壊れた。

「鍵が壊れた……？ なぜ？」

鳳郎は、開いた檻の扉を見てそう呟いた。

この檻には何重にも呪術が施されているんじゃないのか？

神をも封じ込める強力な呪術が。それがなぜ、非力な少年が投げた槍が命中したくらいで壊れるのだろう？

この少年は、鳳郎を縛っているものの、『象徴』のような存在と言える。

この島に住み、爛姫の圧政に苦しんでいる。ろくに食べるものもない。毎日、苦しめられている。

『圧政に苦しむ国民』

父親は、反王国軍の一人だ。少年自身も、その会議に参加したことがある。

『国への反抗者』

しかし少年自身は何もできない。敵を倒すことも、知恵も出すことも不可能だ。実際は守られるべき存在なのだ。

『弱者』

父親は、国に殺された。その恨みは深く、少年を一人で城の中に入りこませるほどに膨らんでいる。

『憎悪』

少年はまだ若い。国が荒れていなければ、その可能性は大きく、何処までも広がって行くはずだった。少年は本来守るべき国の宝だ。

『未来』

その少年が許した。

この少年に檻を開ける資格がないというなら、他の誰にある？

死の間際にあってもなお、少年は鳳郎を解放することにこだわった。檻を開けることにこだわり、槍を投げた。

その槍は、鳳郎を解放する……鳳郎を縛りつけているか背を開ける鍵となり、錠前を破壊した。

鳳郎の罪は、今許されたのだ。

「少年ッ！」

鳳郎は、扉が開いたと分かると、急いで飛び出した。そして止まった。

「ガキは死んだぜ」

門番の言葉。少年の胸には、門番の持っていた短剣が突き刺さり、心臓を貫いて反対側まで貫通していた。誰がどう見ても、少年は絶命していた。

ああまったく、生き物というのは簡単に死んでしまう。

どんな強者も、どんな弱者も関係ない。

どんなに善良な者でも、どんな不良な者でも、死からは逃れられない。

心臓を貫くだけで、頭を砕くだけで、首を落とすだけで命を落とす。

食事を断つだけで、呼吸を止めるだけで、不衛生な場所に閉じこもるだけでも死んでしまう。

それは生まれた者としての運命たぐひ。誰もが逃れることのできない絶対の宿命。

突然命を奪われる者達のなんと多いこと。自然死で命を失う者達のなんと少ないこと。

老衰による死であっても、突然かつ理不尽な死であることに変わりはない。

ならばせめて、死期くらいは自ら選びたいと願うことの、一体どこが悪だと言えるのか？

ともかく、今この瞬間、少年の短い生涯はその幕を閉じたのだ。

第十九話 『凶鳥』

「ガキは死んだぜ」

その言葉を聞いた瞬間、鳳郎は強い喪失感に襲われた。

出会ってからまだ数時間しかたつてない。昔からの知り合いでも、知り合いの子供ですらなかった。

それどころか少年は人間だ。あれほど恨み、あれほど殺した人間なのだ。

血のつながりなど無縁ない。親しくなつたわけでもない。むしろお互いを憎んだとしてもおかしくない関係だ。

その少年が一人死んだくらいで何だというのだろうか？

なぜあの時と……家族を殺された時と同じくらいの喪失感に襲われているのだろうか？

「おい、檻が壊れちまつたぞッ！ どうすんだ!？」

「ビビるなつて。相手はたかが鳥なんだぜ？ 剣で串刺しにして檻の中に戻して、扉は手で押さえておけばいい。その間に片方が適当な錠前を持つてくるんだ。それで扉を閉めれば分からねえさ」

失意の鳳郎を目の前にして、門番達はそんな会話をする。

門番の一人が剣を構えて無警戒に近づいてきた。

「笑えるねえ。ガキ一人死んだのがそんなにシヨックだったのか？

この国じゃ珍しいことじゃない。子供なんざ、毎日のように死んでる。餓死で、病気で、処刑されて。このガキもその一人だったというだけの話だ」

門番はそう言って剣を振りかざす。

「……つた」

「あん？ なんだった？」

鳳郎が小さく呟いたのを聞いて、門番の手が止まる。

「私は少年の名前も知らなかったんだッ！」

鳳郎がそう叫んだ瞬間、体から炎が噴き出して鳳郎を包んだ。

「うわぁ！」

門番は驚いてその場に尻もちをつく。

『鳳郎』

そして鳳郎は声を聞いた。それはどこかで聞いたことがある声だった。

あれは遙か昔……鳳郎が孤独に苦しみ、神に向かって嘆いた時に聞いた声。

あの時声は、鳳郎に自殺しろと言った。それを鳳郎は神の声だと信じた。しかし女神は、その声は神のものではなく、鳳郎自身の声だと言っていた。

ならばこれは単なる自問自答だ。だが、単なる自問自答が、今は重要なことに思えた。

『鳳郎よ、お前はまた怒りに任せてその炎を使うのか？ お前はこの数十年、その過ちに気付き、悔い、苦しんだはずではないか。それにもかかわらず、お前はどうしてまた炎を使う？』

「私は知った。自分がどれほど罪深い存在なのかを、どれほど愚かだったのかを、ここに閉じ込められ、苦しむうちにそれを知った。

今回は、それを理解した上で炎を使う！」

『なぜか？ 理解したならば、二度とその過ちを繰り返さないように努めるのが筋ではないか。二度と殺害などせぬと、二度と罪を犯すまいとするのが道理であろう？ 理解した上でそれをするのはなぜだ？』

「あの時の私には覚悟がなかった。ただただ怒りのままに力を使い、それによって自分がどのように思われ、どのような扱いを受けるかを考えなかった。それに気付いた時、私は傷つき、怯え、死を願っ

た。だが、今回は違う。今回は信念を持って行動する」

『信念？ その信念とはいかなるものか？』

「私の生み出した悲しみ、私の背負った罪すべてに責任を果たす。このまま逃げ出したなら、私はその責任からも逃げ出したことになる」

『しかし、他者から見れば同じこと。お前は大量の存在を炎で薙ぎ払い、巨大な恨みを買う。それはお前の願った……お前の愛した者の願ったことに反することになるぞ？』

「すべてから逃げ出し、今から凰子の願ったことに努めようとしても不誠実だ。むしろそれは、今まで以上に凰子を裏切ることになるそれに……」

鳳郎は少年の死体を見やった。

「『凶鳥なら最後まで凶鳥のままにいる』……その少年の遺言だ。

悲しみを生み出した責任として、人々の恨みのぶつける先になるうと思う。それが私のこれからの贖罪だ」

『そうか……凶鳥と呼ばれることを知りながら炎を使うならそれもいい。その瞬間、お前は凶鳥を受け入れることとなる』

鳳郎は一瞬だけ目を伏せ、儂げな表情を作る。

「私は生涯、嫌われし鳥だ……」

* * *

爛姫は玉座に座って頭を抱えていた。大陸侵略が思ったように進まない。

こちらには不死兵がいる。世界中どこの国を調べても、不死の兵を持っている国はないはずだ。これは大きなリードのはず。

だが、それにもかかわらず侵略は進まない。この島を統一するのにも、思ったより遙かに時間がかかってしまった。

不死兵が完全でないことなど分かっている。体中を砕けば不死の期間が大幅に減る。それでも死ににくいことに変わりはないのだから、とにかく突撃を繰り返せば勝てるはず。

戦場の隊長達にもそう指示を出している。勝手に姑息な作戦を立てていた隊長は罷免し、処刑してやった。それ以降隊長達は忠実に自分の指示を守っている。それなのに、なぜ勝てない？

兵士たちに飲ませる不死の血の量を増やすか？ 駄目だ駄目だ！
そんなことをしたら謀反を起こされかねない。

それに、血の量には限界がある。とにかく自分が飲む量だけは大量に確保しなければならぬし、上層部の人間にもある程度血を配って求心力を保たなければならぬ。いくらでも代わりがいる、下っ端の兵士達に大量の血を与える訳にはいかない。

しかしこのままでは……。

「爛姫様ッ！」

玉座の間に、近衛兵このえへいが一人飛び込んできた。

「何よ、騒々しいわね。私は今考え事をしているの」

「火事です！ 炎が城に広まりつつありますッ！」

窓から外を見ると、確かに黒い煙が上がっているのが見えた。

「お前ばかあ？ 火がついたんなら消しなさいよ。どうせちよつと体が燃えたくらいじゃ死なないんだから、炎の中に飛び込んで水ばら撒いてきたら？ ちよつとは頭を働かせなさいよ愚図ぐずッ！」

爛姫は近衛兵の報告を吐き捨てる。侵略がうまく行っていないだけでもイラついているというのに、火事くらい消せない低能な兵士しか居ないことに、さらに腹が立ってくる。

「そ、それが、火の元は地下のようでした……」

「地下？ 何で地下なんかで火事が起きるのよ。普通酸素が無くなって自然に消えるものじゃないの？ それに地下の大部分は土でできているはずだし、燃え広がるはずが……あッ！」

そこで爛姫は思い至った。地下から火の手が上がる原因に、久しく忘れていたその存在に……。

「なるほどね。じゃあ普通の火事じゃないわけだ。フッフ……」

「爛姫様？」

爛姫は意外にも愉快そうな表情だった。

この近衛兵は鳳郎のことを知っている。地下で火の手が上がったということは鳳郎が逃げ出したということだ。それを知れば激怒すると思っただが……。

「ちようどいい暇つぶしだわ。イラついていた所だし、久しぶりに凶鳥をイジメて遊びましょう。城の中の兵士をすべてここに集めて！ たぶんここに来るはずよ」

「は、はいッ！」

近衛兵は立ちあがって部屋を出て行こうとする。

「あ、ちよつと待って、それと他にも呼んで欲しい者達が居るわ」

* * *

鳳郎は炎を纏いながら地下の壁を打ち破って外に出た。久しぶりの空、しかしその空は曇っていた。このまま上昇し、雲の上に出て太陽の光を浴びたい衝動にかられる。

しかしその欲望を必死に抑え込む。太陽は逃げない。いつだってそこに居る。太陽の光は、誰にでも等しく降り注ぐのだ。その存在がある限り。

ならば、今は責任を果たそう。

鳳郎は城の上空を飛び、玉座の間を目指す。だがその場所を鳳郎は知らなかった。

だがその場所はすぐに分かった。禍々しい気配。爛姫の気配を、城の最上部から感じた。

爛姫が呼んでいるのだ。こっちに来いと呼んでいる。それを断る理由はなかった。

扉が開いていた。鳳郎はそこから堂々と玉座の間に入って行く。

「ようこそ赤き凶鳥さん？ あなたに会えて嬉しいわ」

爛姫が居た。初めて会った時と同じ言葉で鳳郎のことを迎えた。

その姿は若く、変わらず少女のままだ。不死の血を飲み、老いることも病むこともなく今日まで玉座に座り続けている。

玉座の間は相変わらず広く、派手な装飾が施されていた。その部屋に兵士たちが集まって、弓や槍を構えている。

「どうやって檻から抜け出したのかは知らない。でも、門番が変わった瞬間にお前が外に出たということは、門番達に問題があったとみて間違いなさそうね。あいつら全員首にして処刑してやるわ。不死人間の処刑ってなかなか見ごたえがあるのよ？ クスクス……」

爛姫には慌てた様子など微塵もない。常に上から目線で、他者を見下す態度を崩さない。

「変わらない爛姫。その姿、その性格……そして他者を食い物にしようとするその思想は、どれだけ生きても改善しないらしい」

久しぶりに相対した爛姫が、まるで変わっていないことを理解すると、鳳郎の中に哀愁の気持ちがかみ上げてきた。

「あら、褒められてしまったわ。もつとも、下位の存在に褒められた所でまるで嬉しくはないけどね。だって当たり前のことなんだから。最上位の存在の唯一の悩みよ。称賛が称賛にならない。この苦しみ、あなたには分からないでしょうねえ？」

鳳郎は首を振った。

「お前は本当に変わらない。お前のその姿勢が、どれほどの者達を苦しめているか分かるか？ ましてやお前は国王なのだぞ？ 上の者が下の者を思いやらないで、どうして国が豊かになる？」

「……はッ！」

爛姫は鳳郎の言葉を鼻で笑う。心底馬鹿馬鹿しいと思ったようだ。

「国を治めたこともない鳥風情が……。いい？ 国土が広がれば、自然に国民の生活も豊かになる。私が統一するまで、こんな狭い島の中に四つも国があったのよ？ 四つも国があれば、資源や人が偏り、成長の妨げとなる。これほど国民の利益を損なうことはないわ。今大陸に進出しているのも同じこと。国土が広がれば国は豊かになる。そうすれば国民の生活も楽になる。今貧困に苦しんでいるというなら、それはそいつが悪いのよ。己が幸せになれるかはすべて自己責任なんだから」

爛姫はそう言って周りを見渡した。すると、部屋中からそれを支持するように拍手が沸き起こる。

「お前の作った制度のせいで、苦しんでる者が大勢いる。それでも自己責任か？」

「自分の無能を環境のせいにならされてはたまらないわ。同じ制度の中でも成功する者と失敗する者が出るのは当然。優秀な人間が生き残れるというだけの話よ」

これにも部屋中から賛同の拍手が沸き起こる。爛姫がそれに手をあげて答えると、拍手の音はさらに大きくなった。

鳳郎は部屋の中をざっと見渡すと、爛姫に向かって言った。

「だが、お前がその椅子に座れているのは、お前の父親が王だったからにすぎない」

シン……。

拍手が止んだ。解釈によっては、鳳郎の意見に賛同できなかったから拍手を止めたともとれる。だがその静寂は、明らかに凶星を突かれたことの、気まずさを含んでいた。

「だ、黙りなさいッ！ お前達もさつきから何をやっているの！ さつさとあの鳥を撃ち落とさなさいよッ！」

爛姫の命令で、やっと騎士たちは攻撃を始めた。

鳳郎に向かって、大量の弓矢が放たれる。逃げ場はない。そのままそこに居れば体中を矢が貫く。

鳳郎は翼を広げ、大きく羽ばたいた。すると、体を纏っていた炎が矢をすべて焼き落とした。その炎はそのまま下に向かって降り注いで兵士たちに燃え移る。

「う、うわああああッ！」

「熱いッ！ 熱いッ！ 熱いッ！」

部屋中に響く悲鳴。部屋中に広がる人間の肉が焼ける臭い。さながらその光景は地獄絵図だった。

「ひ、怯むなッ！ お前達は不死兵だろうがッ！ 休まず攻撃を続ける！」

隊長クラスが存在が兵士たちにそう命令する。

だが無駄。どれほどの矢を放とうと、それは鳳郎に届く前に灰になる。仮に鳳郎の体に届いたとしても、鳳郎がそれで死ぬことはない。

「ああ、これは軍が丸ごと焼かれるのも無理はないわね」

爛姫は腕を組みながらぼーっと自分の兵士たちが焼かれるのを眺めていた。

最初から兵士たちが鳳郎を捕まえられるなんて思っていない。今城の中に居る兵士程度で捕まえられるものなら、赤き凶鳥などと呼ばれることはなかっただろう。

爛姫の目的は時間稼ぎ。爛姫は、兵士のほかに呪術師達も呼んでいたのだ。鳳郎がこの部屋に入ったのを見計らって、この部屋の外側に封印の呪文を施し始めているはずだ。後数十分もあれば作業は終わる。その間、時間を稼げばいい。

（馬鹿ね赤き鳥。あんたを閉じ込めていた檻は、所詮皿でしかなかったことを忘れたの？ あんたを封じ込めるための呪術は、今も町中にしっかりと施されている。この部屋を丸ごと皿の役割にすれば、またお前は力を失うわ。鳥頭は所詮鳥頭でしかなかったってことね。アハハッ！）

爛姫は心の中で鳳郎を嘲笑う。

自分は優秀だ。長い間誰も捕まえることのできなかった凶鳥を捕えたのは自分だ。今もこうして罫を張り、凶鳥を手中に収めようとしている。誰も自分のことを馬鹿になどさせないッ！

鳳郎は、あらかた兵士たちを蹴散らし、一気に爛姫に迫る。

「お前が最後だッ！」

「あはははッ！ 凶鳥、私のことを焼くつもり？ いいわよいわよ？ 焼けばいいじゃないッ！ でも私は、あんたを捕まえた日から血を飲まなかった日はないッ！ 分かるう？ それだけ私の不死は頑強なものになってるといふことよッ！ 一度や二度焼いたくらいじゃ死なないッ！ それでも私を殺すことにこだわる？ だってらそうしなさいよ、その間にあんたを捕まえて見せるわッ！」

爛姫は勝利を確信して高笑いを浮かべる。そんな爛姫を、鳳郎の炎が激しく包む。

「うわあああああ！ 熱いッ！ 熱いわねッ！ 忘れないわよこの熱さッ！ この苦しみッ！ 仕返ししてやるからね。お前をもう一度捕まえたら必ず味わわせてやる……前以上の苦痛をッ！」

爛姫は笑った。灼熱の炎に焼かれながらも笑って見せたのだ。覇

王として、威厳を失うまいとして必死に笑って見せた。

「……………」

鳳郎は厳しい目をして爛姫を見た。爛姫はそれを、鳳郎が焦っているのだと解釈した。

「ハハハッ！ どうしたの？ 私が悲鳴を上げなかったのがそんなに残念？ 苦痛の表情を浮かべなかったのがそんなに悔しい？ ざまあないわね。所詮あなたは私を超えられないッ！」

「私にお前を裁く資格などない。むしろ、私にも多くの罪があり、裁かれなければならぬ存在だ」

「はあ……………」

爛姫は、突然鳳郎と会話が成り立たなくなつて首をひねつた。とうとう会話もできなくなるくらいに落ちぶれたか？

「だが責任は果たさなければならぬ。そのために、お前を滅ぼす」
「何言ってるのよ。私は死なないわ。ほら、私の体を……………みな、さい……………」

爛姫は不思議だった。右腕を鳳郎につきだそうとしたが動かない。どうしたのだろうと右腕を見たら右腕が無くなっていた。

なら仕方ないと思つて左腕を鳳郎につきだした。左腕はちゃんとあつた。だが、左手は付いていなかった。

「な、何よこれッ！」

「言つただろう？ お前が最後だと……………」

爛姫は部屋を見渡した。

……………居ない。部屋の中には誰ひとりいなかった。部屋の中にはるのは、黒いすすのような塊ばかり。

そんなはずはない！ 爛姫ほどではないとしても、兵士たちだつてそれなりの血を飲んでいる。一度や二度焼かれた程度で不死が消えるはずがないッ！

「私の使う炎は神の炎だ。すべてを焼き滅ぼす絶対の炎。己の不死を焼くことはできなくとも、他者の不死を焼き滅ぼすことはできる」
爛姫は鳳郎に視線を移した。生まれて初めて、命乞いをするべきか迷った。

「お前の不死ごとお前を焼く」

「い……嫌よ……死にたくない。どうして私が死ななくちゃいけないの？」

爛姫の左腕が焼け落ちる。

「爛姫様なのよ……？ 国王様なのよ？ 私が居なくなったら誰が国を支配するの？」

爛姫の両足が崩れ落ちた。

「冗談じゃないわ……私まだ百年足らずしか生きてない。これじゃ不死だなんて全然言えないじゃない……」

爛姫の体が消え去り、残りは首から上だけになった。

「いやあああああ！ 誰か！ 誰か助けてッ！ お父様ああああ！」

首から上全てが灰になり、爛姫は死んだ。

* * *

「おい、城の方を見てみるッ！」

「何あれ？ 火事？」

町からも城が焼けているのが見えた。しかし炎の量が尋常ではない。城をすべて包み込むように炎が暴れ回っているのだ。

そして、城の中心からは巨大な火柱が立ち、今まさに街にも降り注いでいる。

「に、逃げろー！」

「何よあの炎！ 生きてるみたいに動いてるわッ！」

「み、見ろッ！ 火柱のてっぺんだ！ 鳥が……凶鳥が居るぞ！」

火柱の最上部に鳳郎が居た。まるで炎のような赤い翼、他の鳥とは比べ物にならないくらい巨大な体で、冠羽かんむりはねを揺らしながら飛んでいる。

その姿はまさに凶鳥。死を振りまく悪魔の鳥……。

そんな鳳郎の姿を、遠くの崖から見つめている者がいた。それは桔梗ききょうだった。

「鳳郎、あえて嫌われの道に行くのか？」

桔梗は問いかけるように呟いた。無論その声は鳳郎に届く訳もなく、空にとける。

「善き鳥として認められたいなら、いくらでも方法はある。戦争中の国のどちらか一方に味方すれば、守り神として崇めあがられるだろう。そこまでしなくても、病魔に苦しむ者に、お前の血を少し分けてやれば、その者から感謝される。その程度のこと、お前は善き鳥として認められる。お前はそれをせず、わざわざ荒々しい姿を人間に見せるのか？ その真意を隠し通して……」

聞こえるはずのない呟き。しかし桔梗には、炎を纏いながら空を飛ぶ鳳郎の姿を見て、返事を聞いた気がした。

「行くか……この鳥は炎に沈む」

桔梗は狐の姿に戻り、その場から立ち去った。

「呪え！ そして恨め！ 私こそが赤き凶鳥だッ！」

大きく羽ばたきながら、鳴き声をあげながら、嫌われし鳥は何処までも大空を飛んで行った。

第十九話『凶鳥』（後書き）

ここでほぼ最終回ですが、後二話ほど使って完結させようと思います。

第二十話『歴史』

赤き鳥は、島中を駆け巡って炎を放った。

その炎は大地を焼き、建物を焼き、人々を焼いた。

その炎の勢いの強さから、このまま島全体が炎に沈むのではないかとすら思われた。

しかし、島中が炎に包まれたにしては、多くの動物や自然が焼けずに残った。

生き残った者達が多くいたと言っても、島中を焼くような凶悪行為をした赤き鳥が恨まれないはずがない。しかもその姿から、爛姫に協力していた凶鳥であることは容易に想像がついた。

人々は怒り狂い。何もいない空に向かって呪いの言葉を吐き、赤き鳥の模造品もぞうひんを壊して怒りをぶつけた。

ところが、人々の怒りがひと段落すると、赤き鳥に対して別の見方をする者達が現れた。

『赤き鳥は爛姫の支配を打ち破り、神林王国の支配を徹底的に破壊してくれた』という意見だ。

当然その見解には反対論が多く出た。

爛姫の支配が破壊されたのは結果論に過ぎない。

赤き鳥を使っていたのは爛姫だ。爛姫が赤き鳥の機嫌を損ねるよくなことをし、その結果暴走させたに違いない。

そうであるならば爛姫の自業自得。真つ先に殺されたのが爛姫で、それによって神林王国の支配が壊れただけの話だ。

それに対する、赤き鳥が解放者であると考える者達の反対意見はこうだ。

確かに赤き鳥は島中を焼いた。大地を炎で包み、建物を破壊し、人を殺した。だが、その多くは神林王国の物であり、汚れた物だった。赤き鳥はそれを浄化してくれたのだ。

爛姫が死んだくらいで、神林王国の者達が支配をやめるものか。別の者が頂点に君臨し、第二、第三の爛姫になるだけだ。赤き鳥の徹底した破壊がなければ、支配から完全に抜け出すまでに数十年はかかったはずだ。

神林王国を完全に破壊し尽くした赤き鳥こそが、真の解放者なのだ。

二つの見方は対立し、激しい議論となって島中に広がった。

島の中が険悪な雰囲気に含まれる中、全く別の考え方が現れた。

それは、『赤き鳥などそもそも存在しなかった』という説である。

爛姫の支配下で、赤き鳥を見た者は誰ひとりとしていなかった。

人々が知っているのは、いつも爛姫が語っていた傲慢な赤い鳥の姿だけだ。

人々は、不死の血と言う強力な証明を見せつけられ、赤き鳥の存在を無防備に受け入れたが、それこそ間違いだったのではないだろうか？

赤き鳥が不死の血を与えたと言うのは間違いで、神林王国が不死になる薬を生成したというのが正解なのではないか？ 元々神林王国は人材が豊富なことで有名だった。不死の研究を行っていたとしても不思議ではない。

不死の薬の生成に成功した時、それを奪われることを恐れて考えだしたのが、赤き鳥の存在。赤き鳥が自ら協力してきたのだと主張することで、不死の薬の存在を隠し、守ったのだ。

島中を駆け巡った炎の正体は、神林王国が研究していた新型兵器

が暴走したと推理する。

だから、神林王国の関係者や建物に、特に大きな被害が出たのだと解釈できる。

人々が見た、炎を撒き散らしながら飛ぶ赤き鳥の姿は、爛姫に赤き鳥の存在をすりこまされていたことから見てしまった集団幻覚。それですべて説明がつく。

この、『赤き鳥非実在説』は島中に広がって行った。

そして広まるうちに、遙か昔存在したらしい『孤島に住む赤き凶鳥』と融合し、物語まで作られた。

ちなみに、孤島に住んでいた赤き凶鳥は、爛姫の圧政が始まると同時に、人々の意識から消え去った。

残されていたはずの資料は、その多くが失われて、今日ではその鳥が住んでいたとされる島も見つけることができない。

ただ、その凶鳥は恐るべき化け物だったという言い伝えが残っているだけである。

こうして赤き鳥の存在は幻想となり、地方によっては神聖視されるようになって、赤き鳥を祭る建物まで作られた。

『赤き鳥信仰』の始まりである。

さて、爛姫が居なくなつた後、問題になったのは島の統治である。支配者は居なくなつた。島の人間達は圧政から解放された。しかし、そのまま放っておけば、島中で暴動が起き、内乱状態となつてしまう。

そこで、爛姫が倒れた後、即座に反帝国軍が島中に散らばって統治を始めた。

わずかに残つた神林王国の人間達を悪として断罪し、自分達の正当性を島の人間達に示した。

島の人間達からすれば、自分達を支配していた神林王国の人間達の掃討戦を行った反王国軍が正義に見え、何の抵抗もなく反王国軍の統治を受け入れて行った。

元反王国軍の人間達は、どのような形で新統治機関を成立させるか悩んだ。つまり、どのような形で建国するか悩んだのである。

爛姫による支配は、元の四国の国境を破壊してしまった。各国の国王たちはすべて殺され、四国すべてが消滅してしまったと言っている。

そうならば、また島を分割する意味がない。つまり、島を一つの国として統治しなければならぬのだ。

そこで悩んだのが、国名や国旗だ

神林王国の名前は論外だ。それに、他の元三国の名前を使う訳にもいかない。

反王国軍の者達は、四国すべての者達で構成されている。反爛姫の下で国を超えて集合した団体なのだ。

ここで、特定の国の名前を使えば、必ず波風が立つ。

それに、王政廃止の風潮は、爛姫の支配以前からすでに少しずつ広まっていた。こんな形は望ましくはないが、島が新制度で出発できる絶好の機会なのだ。ならば、国名や国旗も新しいものに変えた方がいい。

そこで目を付けたのが、島の中で広まりつつあった『赤い鳥信仰』だった。

赤い鳥は、爛姫の支配を破壊し、島を解放した者とされている。

ただ、赤い鳥の影に、神林王国の影がちらついてしまうのが少し問題だった。

しかし考えようによっては、神林王国のやり方を間違っではいるが、古い体勢を破壊し、島を一つに統一したという功績もある。

爛姫は島を一つにまとめ、赤き鳥は支配を破壊した。解放と団結の象徴として掲げるのに、赤き鳥はうってつけの存在と言えた。

長い議論の末、建国が宣言された。

国名は全く新しいものに、国旗には赤き鳥を中心に描いた物が採用された。

赤き鳥が、国の象徴として認められたのである。

赤き鳥の国旗採用について、多少の反発はあったものの、生活が苦しかったこともあり、それほど国民が荒れることはなかった。

新体制の下で、島は大いに発展した。

昔は国境で阻まれていた人や物の移動が自由になり、経済的な成長を遂げて行ったのである。

外交面でも成功し、世界貿易にも参入して、島は豊かになった。

だが、島が豊かになると、今更のように国旗の鳥に対して不満が噴出しはじめた。

『島を混沌の地獄に変えた……侵略の原因となった赤き鳥を、国旗として掲げるのは異常だ！』

その主張はすべての国民に受け止められた訳ではなく、これに反論する者も多く居た。

『赤き鳥はそもそも存在しなかった。実在しない鳥にそこまでの思いを抱くことこそ異常だ。自分の国の旗として、素直に愛すればいい』

これに赤き鳥の国旗採用に反対する者は反論する。

『神話は神話だ。しかし、歴史の事実は事実として受け止めなければ

ばならない。神林王国が侵略したのは歴史の事実。それを想起させる存在を国旗として掲げるのは恥だ』

また赤き鳥の国旗採用肯定派が反論する。

『赤き鳥は、神林王国の支配を徹底的に破壊した聖鳥である。その聖鳥を旗として掲げているのだから、恥じるどころか誇るべきだろ
う』

議論は白熱し、反対派肯定派の議論が幾重にも絡み合って複雑化して行った。

とはいえ、基本的には机を隔^{へた}てて議論を交わすだけの平和的な争いだ。それによって戦争や暴動が起きることはない。

しかし、赤き鳥がもし実在したとしたら、自分の居ない所で勝手に善悪を語られるのをどう思うのだろうか？

それを知るすべを、人間達は持たなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4478v/>

嫌われし鳥の生涯

2011年11月23日13時51分発行